

文部科学省 WWL (ワールド・ワイド・ラーニング) コンソーシアム構築支援事業

2022年度

〈2022年度指定 第1年次〉

研究開発実施報告書

～ニューノーマル時代の地域創生を加速する高校生グレーター・ナゴヤ・プロジェクト～



2023年3月

名古屋商科大学系列校

名古屋国際 中学校
高等学校

NUCB INTERNATIONAL JUNIOR & SENIOR HIGH SCHOOL

ご挨拶

《事業拠点校》

本校は、平成26年に策定し令和4年にアップデートした中長期計画「The Next Frontier 2025（魅力ある国際教育イニシアティブ）」に沿って、グローバル人材育成に取り組んでいます。また、これまでに文部科学省「スーパーグローバルハイスクール（SGH）事業」SGHアソシエイト、文部科学省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）」を受けてきました。そして今年度からは「WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業」事業拠点校の指定を受け、継続的に研究開発を実践することができました。なお、テーマを「ニューノーマル時代の地域創生を加速する高校生グレーター・ナゴヤ・プロジェクト～グローバル拠点都市と世界を繋ぐ～」とし、さらなるイノベティブなグローバル人材育成に取り組んできた1年でした。

具体的には、学びの仮想空間として「多様な学びとヒトとの出会いの場」、「新しいアイデアと実践の共有の場」、「先進的な教育実践の情報発信の場」を実現させるために、メタバースを活用したMeta-Schoolの構築に取り組みました。12月に開催されたWWL高校生国際会議では、名古屋市以外の事業連携校とメタバースを活用した会議の中で、高校生の提言「New Borderless Education」を提唱することができました。まさにニューノーマル時代の会議を開催することができ、今後は世界の高校生たちと仮想空間（メタバース）内で会議ができるようにさらなる構築をしていく予定です。さらに、2月に開催されたWWL構築支援事業成果報告会（ConnectEd2023）では、STATION Ai株式会社代表取締役社長兼CEO 佐橋宏隆氏をお迎えし、「スタートアップエコシステムがつくる愛知の未来」というテーマのもと、特別講演をしていただきました。講演では「失敗を恐れずに行動し、自分の道を切り拓き、愛知から世界にステージを上げ、大きな挑戦をすることが大切である」と述べられました。これはまさに、本校の建学の精神「Frontier Spirit（開拓者精神）」に通じるものであり、この教育理念のもとでさらなる研究を続けていくことが使命であると実感することができました。

最後に、本研究開発実施報告書に記載の通り、各関係機関の皆様方から厚意のご支援・ご協力を賜り、本校の「WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業」の内容が着実に深化し、指定1年目が経過しましたことを心から感謝し、御礼申し上げます。

令和5年3月

学校法人栗本学園
名古屋国際中学校・高等学校
校長 小林 格

ご挨拶

《管理機関》

管理機関・学校法人栗本学園（名古屋商科大学）より一言ご挨拶を申し上げます。この度、名古屋国際中学校・高等学校が「ニューノーマル時代の地域創生を加速する高校生グレーター・ナゴヤ・プロジェクト」との取り組み名称で文部科学省「WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業」（令和4年度-令和6年度）にめでたく採択されましたことに心からのお祝いを申し上げますとともに、一年目の取り組みが順調に進展していることにお喜びを申し上げます。この事業の特徴は、①イノベティブな人材を育てること、②グローバルな人材を養成すること、そして③アドバンスト・ラーニング・ネットワーク（ALネットワーク）を作り上げること、以上の3点であると思います。この意味で本取り組みは、主として①については「文理融合・スタートアップ」をふまえた学際的なカリキュラム開発研究の形で、②については「カンボジア・ベトナム、オーストラリア、シンガポール・マレーシア、そしてカナダの4つのコース」での国際研修の形で、③についても「Meta-Schoolにおける高校生国際会議及びConnetEd2023」の実施の形で、順調な滑り出しを致しました。とりわけメタバースの取り組みには目を見張る進歩が見られます。許される文字数の都合上、ここに紹介しきれない優れた活動もまだまだ数多くあります。

本事業の推進体制についても、以前に令和元年-令和3年度に「持続可能なランドスケープの設計 ～天白川水系から世界を俯瞰する～」の取り組み（文部科学省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」グローバル型に採択）の時からご指導頂いてきた北村友人先生（東京大学・教授）および伊藤博先生（名古屋商科大学・教授）に継続して運営指導委員会に入って頂きました。加えまして、この度は新たに検証委員として鶴飼宏成先生（名古屋市立大学・学長補佐）、光永悠彦先生（名古屋大学・准教授）、そして小野裕二先生（名古屋商科大学・教授）の3名の素晴らしいメンバーをお迎えしました。

これによりさらにこの取り組みや活動が多角的な観点からの検証と改善につながり、このようにしてSociety 5.0に向けた人材育成がますます加速していくことを期待しています。そして、同じく実践的な教育に取り組む名古屋商科大学が進めているケースメソッド教育、そして商学部が中心に推進しているフィールドメソッド教育とのシームレスな連動につながりますことを祈念いたしまして、ここにご挨拶の言葉に代えさせていただきます。

令和5年3月

学校法人栗本学園
名古屋商科大学 商学部
教授 亀倉正彦

目次

【1】	本校の概要	1
【2】	研究開発概要	2
【3】	概念図	4
【4】	研究開発実施状況報告	5
【5】	令和4年度活動報告について	1 2
【6】	Meta-School（仮想空間（メタバース））構築	2 5
【7】	国際理解研修	3 0
	（a）行程表	
	（b）引率教員講評	
	（c）生徒レポート	
【8】	実践活動	
	[A] 学校設定科目WWL特論	4 4
	[B] 高校生国際会議（奈良県）	4 9
	[C] 全国高校生フォーラム	5 1
	[D] メタバース展示会視察	5 3
	[E] Business Design Club実践報告	5 5
	[F] SDGs未来倶楽部Sus-Teen!実践報告	5 7
	[G] 総合的な探究の時間	6 3
	[H] 高大連携講座	6 4
【9】	WWL高校生国際会議	6 6
【10】	ConnectEd 2 0 2 3	7 6
【11】	運営指導委員会（ALネットワーク運営委員会・検証委員会）	8 6
【12】	カリキュラム委員会（WWLカリキュラム開発会議）	9 1
【13】	講評	1 0 2
	○伊藤 博氏（運営指導委員）名古屋商科大学大学院マネジメント研究科教授	
	○北村友人氏（運営指導委員）東京大学大学院教育学研究科教授	
【14】	次年度に向けて	1 0 4
	○黒宮祥男 名古屋国際中学校・高等学校国際教育推進主任	

【1】本校の概要

(1) 学校基本情報

学校名：学校法人栗本学園 名古屋国際中学校・高等学校

校長名：小林 格

所在地：愛知県名古屋市昭和区広路本町1-1-6

電話番号：052-858-2200・052-853-5151

FAX番号：052-853-5155

(2) 課程・学年・学級数及び教職員数

① 課程・学年・学級数（令和4年4月）

課程	学科	高校第1学年		高校第2学年		高校第3学年		計	
		生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
全 日 制	普通科 (中高一貫)	89	3	71	2	72	2	232	7
	普通科	24	1	34	1	19	1	77	3
	国際教養科	38	1	61	2	37	1	136	4
計		151	5	166	5	128	4	445	14

② 教職員数（令和4年4月）

校長	教頭	教諭	養護教諭	常勤講師	非常勤講師	事務職員	委託事務 職員	用務員	計
1	2	27	1	2	36	3	5	2	79

(3) 学校の特徴

① 建学の精神

「開拓者精神（フロンティア・スピリット）」

② 5つのグローバルアクション

- (A) WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業 指定校
- (B) 国際バカロレア・ディプロマプログラム認定校
- (C) 国際教養科の設置
- (D) サステイナブルスクール認定校
- (E) 文部科学省教育課程特例校

③ 本校では、国際的に活躍できるグローバル・リーダーに求められる国際的素養を、次の5つの能力の向上によって醸成されると考えている。

- (A) 国際的な視野に立って思考する能力
- (B) 外国語でコミュニケーションする能力
- (C) 寛容な態度をもって問題を解決する能力
- (D) 物事を主体的に探究する能力
- (E) 自らを省察して多面的に評価する能力

【2】研究開発概要

期 間	ふりがな	がっこうほうじんくりもとがくえん	所在都道府県
令和4年度 ～ 令和6年度	管理機関	学校法人栗本学園	愛知県
	ふりがな	なごやくさいちゅうがっこう・こうとうがっこう	
	事業拠点校	名古屋国際中学校・高等学校	

令和4年度WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業 構想計画書

1 構想目的・目標の設定

（1）イノベティブなグローバル人材像

名古屋国際中学校・高等学校が、開校以来掲げるグローバルリーダーの行動指針は、以下の5つの能力を身につけさせることとしている。

- ・ 国際的な視野に立って思考する能力
- ・ 外国語でコミュニケーションする能力
- ・ 寛容な態度をもって問題を解決する能力
- ・ 物事を主体的に探究する能力
- ・ 自らを省察して多面的に評価する能力

この行動指針の能力を獲得させるために、本校は令和元年度文部科学省指定の「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）」（以下、地域協働推進校（グローバル型）とする）に取り組み、グローバル人材を育成してきた。この延長として本事業を通じて育成するイノベティブなグローバル人材像を下記の通りとする。

【目指すイノベティブなグローバル人材像】

「自らが出会う新しい時代の価値や課題を読み、新たな技術・スキルを身に付け、協働と革新を継続しながら新しい道を切り拓く人材」

本校が、卒業までに生徒に習得させる具体的な能力は、以下の5つである。

- ① コミュニケーション能力・・・イノベティブなグローバル人材には、自分の考えを相手に正確に伝えるための対話力が基盤となる。それには論理的に説明できる文章表現力及び基礎的な読解力が必要となる。さらに、表情や動作などの身体的表現を意図的に用いたり、相手の意図や感情を汲み取って共感的に理解できたりする力を身につけていく。
- ② 共生協働能力・・・個人や社会の多様性を尊重し、それぞれの強みを生かし、共に支え高め合える社会の実現を目指すための共生協働の精神を育み、社会的スキルを高めていく。
- ③ 自己管理能力・・・自分の目標や目的を達成させるための道のりで見つけられるために、自分をどれだけコントロールし、感性を磨くことができるかが、マネジメントを行う上で必要となる。そのために計画を立て、一つひとつをクリアし、探究活動をし、振り返りをし、着実に遂行する堅実さを身につけていく。
- ④ 情報活用能力・・・情報活用能力は、学習の基盤となる資質能力であり、情報の収集・整理・比較・発信・伝達・保存・共有から情報手段の基本的操作、プログラミング的思考、情報モラル、情報セキュリティ、統計まで幅広く身につけることは、課題解決学習に必要な能力となる。
- ⑤ 科学的思考能力・・・科学的思考能力とは、批判的な疑問・予想・条件制御・比較分類・モデル化・論理的な推論・総合的な判断の要素で成り立っており、イノベティブな新しいアイデアを生み出す原動力となる。

（2）ALネットワークの目的と役割

ALネットワークは、事業拠点校である本校の電子図書館から情報を発信し、また情報を集約し、アーカイブ機能を保持することとなる。そして様々な学校や団体が構成し、協力してイノベティブなグローバル人材を育成することを目的としたコンソーシアム体制を構築する。管理機関及び事業拠点校に加え、国

内外の大学及び国内外の高校、国際機関、スタートアップ、企業、NPO等の団体を擁するネットワークとなる。ALネットワークの役割として、以下の7つがある。

- ① 高校生のアントレプレナーシップの形成
- ② ALネットワークコンソーシアムの構築
- ③ グローバル拠点都市と世界を繋ぐカリキュラム開発
- ④ 高校生国際会議の開催
- ⑤ 海外からのインバウンド強化をし、留学生とともに学ぶ学習組織づくり
- ⑥ 高校大学大学院と連携をした単位先取り認定学習の構築
- ⑦ 生徒への講演会、教員の研修やセミナーの開催

事業連携校は、この取り組みの構築や改善に関与しつつ、それぞれが持つ独自のプログラムをALネットワーク内で共有する。また、国際機関、スタートアップ、企業、NPO等の団体も同様に独自の資源を共有すると同時に生徒や教員の研修に参加し、学校へアドバイスするなどして学校で不足する部分を補うこととする。

(3) 短期的、中期的及び長期的な目標

本校は、本事業を通じ、地域創生を加速させるためにアントレプレナーシップを醸成させ、グローバル拠点都市がスタートアップを起爆剤にイノベーション創出の土壌形成に関わり、世界と繋ぐことを下記の①～③の3つの目標とする。また、令和6年に名古屋市昭和区の鶴舞エリアでSTATION Aiが運用されるので本校の電子図書館と共用開始をする。

- ① 短期目標 令和4年～令和6年 Meta-School構築（対話セッション、国際会議開催）
- ② 中期目標 令和7年～令和9年 Meta-School強化（STATION Ai共用運用）
- ③ 長期目標 令和10年～
イノベーション創出土壌形成
（スタートアップ人材の創出）

（Meta-Schoolとは、仮想空間ツールを利用して、スタートアップとコラボレーションし、高校生のアイデアを反映させ、世界と地域が抱える社会的課題の解決を目指す学習の場）

本校は、NEXT FRONTIER 2025（ビジョン・中長期計画）を策定し、以下の3つのビジョンを掲げており、イノベティブな人材像やALネットワークの目的と役割を果たす元となっている。

- Vision 1 世界基準の魅力ある国際教育を先駆的に取り組む私立学校
- Vision 2 持続可能な国際社会に貢献できる高い志を持った国際生
- Vision 3 世界と日本の未来を担うリーダーとして活躍する卒業生

この3つのビジョンを実現するために、12のAction Planを実行する。

【3】概念図

名古屋経済大学
名古屋国際高等学校

ニューノーマル時代の地域創生を加速する高校生グレート・ナゴヤ・プロジェクト

～グローバル拠点都市と世界を繋ぐ～



【4】令和4年度事業実施計画

- 1 事業の実施期間：(契約締結日)～令和7年3月31日
- 2 事業拠点校名：名古屋国際中学校・高等学校(校長 小林 格)
- 3 構想名：ニューノーマル時代の地域創生を加速する高校生グレーター・ナゴヤ・プロジェクト
- 4 構想の概要：「高校生グレーター・ナゴヤ・プロジェクト」を構築し、ニューノーマル時代に生きるイノベティブなグローバル人材を育成する。「自らの地域課題の発見と解決に向けたアイデアの創出と実践」を事業連携校との共通の研究テーマとし、事業拠点校では地域との協働による高等学校教育改革推進事業(グローバル型)の研究課題を発展させる。生徒は、地域や国ごとの実践活動に対し、高度な専門的知識の習得や建設的な議論を行うために仮想空間「Meta-School」に参加し、多様な学びを体験できる場を得る。その過程において、事業協働機関や愛知県に拠点を置くスタートアップとの協働活動や留学生との交流により、イノベーション創出のための素養として必要なアントレプレナーシップを獲得する。高校生国際会議では、生徒・教員それぞれが議論する場を作り、WWL(ワールド・ワイド・ラーニング)対話セッションでは、一般参加者との交流も踏まえ、本事業の趣旨を広く普及啓発していく。
- 5 令和4年度の構想計画(本事業における教育課程の特例の活用：無)

令和4年～令和6年は、短期目標としてMeta-School構築(WWL対話セッション、国際会議開催)を計画している。その指定初年度として、以下の項目を実施する。

[1] ALネットワークの構築

令和4年度は、地域協働推進校(グローバル型)で構築した事業連携校・事業協働機関に加え、愛知県経済産業局革新事業創造部スタートアップ推進課を基軸としたアントレプレナーシップを持つ人材による対話を増やし、より先進的な取組の実践を可能としたネットワークの構築を図る。また、事業拠点校が持つ以下のネットワークから得られた情報や交流の機会を事業連携校に共有を図ることでALネットワークに所属する生徒にとって有機的なネットワークを目指す。

(ア) SGHネットワーク：文部科学省

(イ) #せかい部：文部科学省

(ウ) ASPnet(ユネスコスクール・プロジェクト・ネットワーク)：ユネスコ

(UNESCOパリ本部) 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)

(エ) 地方創生SDGs官民連携プラットフォーム：内閣府 地方創生推進事務局

(オ) 愛知県SDGs登録：愛知県政策企画局

(カ) 名古屋市SDGs推進プラットフォーム：名古屋市総務局

事業連携校・事業協働機関との交流においてはビデオ会議システム(Zoom)や仮想空間(メタバース)であるMeta-Schoolで行う。Meta-Schoolでは、ビデオ会議システム(Zoom)や対面以外の新しい交流の中で生み出される表現の自由度や交流の流動性などを検証す

る。Meta-Schoolのインフラ開発は、事業拠点校ICT・DX担当が行う。(9月に仮運用を目指す)

スタートアップによる特別講義は、デロイトトーマツベンチャーサポート株式会社(年間3回)、データサイエンス関連は名古屋商科大学(年間2回)を予定している。

事務局では、5月から事業連携校・事業協働機関との調整・連絡等の事務活動及び情報の共有や配信を実施し、Googleドライブによる情報集積のシステムの整備やInstagram/Facebook/Youtube等のソーシャルメディアの効果的な活用による情報やデジタルブックの配信を実施する。

ALネットワークの構築は以下の組織で実施する。

[運営組織]

管理機関：学校法人栗本学園 事業拠点校：名古屋国際中学校・高等学校
管理機関内にALネットワーク責任者を置き、次の協議会及び委員会を開始する。

◎ALネットワーク協議会(管理機関・事業拠点校・事業連携校・事業協働機関)

○ALネットワーク運営委員会(管理機関・事業拠点校)

・カリキュラム開発部：カリキュラムアドバイザーを中心としたカリキュラム管理

[事業協働機関]

名古屋商科大学(NUCB)・名古屋商科大学大学院(NUCB)・Macquarie University(オーストラリア)・国際連合地域開発センター(UNCRD)・愛知県経済産業局革新事業創造部スタートアップ推進課・日進市生活安全部市民協働課市民協働係・独立行政法人国際協力機構(JICA)中部センター・公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)・公益財団法人名古屋国際センター(NIC)・特定非営利活動法人アイキャン(ICAN)・中部国際空港株式会社・西日本電信電話株式会社(NTT西日本)・デロイトトーマツベンチャーサポート株式会社

[事業連携校]

名古屋市立名東高等学校・奈良県立国際高等学校・高知県立高知国際高等学校・国際高等学校・Immaculate Conception School of Baliuag(フィリピン)・Juan Diego Catholic High School(アメリカ)・Lycée Georges Clemenceau(フランス)・UCSI International School(マレーシア)

[2] 先進的なカリキュラム研究開発・実施

(1) 文理融合・スタートアップを踏まえた学際的なカリキュラム開発

(新たな教科・科目の設定)

(a) WWL特論：地域との協働による高等学校教育改革推進事業(グローバル型)で実践していたSIA特論の内容を継承してWWL特論として本年度4月より開講する。社会文化的視点(多文化共生と減災)、経済的視点(経済活動と貧困)、環境的視点(社会生活と循環)をキーワードにスタートアップに関する実践活動とALネットワークの効果的な活用を目指す。マーケティングや数的処理などの情報活用能力を高め、事業協働機関やスタートアップと連携するPBLの学校設定科目「WWL特論Ⅰ・Ⅱ」を学校設定教科「サステナビリティ」内に新設する。

(b) グローバル探究(総合的な探究の時間を使用)[高校1～3年生 1単位]:「多文化共生と減災」「経済活動と貧困」「社会生活と循環」についてグローバルな視点グローバルな視点の両方から学習する。高校1年次は、3分野の基礎学習とICTリテラシーや

文書作成、プレゼンテーションソフトのスキルについても学習する。高校2年次以降に生徒は各自取り扱う分野を1つ選択し、当該分野に関わる理想のまちづくりについて調査し、課題研究を行う。

(c) アカデミックリテラシー [高校3年生 4単位]：高校3年生を対象に、名古屋商科大学での授業を先取り履修する。単位数は、本校で4単位、大学で2単位としてそれぞれ単位認定する。

(d) English Skills I・II [高校1・2年生 2または3単位] / Project Skills [高校3年生 3単位]：ネイティブインストラクターが指導する科目。既存の学校設定科目であるが、英語での自己表現（ディスカッション、プレゼンテーション）、英語での情報収集（文献や海外ホームページ等）、英文による論文要旨の書き方等、実践活動に必要な英語スキル醸成に向けて指導内容を改編する。

(2) カリキュラムにおける海外研修・国内研修の実施

[海外研修]

令和2年度・令和3年度地域協働推進事業（グローバル型）において実施したオンライン型国際理解研修（カンボジアとオーストラリア）の実績を活かし、課題解決型学習（PBL）の国際理解研修を高校2年次で行う。対象生徒は実際に現地に赴く「海外フィールドワーク」と事前のオンラインによる研修に参加する。

新たな実践として、指定初年度は、事前のオンライン研修もしくは、海外フィールドワーク時に、事業連携校生徒がオンライン上で本校生徒と連携し、互いの課題研究におけるデータ収集の場となる研修を計画している。

[詳細]

カンボジア・ベトナム1週間コース（カンボジア・ベトナム）：8月17日～8月24日。近畿日本ツーリスト株式会社名古屋教育旅行支店。事業支援対象

[内容]

カンボジア・トンレサップ湖畔のコンボンブルック村においてフィールドワークを実施する。事前に、グループごとに国内にて探究テーマを設定し、オンラインにて現地とフィールドワークの計画を立てる。フィールドワークによる調査以外に植樹作業（“国際の森”：令和2年から継続しているマングローブの植樹）や歴史学習、現地学生との交流を計画している。

[国際理解講演会]

毎年開催している国際理解講演会を新たにMeta-School内に配信し、情報を共有する。

6月18日 国際理解講演会の実施（名古屋国際中学校・高等学校アトリウム）

講演者：日本特殊陶業株式会社 代表取締役 取締役会長 尾堂真一 氏

(スケジュール) (1) 講演・パネルディスカッション（代表生徒及びファシリテーター）

(2) インタビュー：代表生徒によるインタビュー

[3] Meta-Schoolにおける高校生国際会議及びWWL対話セッションの実施

(名 称) WWL高校生国際会議

(場 所) 事業拠点校及びオンライン (Meta-School)

(スケジュール)

5月 準備開始 (組織編成の確定)、事業連携校への概要説明

11月下旬 開始要項の決定

12月27日(火) 高校生国際会議開催

(内 容) 事業拠点校及び事業連携校における地域協働・国際性を軸とした課題解決に向けた実践活動の報告及びスタートアップによる講演と助言。仮想空間 (メタバース) 上で参加生徒が自由にコミュニケーションし、ビデオ会議システム (Zoom) では実現できなかった動きを交えた自己表現や一体感が生まれる活動を計画している。

・各学校での実践活動の共有

(名 称) WWL (ワールド・ワイド・ラーニング) 対話セッション

(内 容) 地域協働推進校 (グローバル型) で実施した対話セッションの実施方法を継承しつつ、ALネットワークを活用した多様な活動の発表に関する対話セッションを行う。より柔軟で多様な意見の集積を行い、高校生国際会議に向けた諸活動のブラッシュアップを図る。

(場 所) 事業拠点校及びオンライン (ビデオ会議システム (Zoom))

(スケジュール) 2月4日(土) WWL対話セッション

(参加者) 事業拠点校関係者・事業連携校・事業協働機関・一般参加者など

[4] 国際バカロレアATLに基づく生徒自己評価とアンケート実施による評価手法の検証
国際バカロレアにおいて用いられる「コミュニケーションスキル」「社会性スキル」「自己管理スキル」「リサーチスキル」「思考スキル」を活用し、本取り組みにおいて、生徒自己評価、担当教員評価、連携機関による評価を踏まえた評価方法の開発を目指す。

令和4年度からは、地域協働推進事業 (グローバル型) で課外活動として実施した生徒と企業が連携した活動の流れを学校設定科目に組み込むとともに、担当部門を立ち上げ、ATLに基づく評価方法で評価する仕組みを確立する。

(スケジュール)

5月下旬: アンケート部門の組織化及びアンケート内容の検討を開始

7月下旬・12月上旬・3月上旬: アンケートの実施及び検証

[5] カリキュラムを研究開発する人材の指定及び配置

カリキュラム開発部の設置及びカリキュラムアドバイザーを5月から配置する。カリキュラム委員会月1回実施し、カリキュラムアドバイザーによる助言をもとにカリキュラムの改善等を行う。

〈カリキュラムアドバイザー〉

氏名：木本 健太郎 氏

東京大学大学院新領域創成科学研究科修士課程修了。中学高校理科、高校地理教員免許・専修免許を保持。「環境プランナー」の資格を持つ。東京大学大学院在学中には自ら5つの会社を立ち上げるなどスタートアップの経験・実績を持つ。

勤務体制：カリキュラム開発部所属。対面ミーティング（月1回程度）、テレワーク（週2日）。勤務開始予定6月～。カリキュラム委員会への助言や提案を行う。

[6] 高大連携によるカリキュラム開発

- (1) アカデミックリテラシー：名古屋商科大学にて科目履修を4月開講（高校3年生）
 - 1st term（4月5日～5月31日）「心理学概論」教授 椿田貴史（名古屋商科大学）
 - 2nd term（6月7日～7月26日）「対人関係の心理学」教授 Park Joonha（名古屋商科大学）
 - 3rd term（9月3日～11月1日）「中東の社会と文化」教授 池田 美佐子（名古屋商科大学）
 - 4th term（11月8日～1月17日）「コミュニケーションと自己形成」教授 椿田貴史
- (2) WWL特論「高大連携」：4月から開講（高校3年生）
講師 砂原美佳（名古屋商科大学）
 - 1st term フィールドワーク（4月28日／6月23日）の実施。課題レポート作成。
- (3) 上記（2）の授業をMeta-School内のシステムに組み込み、令和5年度には事業連携校の生徒も受講できる体制を整える。

[7] カリキュラム開発における財政支援

- (1) ICT機器及び通信機器：
地域協働推進事業（グローバル型）実施にあたり、オンラインを使用した実践活動における通信環境の整備や教員が使用するICT機器（iPad・モバイルルーター・有線ケーブル等）の調達のために費用を負担した。
- (2) 国際理解研修（カンボジア・ベトナムコース）にかかる旅費、その他スタートアップに関わる新規プロジェクトや研究活動によって発生する交通費等を負担する。
- (3) 国際バカロレア・ミドル・イヤーズ・プログラム（MYP）の評価手法に関わる研修費用（IBOワークショップ）の負担する。
- (4) WWL先進校への視察に係る交通費を負担する。

6 事業実施体制

課題項目	実施場所	事業担当責任者
[1] ALネットワークの構築	名古屋国際中学校・高等学校 名古屋商科大学 名古屋市立名東高等学校 奈良県立国際高等学校 高知県立高知国際高等学校	小林 格・黒宮祥男 石井博巳・鈴木 麻衣子 久木田 隆宏 中尾雪路 廣瀬法民
Meta-Schoolのインフラ開発	名古屋国際中学校・高等学校	奥村仁崇・後藤彩可 神山清光・Christopher M Yap
[2] 先進的なカリキュラム研究開発・実施		
(1) 文理融合・スタートアップを踏まえた学際的なカリキュラム開発	名古屋国際中学校・高等学校 名古屋商科大学	(WWL特論) 内藤圭祐 ・伊藤 恵・河合航輝 (総合) 大西康介・近藤佑思 (留学) 鈴木 悟 (スタートアップ) 黒宮祥男・ Ussama Tanveer
(2) カリキュラムにおける海外研修・国内研修の実施	名古屋国際中学校・高等学校	大西直子 伊藤亘央
[3] Meta-Schoolにおける高校生国際会議及びWWL対話セッションの実施	名古屋国際中学校・高等学校	黒宮祥男 Christopher M Yap
[4] 国際バカロレアATLに基づく生徒自己評価とアンケート実施による評価手法の検証		
国際バカロレアATLに基づく生徒自己評価	名古屋国際中学校・高等学校	渡邊えみ・Laura L Abril
アンケート実施・分析	名古屋国際中学校・高等学校	伊藤 恵・深田歩未・鈴木真以
[5] カリキュラムを研究開発する人材の指定・配置	名古屋国際中学校・高等学校	木本 健太郎 氏 鈴木 悟
[6] 高大連携によるカリキュラム開発	名古屋国際中学校・高等学校	片山寿弘・大西直子・近藤佑思

7 課題項目別実施期間

業務項目	実施期間（契約日～令和5年3月31日）												
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
[1] ALネットワークの構築		協議会 ／ 協働事業計画開始									協議会		
Meta-Schoolのインフラ開発	検討開始	研修				仮運用			国際会議			分析検証	
[2] 先進的なカリキュラム研究開発・実施													
(1) 文理融合・スタートアップを踏まえた学際的なカリキュラム開発／研究発表	科目開始	委員会	講演会（全学年）・委員会	委員会		委員会／発表	委員会	委員会	委員会	委員会／高校生国際会議	委員会／WWLフォーラム	委員会／対話セッション	委員会分析検証
(2) カリキュラムにおける海外研修・国内研修の実施	説明会2回		探究学習開始		カンボジアFW2年		活動発表		活動発表				
[3] Meta-Schoolにおける高校生国際会議及びWWL対話セッションの実施		計画開始							高校生国際会議		対話セッション		
[4] 国際バカロレアATLに基づく生徒自己評価とアンケート実施による評価手法の検証				アンケート実施					アンケート実施			アンケート実施／分析検証	
[5] カリキュラムを研究開発する人材の指定及び配置		MTG	MTG	MTG	MTG	MTG	MTG	MTG	MTG	MTG	MTG	分析検証	
[6] 高大連携によるカリキュラム開発	科目開始FW											分析検証	

(注) FW（フィールドワーク）MTG（ミーティング）

【5】令和4年度活動報告について

【実施体制の整備】

(a) ALネットワークの構築

[協議会]

・第一回ALネットワーク運営指導委員会

日時：令和4年6月6日（月）11：20～12：20

場所：オンライン会議（ビデオ会議システム Zoom（Zoom ビデオコミュニケーションズ））

議事内容：令和4年度事業計画について

[課題項目]

【1】ALネットワークの構築

【2】先進的なカリキュラム研究開発・実施

【3】Meta-SchoolにおけるWWL高校生国際会議及びWWL対話セッション（年度途中に名称変更）の実施

【4】国際バカロレアATLに基づく生徒自己評価とアンケート実施による評価手法の検証

【5】カリキュラムを研究開発する人材の指定及び配置

・第二回ALネットワーク運営指導委員会・第一回検証委員会

日時：令和5年3月24日（金）12：00～13：00

場所：対面及びオンライン会議（ビデオ会議システム Zoom（Zoom ビデオコミュニケーションズ））

議事内容：①管理機関挨拶 ②令和4年度事業報告 ③検証及び質疑応答 ④指導助言

検証委員：鶴飼宏成 教授（名古屋市立大学学長補佐・大学院経済学研究科）

光永悠彦 准教授（名古屋大学大学院教育発達科学研究科・教育学部）

小野裕二 教授（名古屋商科大学商学部部長）

カリキュラムアドバイザー：木本健太郎氏

議事内容：令和4年度事業実践の報告

【1】国際教育推進部からの報告

【2】カリキュラムアドバイザーからの報告

【3】検証委員からの質疑応答

【4】令和5年度に向けた改善案と目標

[事業連携校との実践]

令和3年度連携協定締結校

・奈良県立国際高等学校：WWL高校生国際会議参加、国際理解研修（カンボジア・ベトナムコース）でのアイデアの共有やカンボジアからの実況配信（ビデオ会議システム Zoom（Zoom ビデオコミュニケーションズ））・仮想空間（メタバース）による事後報告会参加

・名古屋市立名東高等学校：WWL高校生国際会議対面参加及び留学生参加、同校国際英語科「第38回英語スピーチコンテスト」視察（令和5年2月11日）

・高知県立高知国際高等学校：WWL高校生国際会議参加、ConnectEd 2023 教員2名対面参加令和4年度連携協定締結校

・京都市立西京高等学校附属中学校：WWL高校生国際会議参加、本校教員2名による同校視察、教員2名生徒36名との本校での交流活動（令和5年3月8日）

(b) Meta-Schoolのインフラ開発

NTT XR Space WEB (DOOR) を使用した仮想空間（メタバース）を構築し、WWL高校生国際会議の実施をした。仮想空間（メタバース）は、まず実験的に国際理解研修報告会のための空間の構築を行い、10月に連携校の生徒に向けたポスター発表を実施した。仮想空間（メタバース）に関する検証後、WWL高校生国際会議に向けた空間作りを始めた。仮想空間（メタバース）に関しては、本校のDX担当教員及びビジネスデザインクラブの生徒を中心に製作を始めた。WWL高校生国際会議で使用した仮想空間（メタバース）は、本校の校舎内（アトリウム）をイメージしたものと国際会議をイメージした円卓を含めたものの2空間を製作した。

7 研究開発の実績

(2) 実績の説明

(a) 文理融合・スタートアップを踏まえた学際的なカリキュラム開発／研究発表

(i) スタートアップと関係した実践活動

令和4年 9月15日	ARUN Seed	代表理事 功能聡子氏	高校生国際会議の時の基調講演依頼
	ARUN Seed	チーフアドミニストレーター 池島利裕氏	高校生国際会議の時の企業アドバイス依頼
令和4年 10月5日	STATION Ai株式会社	代表取締役社長兼CEO 佐橋宏隆氏	イノベーション推進シンポジウム参加にて挨拶及び名刺交換
令和4年 11月18日	STATION Ai株式会社	代表取締役社長兼CEO 佐橋宏隆氏	対話セッション（ConnectEd 2023）の基調講演依頼
令和4年 12月27日	ARUN Seed	代表理事 功能聡子氏	高校生国際会議の基調講演者 「演題：持続可能な社会ってなに？ 未来に向けた私たちの挑戦」
	ARUN Seed	チーフアドミニストレーター 池島利裕氏	高校生国際会議企業アドバイス及び、指導講師
令和5年 2月4日	STATION Ai株式会社	代表取締役社長兼CEO 佐橋宏隆氏	対話セッション（ConnectEd 2023）の基調講演者「演題：スタートアップエコシステムがつくる愛知の未来」
令和5年 2月22日	Olive株式会社	Chief Executive Officer 竹内精治氏	スタートアップ企業（メンタルヘルス）紹介
	同行者	愛知県スタートアップ推進課主事 戸田 翼氏 愛知県スタートアップ推進課主任 金丸 良氏	

令和5年 2月22日	STATION Ai 株式会社	推進部 インキュベーション推進課 片岡裕貴氏	STATION Aiの学生起業家育成プログラム 中間報告会参加 名刺交換
令和5年 3月15日	Olive株式会社	Chief Executive Officer 竹内精治氏	生徒セミナー講師 「演題：生き方とベンチャー企業」

(ii) 文理融合を踏まえた学際的なカリキュラム開発

文理融合を実施する上でどのような形でカリキュラムに含ませるかカリキュラム委員会等で検討された点がいくつかあった。MYPに関しては、本格的な始動が令和5年度を予定しているため学際的な取り組みが実験的な授業であった。実施した授業においては、例えば、技術科（デザイン）と社会科をコラボレーションした授業を中学1年生で展開することができた実績から教科間でのコラボレーションをどのように実施していくかのモデルとなった。この点を踏まえ、令和5年度では、高校課程において文系科目と理系科目の学際的な授業を実験的に実施し、検討していきたい。

(b) カリキュラムにおける海外研修・国内研修の実施

(i) カンボジア・ベトナムコース

日 程：令和4年8月17日～8月24日

参加者：生徒11名、引率教員2名

内 容：・カンボジアコンポンブルック村でのPBL学習：2グループに分け、テーマを持った現地調査及び実践を行う。また、オンライン配信をすることで日本へ配信し、事業連携校も原理の様子をリアルに見ることや質疑応答に答えられる方法も検証した。

(ii) オーストラリアコース

日 程：令和4年7月24日～8月28日

参加者：生徒18名、引率教員2名

内 容：ホームステイを中心とした南オーストラリア教育省ISEC校プログラム・本科プログラムを受講した。土曜日は、南オーストラリア大学で在校生とのセッションを行った。

(iii) シンガポール・マレーシアコース

日 程：令和4年7月26日～7月30日

参加者：生徒12名、引率教員2名

内 容：本研修は「水」をテーマに行われ、マレーシアでは水環境問題の学習とセメンチュウ村でのホームビジット体験をし、シンガポールではシンガポール大学での研修プログラムやニューウォータービジターセンターの見学等を実施した。

(iv) カナダコース

日 程：令和4年8月1日～8月28日

参加者：生徒11名、引率教員2名

内 容：ホームステイを中心としたアルバータ大学語学センターで実施される研修にさまざまな英語プログラムを受講した。

(c) Meta-Schoolにおける高校生国際会議及びConnectEd 2023の実施

(i) 令和4年度WWL高校生国際会議

日 程：令和4年12月27日(火)

趣 旨：地域課題解決へ向けた若者のアイデアの実践発表と意見交換や事業拠点校・事業連携校などの生徒が自らの地域の社会課題解決に向けたアイデアと実践を英語による発表で行う。その結果、地域差による課題のあり方や国内外の多様な考え方を知るきっかけとなる。

開催方法：ハイブリッド型(対面およびメタバースを使用したオンラインを併用して実施)

対 面：名古屋国際中学校・高等学校

メタバース：NTT XR Space WEB (DOOR)

オンライン：ビデオ会議システム Zoom (Zoom ビデオコミュニケーションズ)

参加者数：62名

<詳細説明>

◎基調講演：(講演者) 特定非営利活動法人ARUN Seed 代表理事 功能聡子氏

◎アイスブレイク ～VRカンファレンスに慣れよう！～

◎ポスターセッション

◎VRカンファレンス

(ii) ConnectEd 2023

—WWL(ワールド・ワイド・ラーニング)コンソーシアム構築支援事業成果報告会—

日 程：令和5年2月4日(土)

趣 旨：地域課題解決へ向けた若者のアイデアの実践発表と意見交換や事業拠点校・事業連携校などの生徒が自らの地域の社会課題解決に向けたアイデアと実践を英語による発表で行う。その結果、地域差による課題のあり方や国内外の多様な考え方を知るきっかけとなる。

主 催：学校法人栗本学園 名古屋国際中学校・高等学校

開催方法：ハイブリッド型(対面およびオンラインを併用して実施)

対 面：名古屋国際中学校・高等学校

オンライン：ビデオ会議システム Zoom (Zoom ビデオコミュニケーションズ)

参加者数：112名

日 程：

10:00～10:15 開会

10:15～10:30 名古屋国際中学校・高等学校におけるWWLコンソーシアム構築支援事業の概要説明

10:30～12:10 活動報告

1. 令和4年度全国高校生フォーラム：高校生の事例発表
2. 令和4年度WWL高校生国際会議：高校生が考えた提言

3. 国際理解研修の再開：カンボジア・ベトナムコース
4. 企業協働学習：学校設定科目「WWL特論」×シャープ株式会社
5. 仮想空間（メタバース）の活用：Business Design Club
6. 企業・NPO法人・自治体とのパートナーシップ
：SDGs未来倶楽部 Sus-Teen!

13：00～13：50 特別講演

テーマ：スタートアップエコシステムがつくる愛知の未来

講演者：STATION Ai株式会社

代表取締役社長 兼 CEO 佐橋宏隆 氏

13：50～14：00 講評

講評者：名古屋商科大学商学部

教授 亀倉正彦 氏

14：00

閉会

<詳細説明>

◎名古屋国際中学校・高等学校におけるWWLコンソーシアム構築支援事業の概要説明：名古屋国際中学校・高等学校国際教育推進主任である黒宮祥男教諭より本事業に関する概要説明を行った。平成27年度から始まったSGHアソシエイトによる実践活動、令和元年から始まった地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）による実践活動を経て、令和4年度WWLコンソーシアム構築支援事業へのグローバル、ローカル、ALネットワークへの広がりについて語る。また、ニューノーマル時代における新しい学びについて言及し、令和4年度WWL高校生国際会議に決まった提言「New Borderless Education」を踏まえ、「ConnectEd」な学びを推進していくことを明言した。

◎活動報告：「1.令和4年度全国高校生フォーラム」では、全国高校生フォーラムに参加した生徒による当日の発表内容やそこで得た知見についての発表があった。「2.令和4年度WWL高校生国際会議：高校生が考えた提言」では、当日の運営を担当した生徒により会議内のVRカンファレンスで議論され決定された提言に至る過程を発表した。「3.国際理解研修の再開：カンボジア・ベトナムコース」では、本校教員及び研修に参加した生徒によりプロジェクト型のフィールドワークについて発表した。「4.企業協働学習：学校設定科目「WWL特論」×シャープ株式会社」では、企業連携をしながら学習を進めた授業展開に関して本校教員より発表があった。「5.仮想空間（メタバース）の活用：Business Design Club」では、仮想空間（メタバース）の構築に尽力した本校教員及び生徒の活動の記録を発表した。「6.企業・NPO法人・自治体とのパートナーシップ：SDGs未来倶楽部 Sus-Teen！」では、地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）から持続的に活動を続け、SDGsと地域貢献、さまざまなパートナーシップを組み合わせながら

活動する様子が発表された。

◎特別講演：佐橋氏より、「スタートアップエコシステムがつくる愛知の未来」をテーマにスタートアップやSTATION Ai、愛知に未来についての講演を行った。「なぜ、日本でスタートアップなのか？」という問いに対し、「日本におけるスタートアップの可能性」や「スタートアップの機運が明確に高まりつつある現代社会」に言及し、国際的なイノベーション創出拠点であるSTATION Aiに関する先進的な取り組みに関する講演をいただいた。

(d) 国際バカロレアATLに基づく生徒自己評価とアンケート実施による評価手法の検証例年通り学期に1回の授業評価アンケートを実施し、令和4年度に向けた改善を行う。国際バカロレアATLに基づく生徒自己評価に関しては、令和4年度に完成したカリキュラムマップ及び国際バカロレアATLを参考に作成したポスターを提示、カリキュラムにおいて獲得すべき力や人材像を明確に意識していくことで令和5年度は、その検証と生徒自己評価を実施していく予定である。

(e) カリキュラムを研究開発する人材の指定及び配置

○カリキュラム委員会の設置

カリキュラムアドバイザーの配置

[スケジュール]

令和4年5月17日：カリキュラム委員会の目的・方針・組織に関する議論

令和4年5月24日：カリキュラムの定義の確認、教育過程表の見直し、総合的な探究の時間の議論

単科大学を持つ学校のモデルケースについて議論

令和4年5月27日：教育課程表の変更、高大接続に関する科目選択、中高大の連携強化について、今後の作業スケジュールに関する議論

令和4年6月24日：[第1回WWLカリキュラム開発会議] カリキュラムマップと教育課程表の説明

令和4年7月22日：[第2回WWLカリキュラム開発会議] カリキュラムマップ作成上の留意点「使用する言葉の明確化」、海外研修オンラインへの他校の参加について、高校生国際会議のあり方、連携のフェーズについて

令和4年9月2日：[第3回WWLカリキュラム開発会議] 日本型グローバルカリキュラム（仮称）の方向性、用語の定義の確定（5つの能力について）

令和4年10月28日：[第4回WWLカリキュラム開発会議] 新しい形のカリキュラム創出のヒントを議論、カリキュラムにおける企業の参加：シャープ株式会社との協働学習、カリキュラムマネジメント研修の報告

令和4年11月25日：[第5回WWLカリキュラム開発会議] 普通科の存在意義やカリ

キュラムの独自性に関する議論、WWL特論における外部講師による授業を実践した感想や助言

令和4年12月16日：[第6回WWLカリキュラム開発会議]「やりたいことが決まっていない中学生が普通科を希望する」→「やりたいことを見つけてくれる普通科」のカリキュラムとは？高校生国際会議について

令和5年1月27日：[第7回WWLカリキュラム開発会議]ConnectEdカリキュラム（仮）について

令和5年2月24日：[第8回WWLカリキュラム開発会議]カリキュラムマップの進捗について、事業報告書の作成について、次年度に向けたカリキュラム委員会の方向性について

（目標1）令和4年度のゴールの実施検証、・カリキュラムマップの作成・ConnectEdカリキュラムをふまえた学習法（目標2）ALネットワークの活用（目標3）仮想空間（メタバース）の活用

（f）高大連携によるカリキュラム開発

高大連携講座：学校設定科目WWL特論Ⅱ（高大）（2単位）の実施。

高大一貫クラス：アカデミック・リテラシーⅠ（4単位）の実施。1年を通じて名古屋商科大学において大学生徒とともに受講した。

（g）その他

（i）先進的な技術やスキルを学ぶための外部講師による研修を実施

○職員研修

日 程：令和5年3月22日、23日、24日

講 師：株式会社 Rejou 見並まり江氏

参加者：名古屋国際中学校・高等学校教職員

テーマ：データサイエンスと教育

内 容：各1時間のセッションを設定し、データサイエンスに関する知識理解とデータサイエンスを学校教育にどのように活用すべきかを事例を踏まえながら研修を行った。

第1回：データサイエンスとは何か？

・IT社会の動向・「データを活用する」とは？・データサイエンティストとは？
データサイエンスという分野に関して、「データをうまく使う」というレベルで収まっている人が多い。データサイエンスという分野は、一定のスキルやフォームが存在し、そのルールを元にデータを的確に分析することを意味する。この点において、教員は、常にデータを活用して教育活動をしているが、「データをうまく使う」レベルでデータサイエンスをわかったふりを感じているように感じた。その点も踏まえて、専門的な外部講師から本当に意味でのデータサイエンスを学

ぶ良い機会となった。

第2回：学校教育におけるデータサイエンスの実践

・内閣府「AI戦略2019」・データサイエンス教育の今・高校における実践事例
・データ活用アイデアコンテスト

内閣府による政策から見えるAI戦略2019【教育改革に向けた主な取り組み】や総務省や経済産業省による教育プログラム、文部科学省「数理・データサイエンス・AI教育プログラム」や数理・データサイエンス・AI教育拠点コンソーシアムを紹介し、今後のデジタル社会における数理・データサイエンス・AIを日常生活・仕事等の場で使いこなすことができる基本的素養を身につけることが大切と語る。その素養獲得に向けた他校の取り組みを紹介した。また、世界中で行われているデータを活用したアイデアコンテストWiDSについて話され、データサイエンスが教育界に広がっている潮流を学ぶ機会となった。

第3回：ワークショップ

データサイエンスのスキルを用いた事例とそのワークショップを行った。実際にあるデータを議論しながら、データの見方や考え方、活用などのスキルを学んだ。

○生徒セミナー

日 程：令和5年3月15日

講 師：Olive株式会社 CEO 竹内精治氏（愛知県経済産業局スタートアップ推進課との連携）

参加生徒：20名（動画録画し、アーカイブ化する予定）

テーマ：スタートアップ企業の軌跡とアントレプレナーシップを学ぶ

内 容：

- 1 起業するまでの歩み：竹内氏の家族構成やアメリカでの生活などの自らの人生を紹介し、スタートアップパーとしてのアントレプレナーシップの源流を探る講話を行った。
- 2 起業するに至るアイデアの創出：社会人となった後に、起業に至るためのスキルの獲得やビジネススキル、アイデアの創出方法に関する実践的な講話を行った。
- 3 グローバル人材になること：竹内氏の人生と起業に関する動向、志を総括した上で、国際的な社会で活躍するために高校生で何をすべきかを語った。
- 4 質疑応答：参加生徒から質問が出た中で、「高校生で何をしなければならないか。」「何をすれば良いかを迷っている」「自分が何に向いているのか、何が好きなかがわからない」という自らの活動や将来に対する不安に関するものが多かった。そうした質問に対して、竹内氏は、周りを気にせず、いろいろと挑戦することの重要性を話した。みんなで学ぶ、同じことを学ぶという学校という枠にはまることなく、自らの焦点を当ててチャレンジを続ければよいと語る。

(ii) ALネットワークや外部との協働による実践活動事例

- みんなで選ぶ「NPOアワード」における事例発表：令和4年11月13日（名古屋）、20日（豊橋）における地域イベントにて学校のSDGs活動に関する事例発表を行った。
- 日進市立北小学校への出前授業：令和4年12月14日、小学5年生4クラスの総合的な学習の時間2時限分で本校生徒8名による実践活動を踏まえた出前授業を実施。
- TOYOTA Good Piece Contestにおける愛知県日進市ブースにて協働出展：令和5年3月11日12日：アップサイクルのイベントにて、日進市ブースにて名古屋商科大学とともに実践発表を行った。
- 第3回SB Student Ambassador東海大会出場：令和4年10月10日名古屋大学にて開催されたイベントに参加
- 日本特殊陶業株式会社との協働ワークショップの開催：令和4年7月22日に本校生徒8名と日本特殊陶業株式会社及び東海テレビ放送株式会社の9名とともに社会課題解決にむけたワークショップを行った。
- Design Tech Highschool（アメリカ）との交流：令和5年2月25日本校生徒6名参加。アメリカの高校生4名及び上智大学1年1名と国際交流を行った。

8 目標の進捗状況、成果、評価

短期目標として、令和4年～令和6年でMeta-School構築と対話セッション、国際会議開催を設定した。対話セッションに関しては、カリキュラム委員会での議論やWWL高校生国際会議の提言を踏まえ、発展的にConnectEdという名称に変更し実施した。中期目標として、STATION Aiとの協働運用を上げている。本年度は、STATION Ai株式会社の佐橋氏の講演や愛知スタートアップ振興課との連携（スタートアップ企業との連携）を随時進めている点も含めて、令和7年度以降の目標達成を目指している。

以下、アンケート結果等を参考に業務項目に沿った目標の進捗状況、成果、評価及び改善点を述べる。

出典：文部科学省委託事業 令和4年度「WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業におけるEBPMに向けたデータ収集・分析、効果検証等のための調査研究（株式会社 リベルタス・コンサルティング）」

※[]……アンケート項目

※回答……熱心にとりくんだ/どちらかという熱心に取り組んだ/どちらともいえない/どちらかという熱心に取り組まなかった/熱心に取り組まなかった/取り組む機会がなかった/無回答

(a) ALネットワークの構築

進捗状況：連携に関しては計画通り実施がされている。

成果：事業連携校1校増加、実践活動の増加

[企業等との連携による取り組み]

熱心に取り組んだ…… 2 2.0 %

どちらかという と熱心に取り組んだ…… 1 0.7 %

[海外の生徒等とのオンラインでの交流]

熱心に取り組んだ…… 1 9.0 %

どちらかという と熱心に取り組んだ…… 6.5 %

評価：ALネットワーク内の組織が高校生国際会議や実践発表会において一同に会することが目標になっているが、カリキュラムにおいてより計画的に連携を取れるような形が必要だ。また、アンケート結果によりALネットワークを利用した活動が、一部の生徒に偏っている傾向があるので、その点を改善する必要がある。ただし、ALネットワークとの関係性をもった教員や生徒に関しては、連携することで得るコミュニケーションスキルの獲得や価値観の変容を得ることができている。

(b) Meta-Schoolのインフラ開発

進捗状況：メタバースをゼロベースから空間の作成、アバターによる議論をするという基本的な環境整備である1の段階まで進むことができた。

成果：メタバースの完成。メタバースの可能性や問題点の認知。教員や生徒の先端技術に関するスキルの獲得

評価：現代段階では、ビデオ会議システムの方が議論はしやすい感がある。しかし、メタバースでしかできないことやビデオ会議システム・メタバースでもできないことがあり、その場合は第三のツールを使用することがわかった。その点も含めて、どこか1つの先端技術に固執するのではなく、用途によって使い分ける必要性を発見できた。メタバースの開発に関わった教員及び生徒は、イノベティブな考え方や先端技術の習得が大きく成長した。また、関わっていない教員及び生徒、ALネットワークの関係者もメタバースに触れる機会があった点で今後の思考の変化につながった。

(c) 文理融合・スタートアップを踏まえた学際的なカリキュラム開発／研究発表

進捗状況：学校設定科目や高大連携科目の実施、学校設定科目における企業連携を実施することができた。また、カリキュラム委員会にてカリキュラムマップの作成やカリキュラムにおける文理融合のあり方を議論した。

成果：カリキュラムマップの作成、社会と連動したシラバスの作成。

[外国語、文系、理系など複数の教科を融合した科目]

熱心に取り組んだ…… 3 2.7 %

どちらかという と熱心に取り組んだ…… 2 1.4 %

[グループワークへの参加]

熱心に取り組んだ…… 3 7.5 パーセント

どちらかという と熱心に取り組んだ…… 2 4.4 %

[プレゼンテーションでの発表]

熱心に取り組んだ…… 38.7パーセント

どちらかという熱心に取り組んだ…… 20.8%

評価：スタートアップとの関連した短期的な実践はあったが、年間を通じた実践活動やその結果としてのスキル獲得の検証を令和5年度は実施する必要がある。また、文理融合に関して、学校設定科目や総合的な探究の時間で明確に融合した要素があり、それを明示できていない。令和5年度は、MYPの手法を取り入れ、新しい文理融合の取り組みを実践していく必要がある。グループワークやプレゼンテーションを活用した授業は増加しているので、生徒にとってのコミュニケーションスキルや発言力は伸びている。

(d) カリキュラムにおける海外研修・国内研修の実施

進捗状況：令和5年度はCOVID-19感染の波がある中、国の指針を遵守しながら海外研修4コースの実施を行った。引率教員の増員や感染対策に関しては、準備や保護者の理解を含めて万全な計画をした。

成果：感染症対策を踏まえた海外研修の実践方法の獲得、オンライン研修時の知見を生かしたライブ配信による海外研修の方法の獲得。

[国内でのフィールドワーク]

熱心に取り組んだ…… 28.0%

どちらかという熱心に取り組んだ…… 8.3%

[海外でのフィールドワーク]

熱心に取り組んだ…… 17.9%

どちらかという熱心に取り組んだ…… 4.8%

評価：令和4年度の計画取りの実施及び研修成果発表の実施は評価できるが、海外研修に関しては、社会状況により希望制にしているためアンケート結果は妥当である。参加した生徒に関しては、多様なものの考え方や価値観の習得に関する自己評価が上がっている。

(e) Meta-Schoolにおける高校生国際会議及びConnectEd 2023の実施

進捗状況：計画通り実施

成果：仮想空間（メタバース）での実施による検証

[WWL高校生国際会議]

熱心に取り組んだ…… 19.6%

取り組む機会がなかった…… 50.6%

評価：WWL高校国際会議に関しては、仮想空間（メタバース）利用での実践検証を主としていたため、実施したことは評価できる。ただし、留学生の参加はあったものの海外連携校との連携が実現できなかった。また、データの蓄積やビデオ会議システムにはない仮想空間（メタバース）の良い点を活かしてきれていない

った。その点も含めて、現在、動画の配信方法や仮想空間（メタバース）の改良を進めている。また、生徒全員が参加することは難しいが、生徒全員が情報を共有することができ、またアイデアを提供することで参加している意識を向上させていく必要がある。

- (f) 国際バカロレアATLに基づく生徒自己評価とアンケート実施による評価手法の検証
進捗状況：ATLに基づく生徒自己評価に関しては、学校設定科目においては実施し、また、ATLを視覚的に生徒に理解してもらうためのポスターを制作した。アンケートに関しては、学期ごとの授業評価アンケートの実施を行った。

成果：ポスター制作、自己評価アンケート

評価：検証に関しては、改善が必要である。令和5年度は、制作したカリキュラムマップ、ポスターに記載してある力を教員及び生徒に明確に提示し、実践ごとに自己評価アンケートを実施する。また、その一連の流れに対する評価手法を確立するのが大きな目標となる。

- (g) カリキュラムを研究開発する人材の指定及び配置

進捗状況：カリキュラムアドバイザーの配置及びカリキュラム委員会を計画通りに実施。

成果：カリキュラムマップの作成

評価：カリキュラムマップの作成や普通科のあり方、新しい探究の方法など多岐にわたる議論がされ、本校らしいカリキュラムについて議論できた。令和5年度は、本年度で議論された内容を実践する年となる。

- (h) 高大連携によるカリキュラム開発

進捗状況：学校設定科目の実施及び高大連携クラスの設定を行った。

成果：名古屋商科大学での授業の受講や大学教員による週1回の授業を実施
[大学教育の先取り履修]

熱心に取り組んだ……19.6%

どちらかというと熱心に取り組んだ……11.3%

評価：計画に沿った実践活動ができていますが、連携に関しては事業拠点校のみになっているので、令和5年度は、ALネットワークの事業連携校に対しても大学の授業を受講してもらう計画である。また、アンケート結果より高大連携に関する授業が一部の生徒に限定されているので、学校全体としての実践を増やす必要がある。大学で学ぶ知見は専門的かつグローバルな素養を学ぶ内容が含まれているため、参加した生徒はその分野における素養の獲得が見られる。

9 次年度以降の課題及び改善点

○ALネットワークの国内外の連携強化と連携の体系化

初年度では、ALネットワーク内の連携について各実践活動を行いながらも、カリキュラ

ム会議では、「連携する」とはどのようなことを意味しているかの議論も並行して行われていた。改善点としては、連携のレベル（講話・交流・協働など）を明確に設定し、数値化することである。また、海外連携校との連携をさらに促進して、ALネットワーク内の学校に共有できるようにすることである。この数値化するという点においては、他の実践においても改善が必要である。その点も含めて管理機関としてカリキュラム委員会・運営指導委員会・検証委員会において議論を進めていく。

○全教員の事業参画と業務の効率化

組織の運用に関しては、一部の教員が中心となり実践していることが改善点である。これは、事業連携校においても同様なことが言えるので、学校全体で本事業を運用する体制づくりや理解を広げるための研修を充実させる必要がある。ALネットワークがあるからこそ、教員は業務の効率が良くなり知見が増え、生徒にとってはより多様な体験ができなければならない。業務が増えれば、その分協力体制にとってはマイナス要素になる。その点も含めて、ALネットワークの活用方法を管理機関として再度議論し、WWL事業への参画の意識向上を目標とする。

○人材像や素養・力の明確化と啓発活動の強化

生徒の実践活動に関しても、「WWL」の活動という認識が薄い。これに関しては、令和5年度はカリキュラムマップやポスターを設置することで、自らの活動との関連性や目指すべき人材増を認識しやすくする予定である。

○先端技術への積極的な検証

Meta-Schoolに関しては、シンギュラリティが近づく現代社会において、仮想空間（メタバース）に対する良し悪しは未知の点がある。ただし、仮想空間（メタバース）の良し悪しを検証しているのではなく、先進的な科学技術に対して挑戦するという姿勢を生徒たちに持ってもらう点では有効である。どのような時代が来るかわからない未来において、その時代に誕生した技術などを知る努力をすることや試してみるということの大切さを生徒は知る必要がある。その点も含めて、本事業は挑戦的に取り組む必要があり、その知見をALネットワーク内外に配信していく必要がある。また、ChatGPTなどの新しい技術が事業実施期間に生み出される可能性があるので、計画にはないがそうした技術などを積極的に検証する体制を整え、教育界が社会から遅れをとらないようにしていく。

【6】Meta-School（仮想空間（メタバース））構築

○Meta-School構築の先駆け

Meta-School構築を目指し、仮想空間（メタバース）についての研究を開始。学校としても個人としても全くの新しい取り組みであり、世界中で注目を集めている仮想空間（メタバース）産業も、教育業界では仮想空間（メタバース）への取り組み事例が非常に少ない。その為、現実とは異なった世界、（仮装）空間で何ができるのか、どのようなことを目指すかを模索、検討を開始する。

新型コロナウイルスの蔓延により、人の移動は制限され、特に会議などの開催方法は見直される。これによって、私たちの当たり前が、大きく変化する世界に生きていることを実感した。オンラインで会議を行うということ自体考えもしなかったが、ビデオ会議システム（Zoom）やGoogle Meetなどのカメラ付き通信アプリが誰でも容易にできることがわかった途端に、全世界で現在のような、通話機能を用いて画面を共有し資料を提示する会議スタイルが主流になった。

今までの常識は一瞬のうちに変わることを念頭に置き、仮想空間だからこそ提供できることがないかをいくつもの企業と議論を重ね、目指すべきものが僅かではあるか見え始める。Zoomアプリや通信教育には信頼性や安心感がある一方、相手の顔やプライバシーなどは保護しにくい。その反面、バーチャル世界ではなりたい自分になることで、羞恥心や相手の見た目などに囚われず、自分の意見を伸び伸びと発信できるなどの利点がある。これらの点を踏まえて現実世界でとバーチャル世界を融合した教育スタイルを提案する。

○Meta-Schoolへの想い

Meta-School構築でもっとも注意を注いだことの一つに、プラットフォームの構築が挙げられる。

プラットフォームの作成自体は日本国内をはじめ、全世界で様々な企業が技術を提供しており、空間の作成を業者へ依頼する事で掲示物や会話をするだけの空間なら簡単に構築は可能である。しかし、このMeta-School構築へ向けて、空間という箱が必要なわけではない。使うことがゴールではなく、仮想空間でログインをすることへの意味。この空間ならでのコミュニケーションが取れたり、表現できたり、学校では普段会うことができない人たちとの会話が最も重要と考える。プラットフォームを生徒や教職員が手順を学びながら模索しながら作成する。使い方がわからない人へわかる人がレクチャーを行う。オブジェクトを作成する楽しさを知る。こういった体験・経験こそがMeta-Schoolである。

「場を作る」が最初の活動ではなく、作成しながら仮想空間（メタバース）を学びながら場を作っていかなければ、せっかく作成をした仮想空間（メタバース）（3次元空間）も自分ごととして捉えることができず、その場でイベント開催を実施し、その後はログインをすることなく空間は終わってしまうのではないだろうか。

○仮想空間（メタバース）の作成

NTTが提供するVR空間プラットフォーム NTT XR Space WEB「DOOR」にて仮想空

間（メタバース）のプロトタイプを作成する。



本校の教室を再現



校舎内の廊下を再現

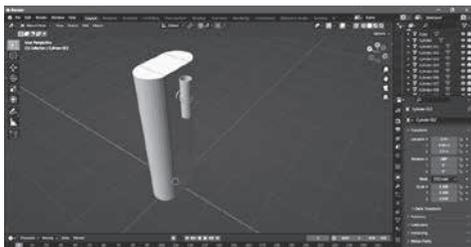
○令和4年4月 WWLコンソーシアム構築支援事業採択

文部科学省がSociety 5.0に向けたリーディング・プロジェクトの一つとして位置付けている令和4年度のコンソーシアム構築支援事業において、カリキュラム開発拠点校として採択される。この決定に伴い、本校での仮想空間（メタバース）作成が本格的に開始する。

新学期になり、生徒への周知を開始。Business Design Clubが発足し、プログラミングやPC、仮想空間が好きな生徒が集まる。

12月末に開催されるWWL高校生国際会議において、仮想空間（メタバース）での開催を目指して本校の文化祭（光楓祭）で実験的に使用できるようにプラットフォームの構築を進める。

NTT西日本のアドバイスを受けながら仮想空間（メタバース）のプラットフォームの業者の選定を行うが、非常に多くの業者が仮想空間（メタバース）産業に参入していることもあり、目的とあったプラットフォームが決まらない中、Business Designクラブのメンバーが中心となり、本校の特徴的なホール空間（アトリウム）にある柱や椅子の制作を開始する。制作方法は、実際に測量から始め、ホール内の寸法や柱の高さ、テーブルのサイズなどを細かく計測し3DCGアニメーションを作成するための統合環境アプリケーション「Unity」や「Blender」を使用して行う。



アトリウム空間にある柱



アトリウム空間にあるテーブル

東京ビッグサイトにて、開催されたXR総合展へ訪問し、仮想空間（メタバース）を通して新しい事業の開発などを目的としている企業や会社が多く、初期投資（費用）がどうしても掛かってしまうことを確認する。中でも、仮想空間（メタバース）のみを営業の軸としている会社は開発費や維持費などが高くなることもあり、初年度のプラットフォーム業者をNTTが提供する、NTT XR Space WEB「DOOR」に決定した。NTT西日本のスマートコネクト メディアビジネス部の笹原より登壇いただき、教職員研修を実施する。学校全体を通して仮想空間（メタバース）のできることや今後への期待、展望を議論する。また、9月に開催される文化祭へ向けて仮想空間（メタバース）の構築がスピード化を増す。

○仮想空間（メタバース）体験

リアル空間とバーチャル空間の両方で光楓祭（文化祭）を実施した。バーチャル空間の作成は採寸データを元にBusiness Designクラブの生徒が一から空間の作成を行なった。夏休暇期間を費やし、作業する箇所を手分けして空間を作成した。その空間内にはライブ配信用のページや部活動の紹介ページなどの展示も並行して作成した。

「メタバース光楓祭」では、生徒や来場者に仮想空間の世界でアバターとして参加し、現実世界のステージ演奏をストリーミング再生で楽しんだり、海外研修の記録画像や部活動の紹介動画を視聴できるなど、居場所に制約されることなく参加者が仮想空間を主体的に移動したり、コンテンツを経験したりすることができる点において、これまでのオンラインツールとは異なる新規性があり、日頃の教育活動を補助する可能性を実感した。



スクリーンに端末を投影



ワークショップの様子



メタバース内の校内の様子



メタバース校舎



実際の校舎

○新たな課題の発見

ワークショップを開催し、仮想空間（メタバース）が珍しいこともあり来場者の興味関心は非常に高く、学生とは思えないほどクオリティが高いなどの声をいただき成果を実感する。しかし、「クオリティが高いがゆえ、全体的に重い」「Wi-Fi環境に依存される」といったインターネット環境やソフトウェアの問題、『PCよりもiPadの方が操作性が高い』といったハードウェアの部分での問題など両方での課題が新たな課題が見つかる。これらの課題を解決しながら12月のオンライン空間での高校生国際会議へ向けた取り組みが再始動する。

○高校生国際会議へ向けた取り組み

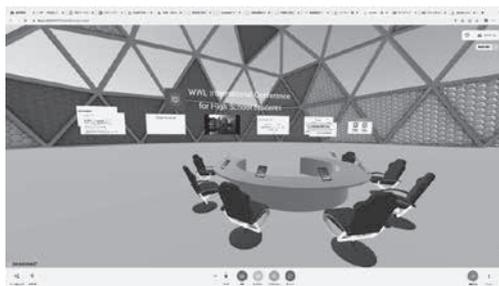
作成した空間では、より正確に校舎を再現することで、空間内の容量が多く（読み込む情報が膨大）参加者がフリーズやページが動かなくなってしまうなどの問題も起こった。こうした点から、高校生国際会議では空間内の容量をできるだけ軽くすることを心がけた。また、高校生国際会議では学校ごとに意見をまとめる時間をとることが決まっていた。以

上の点も考慮して、技術面では文化祭から難しい改良や変更はないが、今回の会議を最大限に生かすことのできる空間の作成を行なった。特に仮想空間（メタバース）の最大の利点である話したい人とだけ会話ができることを生かすため空間の体感距離を大きくするなど、高校生国際会議に向けた調整を行なった。

本来であれば1人、1アバターを割り当てることが望ましいが、文化祭の経験からできるだけアバターの数を減らすことで、通信容量を少なくし、また、国際会議における各国団をイメージし、1団体に1アバターを割り当てた。そのことによって、英語が話せない生徒も議論に参加をしやすくした。また、アバターを使用することによる英会話への抵抗感も少なくなることがわかった。



参加者の様子



国際会議の会場

○今後の展望

Meta-School構築へ向けて、目標であったプラットフォームの作成や高校生国際会議は実施することができた。しかし、「仮想空間でログインをすることへの意味。」「この空間ならではのコミュニケーションが取れたり、表現できたり、学校では普段会うことができない人たちとの会話が最も重要と考える。」「プラットフォームを生徒や教職員が手順を学びながら模索しながら作成する。」「使い方がわからない人へわかる人がレクチャーを行う。」「オブジェクトを作成する楽しさを知る。」等の経験を全ての生徒が得たわけではない。このような経験をした生徒は一部の興味のある生徒だけにとどまってしまったため、次年度以降の目標として全ての授業、学校活動を通して全ての生徒が実感できるような仕掛けが必要である。生徒が興味を持つためには、プラットフォーム（空間内）の見た目も重要な要素ではあるが、それ以前に、これらのバーチャル空間での活動を単なる1ユーザーとして終わらせるのか、それとも主体的に取り組ませてプログラミングやバーチャル産業に興味を持ち、デジタル世界を開拓できる人材を、デジタル世界に興味を持つことができる人材を育成していくことが必要である。そして、Meta-Schoolは今後を生きていく世代には必ず必要な経験である。その為に、教職員一人一人が各教室において、授業において全ての教育的活動において「仕掛け」をしなければならない。

【7】国際理解研修

(a) 行程表

○カンボジア・ベトナムコース

日次	月日	曜日	現地時間	地名	日程
1	8月17日	水	8:00	中部国際空港	中部国際空港集合
			10:00		ホーチミンへ出発
			14:00	ホーチミン国際空港	ホーチミンにて、乗り継ぎ
			16:05		カンボジアへ
			17:15	シュムリアップ国際空港	到着後、専用車にて夕食会場へ
2	8月18日	木	終日	カンボジア (シュムリアップ)	コンボンブルック村フィールドワーク ・各班でプロジェクトの実施 ・浸水林ボートクルーズ ・記念植樹体験
3	8月19日	金	午前	カンボジア (シュムリアップ)	アンコール遺跡修復現場見学と修復体験
			午後		アンコール王朝時代の巨大貯水池見学と市場見学
4	8月20日	土	午前	カンボジア (シュムリアップ)	農村部小学校訪問
			午後		バンテアイスレイ遺跡見学
			18:30	シュムリアップ国際空港	空港へ移動後、ベトナムへ出発
			19:45	ホーチミン国際空港	空港到着後、夕食会場へ
5	8月21日	日	終日	ベトナム (ホーチミン)	ミトメコン川クルーズ ・蜂蜜農園、ココナッツキャンディ工場散策 ・ジャングルクルーズ
6	8月22日	月	午前	ベトナム (ホーチミン)	日系企業訪問
			午後		ホーチミン市内見学 ・統一会堂、戦争証跡博物館、サイゴンスカイデッキ展望台 サイゴン川ディナークルーズ
7	8月23日	火	午前	ベトナム (ホーチミン)	クチトンネル観光
			午後		現地高校生と市内研修
			21:00	ホーチミン国際空港	夕食後空港へ
8	8月24日	水	0:05	ホーチミン国際空港	日本へ出発
			7:30	中部国際空港	到着後、解散

○シンガポール・マレーシアコース

日次	月日	曜日	現地時間	地名	日程
1	7月26日	火	8:30	中部国際空港	中部国際空港集合
			10:30		シンガポールへ出発
			16:05	シンガポール・チャンギ国際空港	シンガポール到着後、入国審査
				シンガポール	専用車にてマレーシア、ジョホールバルへ。
			マレーシア	ジョホール水道観光	
2	7月27日	水	午前	ジョホールバル	セメンチュウ村にてホームビジット体験
					ろうけつ染め体験とマレー文化村訪問
					サルタンアブバカルモスク訪問
					シンガポールへ出発
	午後	シンガポール	スチームボートのご夕食		
			ホテルへチェックイン		
3	7月28日	木	午前	シンガポール	シンガポール大学での研修プログラム
			午後		マライオン公園、チャイナタウン、 マリナバレッジ訪問
					マリナベイサンズを見学
4	7月29日	金	午前	シンガポール	ニューウォータービジターセンター見学
			午後		セントーサ島内班別自由行動
					ナイトサファリへ
				空港到着	
5	7月30日	土	1:20	シンガポール・チャンギ国際空港	空路、日本へ
			9:05	中部国際空港	到着後、入国手続き、解散

○オーストラリアコース

日次	月日	曜日	現地時間	地名	日程
1	7月24日	日	8:30	中部国際空港	中部国際空港集合
			10:30		シンガポールへ出発
			16:05	シンガポール・チャンギ国際空港	シンガポール到着後、乗り継ぎ
			23:10		アデレードへ
2	7月25日	月	7:25	アデレード空港	到着後、ホームステイ先へ
					ホストファミリーと対面、ホームステイ開始
3~ 34	7月26日 ~ 8月26日	日 金		アデレード	ホストファミリー宅から各自通学
					土曜日は、南オーストラリア大学でセッションを実施。日曜日は、ホストファミリーと過ごします。
35	8月27日	土		アデレード	空港に移動、チェックイン手続き
			9:10		空路、シンガポールへ
			15:10	シンガポール・チャンギ国際空港	到着、飛行機乗り換え
36	8月28日	日	1:20	シンガポール	空路、日本へ
			9:05	中部国際空港	到着後、入国手続き、解散

○カナダコース

日次	月日	曜日	現地時間	地名	日程
1	8月1日	月	6:30	中部国際空港	中部国際空港集合
			7:45		国内線にて成田へ出発
			9:00	成田国際空港	空港到着後、出国手続き
			9:25	バンクーバー国際空港	カナダ到着後、入国
			12:10		現地国内線にてエドモントンへ出発
			14:41	エドモントン国際空港	エドモントン到着
			16:00		専用車にてアルバータ大学語学センターへ出発
2~ 26	8月2日 ~ 8月26日	火 金		エドモントン	アルバータ大学語学センターにて研修
					土日は、ホストファミリーと過ごします。
27	8月27日	土	8:00	エドモントン国際空港	専用車で空港へ。到着後出国手続き
			10:15	バンクーバー国際空港	国内線にてバンクーバーへ
			10:50		バンクーバーにて乗り継ぎ
			13:25		国際線にて日本へ
28	8月28日	日	15:15	成田国際空港	
			17:10		国内線乗り継ぎにて、名古屋へ出発
			18:25	中部国際空港	入国手続き後、解散

かわいい子

「かわいい子には旅をさせよ」とは、日本のみならず、英語圏においても頻用される格言である。夏の盛りを迎える7月末、12人の「かわいい子」と共に中部国際空港よりシンガポールへ飛び立った。

現高校2年生は、COVID-19の影響で行事縮小を受け入れざるを得なかった学年だ。文化祭、体育祭、合唱コンクール、中高一貫3年生での国際理解研修など、学校生活での「青春」を諦め、大人の方針に従ってきたのである。そんな彼らに、高校1年生の終盤より「ねえ来年は海外行けるよね」と涙目で訴えられてきた担任としては、この度の国際理解研修4コース実施は大変喜ばしいものであった。しかし、それにしても、私自身が引率することは予想していなかった。さらに失念していたが、国際理解研修は、お客様(生徒)に安全で快適な旅を提供するものではなく、生徒たちに困難と成長を与える場だ。今回の研修にも、多くのトラブルが伴った。しかし、セメンチュウ村にてホームビジット先のホストファミリーと抱き合って別れを惜しむ生徒たちを見た時、感慨深い気持ちとなった。他者とのコミュニケーションは、どのような職種においても必要なスキルだ。他にも学ぶことは多かっただろうが、引率教員としてはその姿を見られただけで満足である。

シンガポール・マレーシアコース担当教員
和田紗綺

360°の景色と生徒たちの発言力

これまでの2年間オンラインで実施されてきたカンボジア研修が、今年度になって初めて現地での研修として再開された。全体を通しての生徒の活動を思い返すと、同じ空間にいるにも関わらず、興味を持つもの・行動・学びが生徒一人ひとりで異なる場面が多くあった。

オンラインとは異なり、現地研修となると360°の景色が存在する。そのような状況下で生徒が何を見て何に興味を持つのかは誰も分からないし、急に指を差しながら「あの場所に行きたい」「あれやってみたい」などと生徒の誰かが突発的に言葉にしていた。「子どもたちとサッカーがしたい」「演奏している人たちの楽器を体験したい」「現地のNIKEに行きたい」「ベトナムの遊園地に行きたい」……これらは全て、生徒がたった一言呟いて実現した出来事である。彼らの積極的な発言により、本研修にどんどん価値が付加されていき、生徒たちにとっても多くの学びを得たことであろう。

オンラインの際は一画面上で生徒一人ひとりが食い入るように画面を見て、画面上の景色に感動しながら興味のあるものに対して質問しており、研修自体には確実に意味はあったが、ただやはり生徒の中で(何か質問する内容を探さなければ)という気持ちが出ていた場面もあった。今回は確実に環境が異なっており、生徒からの発言が常に絶えなかつ

た。360°の情報量で見たいものを見ることができる現地研修は、生徒の学びたい意欲を上げる環境としては十分である。今後のコロナ情勢はどうなるかは分からないし、オンライン化が進む世の中になってきていることは確かではあるが、「現地で新たな発見をする」ことを研修目的とするならば、現地研修が今後も続いてほしいと切に願う。

カンボジア・ベトナムコース担当教員
後藤彩可

究極の異文化体験

五週間の留學生活のなかで、生徒たちは語学力以外に二つの力を手にしたと考える。それは、「適応力」と「他者理解の力」である。

現地の問題は現地で、自分たちの力で解決する必要が生じた。例えばSIMロック解除の問題、コロナ感染、日本と全く異なる学校生活に加えて、最も長い時間を過ごすホームステイである。ほぼすべての問題解決は英語で行う必要があり、見知らぬ地が生き残り、よりよい生活を送るために必死で英語を使っていた。新たな生活環境を自分が生きていくために調整し、適応していく力を手にしていたと考える。

当初、ほぼ全員がホームシック気味だったにも関わらず、最終日の空港では全員が口をそろえて「日本に帰りたくない！」と話していたほどである。

オーストラリアは多民族国家である。生徒たちはその環境に入り込み、自身が「外国人」となった。こうした生活を終え、ある生徒はこんな気付きを残している。「多様性が重視される今後の世界において他者とコミュニケーションをとるためには、他者の価値観や背景をよく知ることが大切だ。」この気付きは、多民族国家であるオーストラリアで5週間の過ごしたからこそ得られてのものであり、一生を通じた宝物となる財産を得たのだろう。

オーストラリアコース担当教員
近藤佑思

Guide and chaperone - Edmonton international understanding summer programme
Journey to the home of Frontier Spirits

2022 International Understanding Trip to the University of Alberta, Edmonton, Canada

August, 2022. We set out on a journey to the other side of the world; a journey full of experiences and challenges. Each day was spent studying English and enjoying cultural activities. The city of Edmonton and the University of Alberta are places which hold a precious history for our school's founding father Mr. Yuichi Kurimoto. This is

where he discovered the frontier spirits which he dreamed to teach to the young people of Japan. Upon arrival in Vancouver, we were greeted by Native Canadian Haida artworks and even a family member came to welcome us and bring us a sweet treat. After a short rest in Vancouver, we started the second leg of our journey deeper into the heart of the north. More than 24 hours from our departure from Nagoya, we arrived at our destination in Edmonton. We discovered modern architecture mixed with beautiful old stone and brick buildings shaded by giant trees. Edmonton is known as 'the gateway to the north'. It is the capital city of the province of Alberta and the last big city before the wild nature in northern Canada. In the old days people had to make their life with their own hands. They worked the land and created new life where there was nothing but grass, trees, and animals. They planted food, built their own houses and machinery. They cared for each other, made communities and founded the city of Edmonton. Settlers and explorers established trade and business. They also made great discoveries like the oil fields and ancient dinosaur fossils. Many students had a learning goal for your trip to Canada. Some studied gender equality, others wrote about Canada's cultural mosaic. Some students learned about language, traditions, or had a good cultural exchange with classmates at the university. Canada is a country which strives to create an environment of equality for all people. Canada is also a land of innovation and construction. At the city library we saw advanced interactive technology and production studios which are free for all people to access, learn and create. Sustainability and the environment are also important. At the university we saw a building which uses zero energy. It supplies its own solar power and processes its own heat and water. There were also solar USB charging stations. There were buildings which were made by combining old architecture with new modern extensions the achievements of the past and built on them with new technology to create modern and unique places. In the same way, I would students to remember the rich and long heritage here in Japan and use their young creativity and skills to develop unique and inspiring culture for everyone to enjoy.

カナダコース担当ネイティブインストラクター

Steven McLellan

(c) 生徒レポート

「I've been to Vietnam and Cambodia, however I realised about Japan more.」

カンボジア・ベトナムコース
六田 太治（高校2年普通科）

初めに、私は8月末にカンボジア・ベトナム国際理解研修に参加した。何が目的だったのかというと、ベトナム戦争の平和学習に興味があったからだ。大統領官邸を肉眼で確認することができ、戦後最も大きな戦争の一つであるベトナム戦争の遺産と痕跡を垣間見ることができた。私自身戦争の被害や悲惨さというのは理解している方だと自負していたが、凄惨な被害を受けた当時の写真などを確認し自身の平和理解を再確認することができた。しかし、それ以上に私は意外なことを確認することができた、それは日本への気づきだ。カンボジアやベトナムにいながら一番理解したのは日本のこととはどういうことか。一つにキャラクターの豊かさというのを挙げる。日本においてはアニメ、ゲーム、漫画、ライトノベルといった様々なサブカルチャーがあるのは周知の事実である。しかし、それがいかに魅力的で日本独自のものであるかを今回の研修を通して確認できた。私たちは普段当たり前のようにマスコットキャラやアニメキャラクターに触れているが、ベトナムやカンボジアにおいてそのようなものを見る機会は限られていた。また、日本のキャラクターをあしらったTシャツなどを散見する事が多くあった。特にカンボジアの農村部で見かけるとは思ってもいなかった。日本においては公共交通機関などにもマスコットキャラクターがあり、キャラクターを愛する国民性があることが垣間見えた。もう一つは日本の評価の高さである。現地の方と接する際、日本の名前を出せば喜んで接してくださる方が多くいた。市場においては日本語で対応していただくこともあり、日本は世界からも重要視されている国なのだなと実感した。さらにベトナムのバイクは日本製が大衆的に使用されており、日本製品がベトナムで高い評価と信頼感を得ていることを知った。また、カンボジアの家庭においても日本製品が多く見受けられ、カンボジアにおいても厚い信頼を得ていることは確かだ。私自身日本に自信が持てない時期があった。日本は世界3位のGDPを誇る国だが、世界のニュースを見るとアメリカやヨーロッパに注目が行きがちだ。実は日本は影が薄い国なのではないかと考えることもあったが、実際にはそんなことはなくむしろ世界が目する国であることを理解できた。そして日本人は何かと自国の自虐をしがちであるが、私はこの研修を通して日本という国



の良さをあらためて感じる事ができた。そしてこの研修を通して私は一つの目標ができた。それは日本の文化を海外に発信していくことだ。英語がもともと好きだった私は海外とのパイプも大きくあると自負している、そこで日本の歴史、社会、文化をさらに学習していき、世界に発信していきたいという思いが芽生えた。伝統文化、サブカルチャー文化両方を世界に発信していくために、様々な事象を学習し、世界を理解し、日本を理解してもらう。そういった志を得ることのできた研修だった。平和学習ののちに見かけた風景。かつて戦争をしたアメリカとベトナムだが、平和や相互理解に向けて歩み寄っているように見える一枚だ。

What I learned in the village of Componpruk.

カンボジア・ベトナムコース
齋藤 晴太郎（高校2年普通科）

今回、まずカンボジアとベトナムに研修に行くにあたって、私たちは行く前に日本の食文化が現地の人に受け入れられるか調査するというテーマを決めた。その次に実際に現地の人々に食べてもらう食べ物として、日本の一般的な家庭料理である唐揚げに名古屋の名物である味噌をつけたものや、いなり寿司、柿の葉寿司を作ることになった。なお今回日本の食文化が受け入れられるかどうか調査したカンボジアのコンボンブルック村で



は、柿の葉は現地では入手が困難であるとガイドの方から指摘があった為、バナナの葉で代用をすることになった。

コンボンブルック村に到着をし、調理をする場所へと案内されるとそこは一般家庭の台所であった。唐揚げを作るために皮を剥いだ鶏が丸ごと1匹渡され、そばで生きている鶏の親子が散歩をする中、調理をすることになった。日本では鶏を丸ごと捌くことすら稀な体験であるのに、生きている鶏がそばを歩いているので私たちが調理するのに戸惑っていた。そうしていると、台所を貸してくださった家庭の奥さんが包丁を取り出して勢いよく鶏の首を切り落とした。その姿に私は生きる力強さを感じた。無事に3品調理が終わり現地の人々に食べてもらうと3品とも好評であった。特に味噌については最初はどんなものか分からない為なのかなかなか食べてもらう事はできなかったが、一度食べてもらうと何度も繰り返し食べる人がいるほど人気であった。これらのことから日本の食文化は現地の人々に受け入れられるということがわかった。私は今回の研修に参加する以前は今回行

った2カ国の両方に貧しい国であるというイメージを抱いていた。特に今回日本の食文化を紹介したカンボジアのコンポンプルック村は極貧であるというイメージであった。そのイメージを持っていたのは私だけでなく周囲の人々にも、危ない目に遭うのではないかと心配された。しかし、今回実際に訪れてみてそのイメージは大きく変わった。特にカンボジアのコンポンプルック村は今でもとても印象に残っているほどである。



その村では雨季になると水位が上がり陸で生活できなくなるため、住宅が何本もの太い柱に支えられた高床式になっており、その住宅はそこに暮らす人々のどんな環境でも生きていく力強さを象徴しているかのようであった。今回この研修を通して私が学んだのは、コンポンプルック村の人々が持っていた、どんな環境においてもその環境を悲観せず前に進む力である。今現在、世界中で様々な問題が起きている中で日本もまた同じくたくさんの問題を抱えている。そんな中でただ状況を悲観するのではなく、どうすれば状況がより良くなるのか考えて前に進むことが重要であると今回の研修を通して学んだ。

What I learned in Malaysia and Singapore

シンガポール・マレーシアコース

松本哩空（高校2年普通科）

本レポートでは、マレーシアと日本の文化の違いと、シンガポールの水事情について書いていく。私は7月27日より5日間、シンガポール・マレーシア研修に参加した。以前授業で、マレーシアは多民族国家であり、言語、宗教、食事、生活習慣など多様な文化があると学んだ。その際、実際に現地に足を運び、日本との文化の違いを学びたいと思った。また、シンガポールは他国に比べて水の量が少ないにもかかわらず、水の安全性が非常に高いと言われている。どのようにして水を確保し、安全を確立しているのか知りたいと思ったのである。

まず、マレーシアを訪れて実感した文化の違いは、現地の人々はスプーンやフォークなどを使用せず、手で食事を摂るということだ。マレー系の場合はイスラム教徒であるため、食事は右手で食べる習慣がある。左手は不浄とされているため、必ず右手を使って食べるのがマナーであ



る。私たちもその文化に習い、手で食事を摂り、文化を体感することができた。また、私がセメンチュ村で村長に挨拶をした際には、緊張している私たちを暖かく迎え入れてくれた。マレー系の民族衣装を着たり、日本では見られない植物を見せていただいたり、日本との文化の違いに触れ、堪能することができた。

次に、シンガポールの水問題について学ぶため、私たちはマリーナ・バラージとニューウォーター・ビジター・センターを訪れた。他国に比べて水が少ないシンガポールだが、マリーナ・バラージでは再生水や海水を淡水化し、ダムのように貯水し、マリーナベイの水量を一定に保っている。日本では川や湖、井戸の水を淡水化しているのに対し、シンガポールでは海水を淡水化するという、日本では主流でない技術を用いていた。ニューウォーター・ビジター・センターでは廃水を処理し、再生水を生成している。では、どのようにして安全性を確立しているのだろうか。それは、廃水を精密ろ過し、逆浸透させ、紫外線消毒をするという、3段階のプロセスを経ることでUSEPAやWHOが定める国際基準まで浄化する工程にあった。廃水を飲用可能な水準まで高度処理できる技術は、持続的な水配給を可能とし、SDGsに繋がっている。マリーナ・バラージやニューウォーター・ビジター・センターは、SDGsの6項目目にある「限りある水資源を将来にわたって使うための取り組みを進める」という目標や13項目目にある「気候変動に具体的な対策をとる」という目標を実現しているのである。

最後に、今回の研修では、マレーシアの文化とシンガポールの水問題について学ぶことができた。私は大学では国際学部を志望しており、将来は英語を使った仕事をしたいと考えている。海外に留学や就職するにあたって、大切なのは語学力だけではない。その国の文化を知り、生活習慣などを理解することで、初めてコミュニケーションができ、留学や就職に役立つだろう。今回、マレーシアで食事マナーや挨拶、衣服などの文化の違いを楽しむことができ、自分の価値観を広げることができた。自分の国と相手の国の違いを理解し、尊重する姿勢を将来に役立てたい。また、日本は比較的水に恵まれた国とされているが、他の資源ではどうだろうか。実際に日本が抱えるエネルギー問題として、日本は化石燃料を他国からの輸入に依存している。水不足であったシンガポールが、水の安定配給を実現させたように、日本も枯渇する資源に対策していかなければならない。

Chinese Culture in Malaysia and Singapore

シンガポール・マレーシアコース
鈴木安那（高校2年普通科）

2023年7月27日から31日にかけて国際理解研修のシンガポール・マレーシアコースに参加した。3泊5日の研修ではマレーシアに約2日間、シンガポールには約3日間滞在した。研修前の私の目標はマレーシアとシンガポールの文化を学び、自国の文化との相違点を見つけることだった。

マレーシアに着いた夜の最初のご飯は中国料理だった。まず、私はなぜマレーシアで中国料理を食べるのだろうか疑問を持った。せっかくマレーシアに来ているのだしマレーシアの文化を堪能するにはマレーシアの料理を食べるべきではないのだろうか、と私は思った。しかし、後にガイドさんの話を聞いてみると国民の7割がマレー系（その多くがムスリム）、2割が中国系、そして残りの1割がインド系であることが分かり、ガイドさん自身も中国系の民族に属していると言っていた。ホテルのビュッフェでは、鶏肉のソーセージなどムスリムに配慮した食べ物があったが、しゅうまいなど中国料理も多くあった。



シンガポールでは、ホテルでの朝ご飯ビュッフェ以外は全て中国料理であった。私はシンガポールの文化や食がどのようなものか全く知らなかったため、シンガポールではここまで中国料理が一般的であることに驚いた。先述の通り、シンガポールは人口の7割もが中国系であるため、食文化に止まらず、街で常に聞こえる中国語や、頻繁に見かける中国語の表札など、中国文化を感じる場面が多かった。インターネットで調べてみると、マレーシアは世界で3番目、シンガポールは5番目に中国の移民が多い国であることが分かった。(Selected Countries,n.d.)

シンガポールでもマレーシアでも、中国料理店では回転テーブルに次々と何種類もの料理が並べられ、毎回、その量の多さに圧倒された。1つのテーブルに約7人で食事をしてしたが、みんなお腹いっぱいになってしまい、結局は毎回残してしまうことになった。その度に、私たちは日本人の感覚で食べ物を残してしまうことに罪悪感を覚えていた。このことについて、中国料理の量の多さに疑問を感じたため、インターネットで調べてみた。すると、中国では皿に食べ物を残すというマナーがあるらしい。これは、「お腹いっぱい満足です。こんなにたくさんありがとうございました。十分いただきました。」という意味を持つ礼儀であることが分かった。(日本とは真逆、2021)

シンガポールとマレーシアでの国際理解研修では、シンガポールやマレーシアでは中国の移民の多さを実感し、それによりシンガポールとマレーシアの食や文化が大いに中国の文化に影響されていることが分かった。そして、食べ物に対する考え方や民族の多様性などをはじめ、さまざまな日本との違いを学ぶことができた。

I learned a lot during my summer vacation

オーストラリアコース

Aylin Akdeniz (高校2年国際教養科)

I went to Australia for five weeks last summer vacation. For those five weeks I stayed with a host family and attended a local school.

Before going to Australia, I was worried about whether I could communicate in English. However, my host family, school teachers and friends all spoke slowly and we were able to communicate. It was slow in the beginning, but as the days went by, my ears got used to it and I could hear English even at normal speed. Now I think it would have been smoother if I had learned more English vocabulary before going to Australia. By the way, my host family was a Filipino woman, a Korean and a Vietnamese exchange students. I also speak Korean, so I spoke a mixture of Korean and English with the Korean student. As a result I was able to improve my English and Korean. Australia is a country with many international students and immigrants, so I can listen to English as well as other languages on a daily basis. In Japan, I don't hear many kinds of foreign languages on a daily basis unless I am in an urban area, so the situation in Australia was very new to me.

I believe that this study abroad experience has given me not only English language skills, but also the ability to be independent. For example, getting up by myself every morning, washing dishes and laundry, managing money, etc. I was especially bad at getting up in the morning, but for those five weeks I was able to get up without oversleeping once. I also washed the dishes for my own food and my host family's because my host family was busy with work. As for laundry, I asked my host family how to use the washing machine and did it by myself. My parents usually did those things for me, so now I am thankful for things I used to take for granted. By these experiences, I decided to help more with the housework than before, after I returned to Japan,



I went to school while doing these daily activities. I had a buddy at school to ask questions and talk about things I didn't understand. We also taught them Japanese because they loved Japan and were

studying Japanese, I was happy to see that they had good thoughts about Japan, I made a lot of friends besides my buddy, On the weekend, we went shopping with our school friend in the City, He took us to many places in the city and even bought us food, It's really amazing how he can be so kind to people he's met for less than a week, So when he comes to Japan someday, we would like to take him to many places.

Australian medicine

オーストラリアコース

Tsuji Miyu (高校2年普通科)

I went to Australia this summer. I decided to do some research on Australia before the trip. The theme of the research was foreign medicine. I am planning to study pharmacy at university in the future, so I was curious to see the difference between pharmacies in Japan and Australia.

By chance, I had an experience trying medicine sold by a pharmacy in Australia because while staying in Australia, I had a fever, I saw three kinds of medicine, but all of them were about four times the size of Japanese medicine. Unlike Japan, where white pills are the norm, the pills sold in Australia were different colors, such as yellow, brown, and orange. One of the three was in capsule form, and the others were in tablet form. The tablet medicine was easy to dissolve, but it had a peculiar smell, and tasted very bad. The capsule-type pills were difficult to swallow because the capsules were so thick that they did not dissolve. My host family gave me a total of nine pills, three of each, I could not finish them because they were too large for me to swallow when I had a sore throat. Unlike Japanese medicines, I found that medicine in Australia is very large and the amount to be taken is too much.

I then went to the pharmacy to investigate. Australian medicine was sold not only in pharmacies but also in supermarkets. Japanese pharmacies also sell household goods and groceries. Australian pharmacies, on the other hand, had medicine on the walls and all over.

I felt that Australian pharmacies were true "medicine stores". Not only the number of products but also the variety was large. I thought that since the cost of hospital treatment is high in Australia and



not many people go to hospitals, the demand for medicine in pharmacies is high and there are many kinds of medicines, They were large in volume and the containers were bottles or plastic bottles.

There were few paper box containers, They were not individually wrapped and the medicine was directly in the bottle, The prices were not much different from those in Japan, ranging from 1, 0 0 0 to 3, 0 0 0 yen. So, I found that Australia was more cost-effective with the larger quantities that were included, In terms of types of medicine, many supplements such as vitamins and magnesium were sold, Supplements are not very popular in Japan, However, in Australia, I felt that they are widely spread and familiar, I also thought that many people are very careful about their health.

There were many differences between Japanese and Australian medicines in size, color, smell, quantity, type, packaging, case, and so on, I felt that Japanese medicines were superior in every respect, I was also glad that I could see and drink the medicine there, which was a very valuable experience for me, Through this training, my interest in medicine has deepened.

【8】生徒の活動

令和4年度の本事業の活動として、教科教育や総合的な探究の時間、学校設定科目、特別活動、部活動など多様な活動を積極的に実施した。その中で、令和4年度に新たに始まった活動は以下である。詳細に関しては、次ページ以降に記載されている。

[A] 学校設定科目WWL特論

WWL特論Ⅰ（高校2年生・選択科目）：企業連携

[B] 高校生国際会議（奈良県）

令和4年度高校生国際会議（奈良県）への参加

（主催）奈良県教育委員会、奈良県立国際高等学校、高校生国際会議生徒運営委員会

[C] 全国高校生フォーラム

令和4年度全国高校生フォーラムへの参加

（共催）文部科学省、国立大学法人筑波大学

[D] メタバース展示会視察

先端技術を学ぶことを目的としたメタバース総合展などの現地調査

[E] Business Design Club実践報告（企業連携）

[F] SDGs未来倶楽部Sus-Teen!実践報告（企業連携）

[G] 総合的な探究の時間

中高一貫クラスの1年間の活動報告

[H] 高大連携講座

高大連携講座における活動報告

[A] 学校設定科目WWL特論（高校2年生・選択科目）：企業連携

実施時期：令和4年10月～令和5年1月末の計20コマ

対象生徒：中高一貫クラス、グローバル探究クラス、国際教養科の履修者計70名

授業者：内藤圭祐（英語科）、伊藤 恵（保健体育科）

連携先：①シャープ株式会社 ②株式会社a.school（エイスクール）

指導課程：

本校では社会文化的視点・経済的視点・環境的視点から、一筋縄では解決に至らない世界規模の社会課題に対して理解を深め、高校生の豊かな感性で、課題解決への道筋を立て実践する姿勢を育てることを目的として、学校設定教科『サステイナビリティ』、同学校設定科目『WWL特論』を開講している。高校2年生が選択科目として履修するWWL特論Ⅰでは、社会課題を数的エビデンスで捉える手法を学ぶとともに、外部連携による授業を実施した。

令和4年度の企業協働学習は、シャープ株式会社と連携し、「5年後のシャープが作るべき製品・サービスを創造しよう」をテーマとして以下の指導課程で実施した。

授業回	指導内容	授業回	指導内容
1	事業説明、事前アンケート実施	10-13	学内発表プランニング
2-3	SHARP動画教材を用いた学習	14-15	学内発表&代表グループ決定
4-5	SHARPについての深堀り学習	16-18	最終プレゼンテーション準備
6	木本氏特別授業①	19	SHARP最終プレゼンテーション
7-8	中間発表プランニング	20	振り返り、事後アンケート実施
9	木本氏特別授業②(中間発表)		

[1] 外部連携機関と役割

- ①金丸和生氏 (シャープ株式会社研究開発本部オープンイノベーションセンター所長)
最終プレゼンテーションにおける講評
- ②岩田拓真氏 (株式会社a.school代表取締役兼クリエイティブ・ディレクター)
授業で使用したスライド及びワークシートの制作、代表グループ選考
- ③木本 健太郎氏 (名古屋国際高等学校WVLカリキュラム・アドバイザー)
特別授業、中間発表講評、代表グループ選考

[2] 授業担当教員と外部連携機関での打ち合わせ

(参加者)

木本 健太郎氏、岩田拓真氏、余島 純氏 (株式会社a.school)、伊藤 恵、内藤圭祐
9月16日、月28日、10月12日、10月28日、11月11日、12月16日、
1月27日、2月10日の計9回。実施は全てビデオ会議システム (Zoom)。

[3] 指導課程の詳細

(SHARP動画教材を用いた学習・SHARP深堀り学習)

外部連携機関であるシャープ株式会社とa.schoolが制作した、経済産業省STEAM Library掲載の探究学習教材『技術は世の中をどう変えた? 「日本のものづくりの歴史～イノベーションを通じた社会課題解決』を用いた授業を実施した。本教材では、明治期から現在に至るまでのシャープ株式会社の歴史を動画とワークシートで学習することができる。また、最終的な生徒のアウトプットが、5年後の製品・サービスの企画であることを踏まえ、深堀り学習として、シャープが販売している既存の商品を分析する活動と、家電

明治～昭和初期の創業者たちの名言を言い当てよ!

名賢 [A]
模倣される商品をつくれ。

名賢 [B]
さよらはこれで最善だと思っていたことも、これはまだ最善ではない。まだほかに道があるかもしれないと考えれば、道は無限にある。

名賢 [C]
10の得意先を失えば、それに代わる20の新しい得意先を開拓する。

STEAM Libraryのスライド資料

ヒット商品分析シート-回答例

2001年:
液晶カラーテレビ「AQUOS(アークス)」<LC-20C1/15C1/13C1>

社会的背景	製品の価値	技術的強み
出せばどうなる?	その強みはどんな強みがあった?	その強みは既存製品や競合製品と比べてどんな強みを持ってた?
産業・インフラのサービス化の進展から B2C市場 (2000年) → B2B市場 (2001年) 製造業 (2003年)	- 初のプラズマディスプレイ - 年末、業界で初の液晶ディスプレイ投入 - 押入型へ対応が得意だった	顧客最大の商品「年末最後の贈り物」 世界最良顧客Aibonの追加が可能な 1人1台の液晶ディスプレイの導入。一歩 の先進から見て「見えないASV方式」 開発
その商品がどんなに どんな強みをもたせよ	誰のどんな課題を解決した?	比較した競合製品や競合機種の?
プラズマディスプレイの出現 顧客の方向 消費者も液晶が欲しい 消費者も液晶が欲しい 消費者も液晶が欲しい (2000年)	- 液晶ディスプレイの研発にも いかに得意 - 大規模でテレビも見ても問題に 製造最大規模 液晶20型 (2004年) 液晶30型 (2006年)	モノのブランドは40歳代と50歳代に 向く。 液晶パネルは40歳代、LEDバックライト (視野角)で見やすい

SHARP 製品ストーリー
https://corporate.sharp.info/the/corporate_story

深堀り学習のワークシート

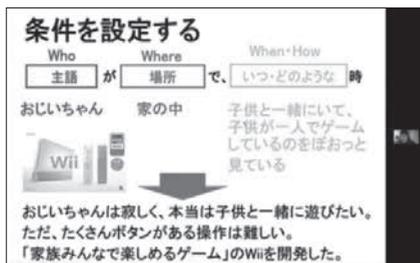
業界における企業買収やコーポレートスローガンの変遷など、企業としてのシャープを分析する活動を加えて実施した。

(木本氏特別授業①・中間発表)

カリキュラム・アドバイザーの木本氏から『社会課題とその解決方法の見つけ方』と題した特別授業をZoom実施した。

授業では、VUCA時代(Volatility-変動性、Uncertainty-不確実性、Complexity-複雑性、Ambiguity-曖昧性)におけるこれからの未来の中で、学問やビジネスにおける正解は存在しないことに触れ、任天堂の商品を例示しつつ、デザイン思考の仕組みについて指導した。また、この授業の終わりに生徒たちにシャープ株式会社を踏まえたテーマを提示し、「5年後にどんな社会課題があるだろう?」「5年後のどんな人をターゲットに製品・サービスを考える?」「5年後にシャープが取り組むべき製品・サービスとは?」という問いと各問いに対応した「5年後の社会課題想像シート」「5年後のターゲット設定シート」「商品・サービス企画シート」を導入した。

中間発表では、「商品・サービス企画シート」を用いて各グループが木本氏に対して自分たちのプランニングを発表させ、木本氏が改善点を含めた講評を行った。



Zoomによる木本氏授業の様子



生徒記入済みの商品・サービス企画シート

(学内発表・代表グループの決定)

中間発表での講評を踏まえ、各グループがスライド資料を作成してプレゼンテーションを実施した。各学科・クラスごとに授業時間割が異なるため、代表グループの選抜にあたっては、各学科・クラスごとに生徒間投票で1グループ、授業担当教員及び外部連携機関による選出で1グループを決定した。

授業担当教員及び外部連携機関からの選出にあたって、以下の評価項目を設定して事前に生徒に周知した。

社会課題解決の観点	社会の課題を捉えられているか
	課題を取り扱える大きさに分割して理解しているか
	アイデアは課題の解決に繋がっているか
企業経営の観点	シャープの理念と関連性があるか
	シャープの持つ技術やノウハウと相性が良いか
	シャープにとってやるべき内容か

発表者の動機・ 能力の観点	商品企画の動機など、企画に込めた自分たちの想いが伝わるか
	プレゼンテーションの構成は適切か
	アイデアの独創性や着想力があるか

（SHARP最終プレゼンテーション）

選抜された以下の7つのグループが、金丸和生氏（シャープ株式会社研究開発本部オープンイノベーションセンター所長）に向けてビデオ会議システム（Zoom）でプレゼンテーションを行い、講評を得た。

《最終発表グループ》

商品・サービス名称	内 容
OLD AGE EAR	耳から生体情報を収集する補聴器
詐欺ストッパー	AI技術でオレオレ詐欺を防止する固定電話
INFINITO	短時間で体の臭いを消臭する街中設置型のボックス
MPW（Menstruation Period Washer）	生理用品を洗浄・殺菌する家電製品
エコパーク・エコロード	人々の動きで発電する公園や歩道
海洋プラスチック×スマホアクセサリ	海洋プラスチックで制作したスマートフォンケース・フィルム
介護×ロボホン	介護や災害時にお年寄りの手伝いをするAIロボットアプリ



プレゼンテーションの様子



金丸氏（写真左）による講評

《金丸氏全体講評》

SHARP制作教材（STEAM Library）による学習がベースにあるため、単にITなどのソフトウェアではなく、技術やものづくりの理念に根付いた提案であった。SHARPでもスタートアップの取り組みを行っており、国も補助金を出すなどしている。国としても「技術の国、日本」が大切であると認識しており、この点ではどのグループも日本が持つ技術を活用した提案であった。今後の検討事項としては出口となるお客様満足度やそれに伴うコスト感へ言及が挙げられる。他社も含めた既存のサービスと自分たちのビジネスがどういう親和性を持ち、どう展開できるのかを探究する必要がある。また、技術の観点で言えば、国がどのような科学技術に予算を投じているかを調べることで、日本の未来観を理解することができる。

《木本氏全体講評》

実際のビジネスの現場では、これまで各グループが行ってきた議論や検討を何度も繰り返して商品化されていく。今回の探究学習では、そのプロセスを学ぶことができた。リサーチし、企画し、軌道修正して形にしていくという流れは、単に授業の中でのことではなく、大学やその後の社会における「生きる力」の1つであり、今回の探究学習で得た経験を様々なフィールドに活かしてほしい。

[4] 生徒自己評価ルーブリックの推移

本企業協働学習を行うにあたり、「学び方を学ぶ姿勢」「創造力」「知識」の3つの観点について自己評価ルーブリックを作成し、活動の事前・事後で自己評価の移り変わりを調査した。

◎学び方を学ぶ姿勢【事前】 1.83 【事後】 2.54 (+0.71)

自己評価	ルーブリック
1	学ぶ目標を自分で立てることができない。なぜ学ぶ目標が大切なのかを理解することができない。
2	学ぶ目標を立てることができる。
3	創造行為を振り返り、次に何をどのように学ぶべきかという未来の学習課題に部分的に結びつけている。自分が現在何をどの程度修得できているのか、課題を達成するためにはさらに何をどの程度修得すればよいのかを、ある程度把握し、差を埋めるための学習行動が見られる。
4	創造行為を振り返り、自分が現在何をどの程度修得できているのかを的確に把握した上で、次に何をどのように学ぶべきかという未来の学習課題を創造的に見出すことができる。自分が何をどのように学んだかという学びのプロセスを把握し、学びのプロセスをより進歩させたり、他の課題や科目に取り組む時にもその学びのプロセスを応用できる。

◎創造力【事前】 2.40 【事後】 2.89 (+0.49)

自己評価	ルーブリック
1	まずはどのような前例があるかを学ぶ必要がある。
2	パターン化された前例にあてはめて考えることができる。
3	既知の知識や技能を組み合わせるなどして活用することによって、新規性・独自性は十分でなくとも、何らかの手段、作品、活動、知識、概念等を作り出すことができる。
4	既知の様々な単元や教科の、あるいは学校での学習範囲以外の知識や技能を活用することによって、全く新しい作品、活動、知識、概念等を創造したり、事実や法則性を発見したりすることができる。

◎知識【事前】 2.10 【事後】 2.75 (+0.65)

自己評価	ルーブリック
1	基礎的な知識を学習する必要がある。
2	基礎的な知識を身につけている。
3	すべてではないが、重要な知識については身につけており、それらの一部をある程度他者に説明できる。
4	知識を幅広く身につけており、かつそれらを他者に適切に説明できる。また、獲得した知識と、実社会での活用方法を関連付けることができる。

実際の商品企画の探究ステップやそれに先立つ企業リサーチを体験したことが、学び方

を学ぶ姿勢や知識の自己評価にポジティブに働いたと考えられる。本取り組みでは1つの企業事例を取り扱うに留まったため、今後はデザイン思考を中心に、複数の事例を用いて指導課程を構築し、生徒のイノベーションを導く授業展開を意識したい。

[B] 高校生国際会議（奈良県）

名称：令和4年度高校生国際会議

日時：令和4年7月29日

主催：奈良県教育委員会・奈良県立国際高等学校・高校生国際会議生徒運営委員会

共催：国連世界観光機関（UNWTO）駐日事務所

会場：奈良春日野国際フォーラム「菟」

開催方法：ハイブリッド型（対面及びオンライン形式）

参加校（国内）：奈良県立国際高等学校・名古屋国際高等学校・長崎県立長崎東高等学校

奈良県立法隆寺国際高等学校・奈良県立高取国際高等学校

奈良女子大附属中等教育学校・大阪教育大学附属高等学校池田校舎

参加校（海外）：国立嘉義高級中学（中国）

プリンセス・チュラボン・サイエンス・ハイスクール（タイ）

参加生徒数（全体）：対面189名+オンライン参加

本校参加生徒：7名

趣旨：SDGs等の地球規模の課題に対して、国内外の高校生が高校生として何ができるかについて議論し、既存の仕組みを客観的に見つめ直し、最古の国際都市である奈良から持続可能な社会に向けて新たな価値を提唱していく。

〈参加生徒のリフレクション〉

・プレゼンは、「スクリプトをもう少し考えておくこと」、「ジェスチャーをしながら話すこと」など反省点はいくつかありますが、すごく楽しかったです。経験を活かして次に繋げていきたいです。また高校生国際会議のプレゼンにチャレンジしたいです。モンテカシム氏のスピーチが1番印象に残っています。奈良を探索するのも沢山学びがありました。

平塚杏紗(高校3年普通科)

・高校生国際会議を通して貴重な経験ができました。今日のプレゼンとディスカッションで他の高校生がどのような課題を持ちどのような解決策を考えているかについて知れてよかったです。他校の生徒と関わることでできて楽しかったです。ありがとうございました。

奥田彰尚(高校3年国際教養科)

・他校の生徒とディスカッションをしたりするのは初めてだったので、不安でしたがとても楽しかったです。正しいパワポの作り方なども知れてとても勉強になりました。さまざまな問題についていろいろな方面からの意見を聞いてとても面白かったです。

また機会があれば高校生国際会議に参加したいです。
二日間ありがとうございました。

鈴木詞子(高校3年普通科)



提言の発表



プレゼンテーションの準備(前日)



受付



グループディスカッションの様子



発表の様子



参加者全員で記念撮影

[C] 全国高校生フォーラム

全国高校生フォーラムはWWL事業に携わる高等学校に所属する生徒が日ごろの研究成果を発表するものである。今年度は国際理解研修に参加した高校2年生から選抜された生徒が、研修先での実体験をもとに発表した。事前に提出した発表動画を基に、運営事務局が似通ったテーマの学校でグループを編成した。そのグループには、大学の研究者も含まれている。フォーラム当日は、ビデオ会議システム（Zoom）を使用したオンライン開催であった。グループに分かれ発表内容の概要を発表しあい、質疑応答をした後、共通する社会問題解決のための議論・方策提言を行った。本フォーラムはすべて英語で行われた。

本校の発表タイトルは「Relationship between QOL and garbage problem」である。カンボジアのような発展途上国、オーストラリアのような先進国ではゴミ捨て・ゴミ処理のやり方が大きく異なる。例えば、街中にゴミであふれているような発展途上国とは対照的に、先進国は街中にデザイン性があふれるゴミ箱が溶け込み、美しい景観の一部と化していた。今回は特にプラスチックゴミに関する問題を取り上げた。オーストラリアのような先進国はプラスチックゴミを発展途上国に輸出することで自国の景観や環境を保護している現実があった。近年、発展途上国はプラスチックゴミの輸入を停止しているため、先進国はプラスチックゴミと向き合う必要が生じる。オーストラリアは観光立国であり、特に海の美しさが損なわれることは観光資源の喪失を意味する。つまり、オーストラリアのQOLが低下することが容易に想像できるのである。そこで、生徒たちは「ペトックス」を紹介した。「ペトックス」は本校のSDGs未来倶楽部が行ったプロジェクトの一つである。

ペットボトルから靴下をつくるものである。私たちでもこの問題に取り組みQOL向上ができるという道筋を示した。

フォーラム当日の質疑応答では、大学の研究者から「どのようにして調査活動を行ったのか」「どのようにしてペトックスを広めていくのか」といった質問が飛んできた。生徒たちは身振り手振りを用いながら英語で応答していた。グループ内の全校が発表したのち、各校が解決すべき社会課題と解決のためのキーワードを出し合った。今回は「プラスチック汚染」の解消に向け、どのように取り組むべきか、国レベル・個人レベル・高校生レベルに分けて考えていた。

全国高校生フォーラムを通して、直接経験の大切さと他者理解の必要性に参加した生徒は気付いていたと思う。他校は、調査方法に関して厳しい質問が飛んでいたが、本校はそのレベルを超えた、自分たちの取り組みをいかにして広めていくべきかという高次の課題を突き付けられていた。また生徒たちは、他国の人と対話をしていくために必要なことに気付いていた。それは相手のバックグラウンドや価値観に想いをめぐらせ、その土台を踏まえうえで他者と対話することである。国際理解研修やこのフォーラムでの経験が、生徒の気付きを生んだのだろう。グローバル化する社会において必要なスキルを、こうした教育活動から育んでいけるのではないかと考えている。



[D] メタバース展示会視察—先端技術を学ぶことを目的としたメタバース総合展などの
現地調査—

(a) 教員研修

名称：XR総合展

日時：令和4年7月1日

主催：XR Japan 株式会社

会場：東京ビックサイト

(b) 生徒研修

名称：メタバース総合展

日時：令和4年10月27日

主催：XR Japan 株式会社

会場：幕張メッセ

(c) 研修報告書（生徒）

○メタバース総合展の概要

「次世代のインターネットとも呼ばれ、社会や産業の在り方を大きく変えると言われて
いるメタバース。このメタバースを実現・活用するサービス・技術が一堂に出展し、メタ
バースでビジネスをしたい、企業の販促・経営・人事や小売り、エンターテイメント、製
造業、イベント関係者などあらゆる業界の方と直接商談することができる展示会です」*1

私は名古屋国際高校メタバースプロジェクト（以下、名国メタバース）の作成者の一人
として今後のメタバースのあり方と、活用方法の模索をする為に参加した。研修に行く以
前の私はメタバースとはコミュニティの一つであると考えており、SNSの新しい形だと
考えていた。それは以前から私が実際にメタバースに入り、交流をしていたことが背景に
あり、私の他にもメタバースに関心のある若者が多いと考えられる。

○メタバースの現状

現在メタバースという言葉の定義の広さ故に多種多様な分野が混ざりあっている。私が
作ったメタバースとは仮想空間上でのWeb会議システムの一部である。メタバースとし
てもっとも身近な形のものとなる。これはごく一部であり、私が今回の研修で得たものは
多種多様なメタバースのあり方であった。

まず初めに私はプロジェクターとモーションセンサーを利用した立体映像の体験を行っ
た。ARとVRの視覚移動をかけ合わせたような体験ができ、使用感は軽量ながら立体感
は素晴らしく、その場で触っているかのような錯覚を体験できた。この技術は娯楽など
ではなく、大学での実験や研修のシミュレーションへの活用が行われている。

またこの他にも撮影した動画をリアルタイムで仮想空間上に表示するものもあり、リア
ルの人間がそこに立っているかのような体験を味わえ、講義などの演出に使われる。

このようにメタバースとは一つのことを指す言葉ではなく、活用分野も幅広い。それ故
にメタバースという言葉では一体どれを指しているのか分からない。しかしながら業界と
しての成長は凄まじく、今後の発展性は未知数であることを今回の研修で再認識した。

○研修での学び

今回のメタバースを経て、メタバースの多様なあり方と言葉の定義の広さに驚愕した。自分が作ったものが、どれほど未熟で未完成だったのかを自覚しつつ、さらに良いものを作りたいという欲求が溢れ出た。

そして現在の名国メタバースの活用方法として、ウェブ会議の他、生徒間の交流にも使えるのではないかと考えた。メタバース内の交流であれば、遠くの場所にいながらも、複数人が複数人と話すことができ、ウェブ会議サービスよりも同時多発的かつ主体性のある交流ができることが期待できます。実際にメタバース研修において、他の会場の様子を見ることができ、会話をする際に距離によって音量が変わるため、複数人が話していても問題は生じなかった。

次に今後の学習についても心境の変化が見られた。私は元来ITに強い関心を持っており、他の生徒よりもある程度の知識は持っているつもりだった。しかしメタバース研修にて、自分の知らない世界を学ぶことができた。そのため、自分の持っている知識がどれほど偏ったものであるか気づき、知ることの大切さがより身に染みた。よってこれからはより貪欲に知識を得たい。そのため、これまで躊躇していたような事柄にも積極的に取り組み、学校の学びをさらに発展させていきたい。

○終わりに

普段は入れないB to Bの場に入ることができ、学校と引率の先生方に感謝しかありません。今回のITの最先端に触れることにより、今後の自分たちの未来を想像することができ、よりITを学ぶことの意義を確認することができた。また今回の研修に参加することにより、知らない知見を得るだけでなく、自分達とは違う世界の大人と話すことにより、関心の幅を広げより柔軟な発想と心を持つことができた。この経験を糧に、メタバースという言葉に踊らされず、行っている事そのものを見る必要性を今後意識して活動していきたい。

西川貴徳



展示場入り口



企業にインタビュー



メタバース体験中①



メタバース体験中②

[E] Business Design Club実践報告（企業連携）

(a) あいちスタートアップフェス2022

日時：令和4年5月14日

場所：ナディアパークCO&CO・FabCafe Nagoya
久屋大通公園

主催：(株)ICMG/愛知県庁/(株)CO&CO NAGOYA/
Tongari

概要：愛知県の起業家が若者にイノベーションのヒントを与える機会として開催。多様な分野のスタートアップ企業と意欲のある若者が体験を通して交流するイベント。



(b) ビジネスコンテストに向けた校外研修

日時：令和4年8月6日

場所：多治見市庁舎/多治見市全域

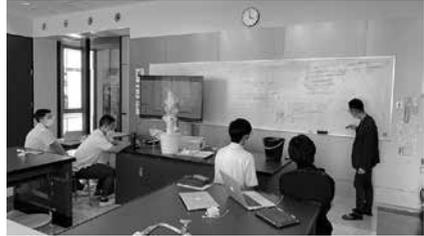


(c) 外部講師によるビジネスプランの講評会

来賓：第1回 京都大学農学部大学院生／第二回 株式会社コケナワ 社長

日時：令和4年8月18日

場所：名古屋国際中学校・高等学校



(d) スタートアップ・ユースキャンプ 主催：名古屋市経済局イノベーション推進部



(e) 高校生ビジネスコンテスト

日時：令和4年度秋季

主催：日本政策金融公庫

(f) アニメ「やくならマグカップも」原作

株式会社プラネットとの交流会

日時：令和4年10月27日

場所：ビデオ会議システム (Zoom)



(g) 傾奇者ピッチ大会 スタートアップフェス
主催：名古屋をどりの会（株式会社西川）
場所：名古屋市公会堂



(h) 第3回 外部講師によるビジネスプランの講評会・勉強会
来賓：株式会社アサヒユウアス社長 小山様
アサヒグループジャパン株式会社
高森様

(i) イノベーター座談会
日時：令和4年11月14日
場所：ナゴヤイノベーターズガレージ

(j) アイデアピッチコンテスト
日時：令和4年10月29日
場所：名古屋大学



(k) アクセサリーデザイナーとの商品開発
日時：令和4年下半年～

(l) 多治見ビジネスコンテスト最終審査
公開プレゼン大会
日時：令和5年1月28日
場所：セラミックパークMINO
プラン名① 多治見市の魅力を集めたコリラゼーション施設の提案
プラン名② 多治見発のアパレルブランドの設立



[F] SDGs未来倶楽部Sus-Teen!実践報告 （企業連携）

(a) SDGsシンポジウム 中部の「国連人間環境会議から50年」
日時：令和4年6月5日（日）13時30分～17時00分
場所：名古屋市公会堂

主催：中部ESD拠点協議会、名古屋環境大学、国連地域開発センター（UNCRD）等
内容：高校3年生が「SDGsで地域と世界を紡ぐ」というテーマで実践活動を報告した。参加者は中部地区の大学関係者や企業、NPO/NGOなど環境に関するステークホルダーであり、高校生1名という場において、高校生としての視点を自らの言葉で発表した。

SDGs シンポジウム

中部の「国連人間環境会議から50年」



「環境と開発」の問題を世界中で議論するきっかけとなった国連人間環境会議から50年がたちました。ストックホルムで1972年6月5日に開幕した同会議を記念して、中部地域における「環境と開発」の半世紀を振り返り、そのレガシーをSDGs時代の担い手に継承します。

2022年6月5日(日) 13:30～17:00
名古屋市公会堂 第7集会室
(名古屋市昭和区鶴舞1丁目1-3)

プログラム

開会挨拶 飯吉厚夫 (中部ESD拠点代表、中部大学理事長・総長) (13:30-)

基調講演

「ストックホルムから50年、リオから30年、そしてSDGs」 竹内恒夫 (名古屋大学名誉教授、※)

※=中部ESD拠点運営委員

パネル討論 第1部 (14:00-)

ストックホルム世代～中央工業地帯の公害経緯のレガシーは？

- ・伊藤 善治 (元東京新聞 [中日新聞] 論説委員)
- ・内河 恵一 (中部の環境を考える会 世話人、弁護士)
- ・福垣 隆司 (愛知環境カウンセラー協会 相談役、元愛知県副知事)
- ・朴 惠淑 (三重大学 特命副学長、WHO アジア太平洋環境保健センター 所長、※)

→ 休部

パネル討論 第2部 (15:00-)

リオ世代～リオのキーコンセプト SD は、この地域にどう活かされたか？
この地域の循環型社会づくり、エネルギー-地産地消は十分か？

- ・松原 武久 (東海学園大学 学長、前名古屋市長、なごや環境大学 初代学長)
- ・飯尾 歩 (中日新聞 論説委員)
- ・萩原 善之 (三河の山里コミュニティパワァー 専務取締役)
- ・杉山 範子 (世界首長誓約 / 日本 事務局長、名古屋大学 特任教授)

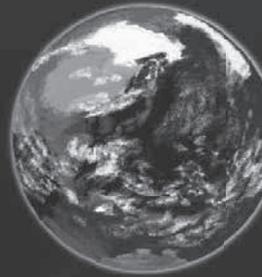
→ 休部

パネル討論 第3部 (16:00-)

SDGs 世代～SDGs、いったい何を目標す？

- ・吉澤 礼太 (中部ESD 拠点 事務局長、中部大学 准教授)
- ・戸成 司朗 (中部SDGs 推進センター 代表、※)
- ・油口 琢磨 (学生団体 ACTION FOR FUTURE 代表、中部サステナブル政策塾 塾生)
- ・鬼頭 美優和 (名古屋国際高等学校 3 年生 (SDGs 未来倶楽部 Sus-Teen!))

閉会挨拶 遠藤 和重 (国連地域開発センター 所長)



お問合せ 中部ESD 拠点協議会 (事務局：中部大学国際ESD・SDGsセンター内) Tel: 0568-51-4485 E-Mail: office@chubu-esd.net

主催

- 中部ESD 拠点協議会、なごや環境大学
- 中部の環境を考える会、愛知県環境カウンセラー協会
- 国連地域開発センター (UNCIRD)
- 中部大学国際ESD・SDGsセンター
- 中部圏 SDGs 広域プラットフォーム



参加申込み

参加登録は申込みフォームから！
(参加費無料)
<https://forms.gle/GAPEm8m4yMPwFQ9A>
中部ESD協議会 検索



(b) 2022名古屋超ローカル文化祭

日時：令和4年6月19日(日) 11時00分～18時40分

場所：オアシス21 銀河の広場

主催：公益社団法人 名古屋青年会議所

内容：地元企業と協働し、うなぎ料理で捨てられてしまうものを使用した新しい卵料理を考案し、イベントで市民に提供をした。

(c) 日本特殊陶業株式会社訪問

日時：令和4年7月22日（金）15時45分～17時00分

場所：日本特殊陶業3階カンファレンスルーム

主催：日本特殊陶業株式会社

内容：生徒10名が日本特殊陶業株式会社に訪問し、会社の概要や社内見学を行った。その後、社員の方と他の企業の方とSDGsに関するグループワークを行った。

(d) SDGs将来世代創造フォーラム2022

日時：令和4年8月24日（水）10時00分～16時00分

場所：名古屋中小企業振興会館 吹上ホール

主催：アサヒ飲料株式会社

内容：アサヒ飲料株式会社が主催のSDGsイベントに出展を行った。当日は、鹿児島の高校から送ってもらった桜島の火山灰を利用した「アッシュリウム」と名付けたワークショップを実践した。鹿児島の高校との交流において、火山灰の課題を議論した際に東海地区の方にも知ってもらいたいという意見からこの活動に繋がった。また、当日のイベントでは、中学生代表として、スピーチコンテストにも1名出場している。



(e) 環境デーなごや2022

日時：令和4年9月17日（土）10時00分～16時00分

場所：久屋大通・栄地区

主催：「環境デーなごや」実行委員会

内容：毎年、出展をしている本イベントでは、地域の森整備活動の発表やSDGs啓発玩具の体験やアップサイクルを考えるワークショップも行った。



(f) SDGs AICHI EXPO

日時：令和4年10月6日（木）7日（金）8日（土）10時00分～17時00分

場所：愛知県国際展示場

主催：SDGs AICHI EXPO実行委員会

内容：東海テレビ株式会社と日本特殊陶業株式会社に関わるアップサイクル商品等を行った。また、本校で作られたメタバース空間の体験も同時に行われ、仮想空間として作られた本校の校舎内をアバターとして歩き回ることができた。

(g) 日進市立北小学校での学習出前授業

日時：令和4年12月14日（水）13時50分～15時25分

場所：日進市立北小学校

主催：日進市立北小学校

内容：日進市立北小学校から依頼を受け、小学5年生4クラスの総合的な学習の時間（90分間）に「SDGs、アップサイクル」をテーマに高校1年・2年生が出前授業を行った。参加した高校生は人に教えるという体験が初めてであったが、児童たちの楽しそうな姿を見て、途中からは先生らしく見えてきたのが印象的であった。以下は、生徒が考えた指導案である。

1 実施学級 5年生(4学級)					
2 単元目標 高校生の視点から見るSDGsや環境問題を肌で感じることで、新たな考えをもち、自分事として考える。 アップサイクルについて知り、アイデアを出して行動することで社会は変わることを知る。					
3 本時の指導過程					
5限目					
	学習項目	学習活動	指導者の支援	備考	
導入	5分 自己紹介 学校紹介	メモを取る	・プリントを配布 ・今日のテーマを話す。	プリント グループワークの体 制	
					グループワーク
展開①	20分	1グループ発表 [グループワーク] グループごとに発表	発表に際して、発表のやり方を指示 する。 発表者に対して、コメントを言う。・が んばった人にSus-ガチャ券を渡す。 →ガチャは廊下に設置(授業後に体 験できる。)		
					5分 アップサイクルを 知る。
終結	5分				
6限目					
	学習項目	学習活動	指導者の支援	備考	
導入	2分 振り返り			前の時間について簡単に振り返る	
					15分 活動紹介
展開①	20分	疑問に思ったことを聞く。			
					20分 アクティビティ [なんでもエコバス ケット]
終結	8分 まとめ			・SDGsについて話す →身近な地域課題の解決が世界の 課題解決につながる。 →まずは、日頃から地球環境や人に 対して思いやりをもって行動するこ とを心がける。 →小学生でも「やればできる」	

(h) 片平学区ローカルSDGsプロジェクト-SDGsマルシェ&トークー

日時：令和5年2月11日（土）10時00分～16時00分

場所：片平ふれあいセンター

主催：片平学区連絡協議会、「なごや環境大学」実行委員会

内容：名古屋市緑区の片平学区はSDGs推進地区となった。その計画として本イベントが開催された。名古屋国際中学校・高等学校のSDGsの取組に関して、実行委員会より出展協力の依頼を受け、SDGsに関する実践活動の紹介や「サステナブルえびせんべい」の紹介などを行った。

(i) みんなでSDGs

日時：令和5年2月26日（日）10時00分～14時00分

場所：あま市美和文化会館

主催：あま×SDGs、あま市美和文化会館

内容：「知る」「見る」「行動する」を楽しみながら体験し、日常生活の中でのプラスワンアクションを目指すイベント。実行委員からの出展の依頼を受け、SDGsに関する実践活動の紹介やアップサイクル商品の展示を行った。本イベントに関しては、東海テレビ放送との協働イベントを同時開催した。トルコ・シリア大地震への募金活動を行い、東海テレビを通して「サザエさん募金」への寄付を行った。



(j) TOYOTA Good Piece Contest

日時：令和5年3月12日（日）10時00分～18時00分

場所：愛知学院大学

主催：TOYOTA、Re.Bell

内容：本イベントに出展する日進市にブースに名古屋商科大学と名古屋国際中学校・高等学校が協力し産学官民の多様な実践活動を発表した。自治体と大学と高校・中学校と企業が一つのブースを運営したのは初めてであった。今後、こうした連携をより推進していくことが重要だとそれぞれの担当者が再認識した機会になった。



(k) 令和4年度「SDGsセミナー」みんなで選ぶ「NPOアワード」

- 日時：①令和4年8月6日（土）
13時30分～16時30分
②令和4年8月13日（土）
13時30分～16時30分
③令和4年11月13日（日）
13時30分～16時30分
④令和4年11月20日（日）
13時30分～16時30分



- 場所：①③名古屋会場 ウィンクあいち
②④豊橋会場 emCAMPUS

主催：愛知県

内容：本イベントは、多くのNPOに対してSDGsセミナーの実施とアワードの開催を目的としていた。本校生徒は、NPOの方々にSDGsの実践を発表し、質疑応答をする役割として依頼をされた。合計4回にわたる発表と質疑応答を生徒たちは楽しんでいるように見えた。また、本校教員はアワードの審査員も担った。

(l) 八事里山づくりの会との協働活動

主催：昭和区役所、八事里山づくりの会

内容：名古屋市昭和区役所と昨年度から継続している八事興正寺公園内の森の保全活動である。間伐作業のみならず、地域の方がとの交流をするイベントも行った。

・地域との交流活動

日程	活動のテーマ	活動の内容
10月30日 (日)	秋の里山親子体験会	里山探検とドングリクラブト教室など
12月10日 (土)	クリスマスリースづくり	つるや落ち葉、木の実で作る教室など
2月11日 (土)	カブトムシの棲家づくり	落ち葉を集めてたい肥作り



・森の整備活動

- 9月10日（土）10月14日（金）11月19日（土）12月10日（土）
1月14日（土）に八事興正寺公園内で間伐や下草刈りなどの森の整備活動を実施

[G] 総合的な探究の時間 ―中高一貫クラスの1年間の活動報告―

[1] 日時・場所

- ①令和4年4月～ 週1回45分
- ②令和5年2月6日～7日 長崎・佐賀校外学習

[2] 参加生徒数

- ①名古屋国際高等学校1年（4年、1年B組、1年C組）109名
- ②名古屋国際高等学校1年（4年）44名、引率教員：2名

[3] 内容

本校ではグローバルな視点で持続可能な社会実現のための人材育成を目的に総合的な探究の時間を設けている。1学期では地元地域社会を理解する学習及び「ゼロをイチにする」力の育成、2学期前半は1学期で考えたものを文化祭に向けて実現させて、後半は自らの好きなことで世界を変える学習を行った。3学期では来年度の国際理解研修のフィールドワークの練習として、長崎・佐賀校外学習を実施した。

[4] 長崎・佐賀校外学習の概要

日本は幕末から明治期にかけて西洋の技術や知識を得て、類まれなスピードで工業化・近代化を成し遂げた。その証明である世界遺産「明治日本の産業革命遺産」として選ばれた。日本に西洋技術を伝えたグラバーのビジネス拠点である旧グラバー住宅や近代の造船所がある佐世保を巡りながら近代産業の成長過程やその課題を学ぶ。

[5] 主なスケジュール

令和4年4月～6月：地元企業のCMを「勝手に」作ろう

目的：地元企業の魅力を知り、グローバルな視点を身につける。

令和4年6月～7月：オリジナルゲームを作ろう

目的：今までにない画期的なアイデアを形にできる創造的な発想を推進する。

令和4年9月：文化祭に向けた準備

目的：7月に創造した「オリジナルゲーム」を実現する。

令和4年10月～12月：みんなの知らない〇〇な世界

目的①：自らが興味のあることをより深く探究する。

目的②：自分の好きなものがどう社会問題を解決するかを探究する。

令和5年1月～2月：長崎・佐賀校外学習

目的：事前学習・プラン作成・フィールドワーク・事後学習の方法をそれぞれ学ぶことで、来年度の国際理解研修に備える。

[6] 活動の様子



↑佐世保軍港クルーズ

佐世保では近代の造船所を見学することができた。



↑フィールドワークの様子

地元の人にインタビューをし、長崎の魅力を学ぶ。



↑日本に伝わったビードロの体験

生徒たち自らが散策プラン作成。ビードロ体験をしたグループもあった。



↑佐賀の吉野ヶ里遺跡で課題実行

社会科教員によって伝えた課題を当時の生活を体験しながら学ぶ。

[7] 生徒の変容

本校の総合的な探究の時間の目的を実現するためには生徒が主体的に取り組むことが必要である。しかし、社会課題に対して、最初からそれをするのは困難であった。よって、自分の好きなことや興味のあることから始めなければ意欲的に取り組むことができないと感じた。実際に2学期以降の活動は主体的に取り組んでいる生徒が多かった。「持続可能な社会の実現」という言葉がただの机上の空論にならないように自由な発想で楽しみながら学ぶことが必要である。

[H] 高大連携講座—高大連携の授業デザインを模索する—

WWL特論(高大連携)では、名古屋商科大学所属の砂原美佳氏とともに授業を展開した。

本授業において4つの実践を行った。

①SDGsに関わるフィールドワーク

4人程度でグループを組み、SDGsに関連し、かつ二時間程度で帰ってこれそうな場所を調べ、フィールドワークを実施した。例えば、JICA名古屋や東山動植物園などに調査に向かっていた。その後、砂原氏に報告するグループ発表や、個人でレポート作成を行った。

②砂原氏による講義

砂原氏は法分野における国際協力の専門家である。その観点から、国際協力の必要性や多様性、実態の講義をしていただいた。その中で、一つの事象にはいくつかのSDGsが関わっていることを実例から学んだ。砂原氏はカンボジアに民法をつくるプロジェクトやモンゴルの法律家育成などに関与されている。例えば民法の制定は、「すべての人に平和と公正を」だけでなく、「貧困をなくそう」、「ジェンダー平等を実現しよう」「住み続けられるまちづくり」などに関わりがある。法分野の知識だけでなく、幅広く柔軟な視点で事象を見つめることの必要性に気付いた。

③再度フィールドワーク

砂原氏の講義を経て再度フィールドワークを実施した。同じ場所に出かけ異なるSDGsの目標にも着目した班や、講義を経て生まれた新たな視点や疑問の解決に向けフィールドワークを行った班があった。例えば、下水道科学館やリサイクルショップに出かかっていた。2度フィールドワークを行うことで学びが深まっていったと感じる。

④高校生と大学生の交流活動

砂原氏のゼミ生（名古屋商科大学）を本校にお招きし、高校生と大学生の交流活動を二週にわたり実施した。高校生側は学校紹介や部活動紹介、国際理解研修での取組等を発表した。大学生側は大学での学びの概要に加え、ネパールからの留学生は自身の国に関する発表を行っていた。留学生の発表では質問が相次ぎ、授業終了後は高校生と大学生が個別に交流している様子が見られた。本授業を通して、特に④の授業の学びが深いものであったと感じる。大学生と交流することで、自分の将来を考えるキャリアデザインに直結する。大学生も発表のスキルの向上につながると考えられる。これから高大連携事業を進めていく中で、高校生・大学生の両者が学びの深まりがある授業デザインを目指していきたい。



授業後の高校生と大学生の交流



大学側の留学生の発表

【9】WWL高校生国際会議

スクリーン越しに交流するビデオ会議システム（Zoom）と異なり、仮想空間（メタバース）では、より没入感のある体験をすることができる。またアバターを通じて交流するため、文化・言語の違いによるハードルが低く、多様な意見や知識が集まることが期待される。没入感のある学習体験、バーチャルな教育環境の創造、参加者間のコラボレーションの促進を目指し、対面と仮想空間（メタバース）のハイブリッド方式でWWL高校生国際会議を開催した。仮想空間（メタバース）上での対話や議論の様子をリアルタイムでインターネット上に配信した。以下、その詳細を示す。

〔1〕開催要項

WWL高校生国際会議 開催要項

1 趣旨

地域課題解決へ向けた若者のアイデアの実践発表と意見交換や事業拠点校・事業連携校などの生徒が自らの地域の社会課題解決に向けたアイデアと実践を英語による発表で行う。その結果、地域差による課題のあり方や国内外の多様な考え方を知るきっかけとなる。

2 主催

学校法人栗本学園 名古屋国際中学校・高等学校

3 期日

令和4年12月27日（火）

4 開催方法

ハイブリッド型（対面および仮想空間を使用したオンラインを併用して実施）

対 面：名古屋国際中学校・高等学校

仮想空間：NTT XR Space WEB（DOOR）

5 日程

9：00～ 9：30	受付（ログイン）
9：30～ 9：40	開会
9：45～10：45	基調講演：ARUN Seed（代表理事 機能聡子 氏）
10：45～11：00	休憩
11：00～11：30	アイスブレイク ～VR カンファレンスに慣れよう！～
11：30～12：30	昼食休憩
12：30～13：30	ポスターセッション
13：30～13：45	休憩
13：45～14：45	VRカンファレンス
共通テーマ：高校生が「Society 5. 0における未来の学校」に向けてできること	
14：50～15：20	まとめ・提言
15：20～15：30	閉会

<詳細説明>

◎ 基調講演

講演者：特定非営利活動法人ARUN Seed

代表理事 機能聡子 氏

◎ アイスブレイク ～VRカンファレンスに慣れよう！～

仮想空間におけるアバター操作方法を学びます。

◎ ポスターセッション

各校のSDGs活動について、1校ずつ順番に発表してもらいます（5分程度）。

それぞれの発表後は質疑応答を行います（2、3分程度）。

ポスター作成、発表、質疑応答は英語で行います。

※ 発表内容の原稿（日本語訳）を事前に提出していただきます。

提出された原稿は、当日ポスター横に掲示します。

◎ VRカンファレンス

共通テーマ：高校生が「Society 5. 0における未来の学校」に向けてできること

< Society 5. 0に対応できるための「学び」に向けて何が必要かを議論する。 >

・シンギュラリティーに向けた学び

・新しい職業が生まれること（もしくは職業がなくなること）が予想される中で、何を学ぶか

・COVID-19を経験した高校生が考える「シン・タンキュウ」とは

[2] ポスター

【テーマ】 高校生が「Sorciety5.0における未来の学校」に向けてできること

高校生

国際会議



<https://www.youtube.com/@user-cd6gy4sv7j/featured>

【主催】 学校法人栗本学園 名古屋国際中学校・高等学校
【日時】 令和4年12月27日(火)9:00～15:30
【開催方法】 仮想空間
【基礎講演】 講演者:特定非営利活動法人ARUN Seed
代表理事 功能聡子 氏

[3] 内容

(1) 基調講演

「持続可能な社会ってなに？ 未来に向けたわたしたちの挑戦」をテーマにNPO法人ARUN Seed 代表理事 功能聡子氏による基調講演を実施した。本校生徒と名東高校生徒が本校で聴講し、他の参加生徒はライブ配信で講演を視聴した。

<主な内容>

持続可能な社会について、ARUN Seedの取り組み、未来を拓く社会的企業に関する講演を行なった。ARUN Seedの設立からこれまでの歩み、サステナビリティを軸にしたARUNの活動（インドの酪農ITO事業、インドネシアの籠編み事業）についての発表があった。最後に、未来に向けた一歩をどのように踏み出すのか、自分をより良く社会で使うための方法についての話があった。



(2) アイスブレイク

仮想空間（メタバース）上でのコミュニケーションを円滑に進めるために、基本操作の説明後、アイスブレイクとしてYes/Noクイズを実施した。

ルール：出題された問題に対する答えを制限時間内に考え、それぞれ正解だと思うエリア（仮想空間（メタバース）の床部分に示されたYes/Noの周辺）に移動する。

最初の操作には戸惑いが見られたものの、他の参加者と楽しみながら交流することで、自然な形で操作方法を身につけることができた。



(3) ポスターセッション

令和4年度における各校のSDGs実践活動についての発表及び参加者との対話を英語で実施した。

ポスターは仮想空間（メタバース）上に掲示されており、各アバターが発表者のポスター前に移動して発表を聞き、質疑応答を行なった。

①What Is The Truth Behind The Ingredients? 高知県立高知国際高等学校

「食品ロス問題の解決」をテーマとした探究活動の発表を行なった。フランスと東京での過去の事例を比較・検討し、高知県で高校生が実現できる解決策、高校生から発信できることは何かを考察した。

②The Interest-based Problem-solving Classes in Our School 京都市立西京高等学校

西京高等学校における探究学習の紹介を行った。「社会と私たちを取り巻く環境問題について、自分自身をどのように変革したいか」ということをテーマに実践したフィールドワークについて発表した。

③Practical Activities at NUBC International High School 名古屋国際高等学校

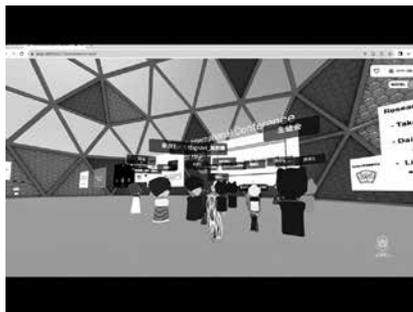
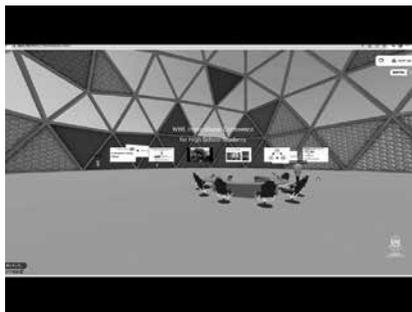
地元企業とのSDGsの実践のためのコラボ企画、学校設定科目（WWL特論）の学び、国際理解研修におけるフィールドワークについての発表を行った。

④DISASTER PREVENTION 名古屋市立名東高等学校

名東高等学校英語科有志による防災探究学習の発表を行った。防災に関する調査や活動を通じて、防災を楽しく学ぶための方法について検討し、「備えよう！名古屋。みんなの唄。」などの企画紹介、説明を行った。

⑤Let's communicate easily 奈良県立国際高等学校

「言葉の壁」をテーマとした探究活動の発表を行った。留学生たちがより快適に過ごせるように考案された校内マップや校内ツアーの紹介と探究活動の中での意見交換について発表した。



(4) VRカンファレンス

VR Conferenceでは、探究学習を実践している高校生と先進的な企業活動をしている社会人との対話により新しい時代における高校生の学びを再生（Regeneration）させるヒントを生み出す。

- (i) テーマ：高校生が「Society 5.0における未来の学校」に向けてできること
- (ii) 目的：Society 5.0の社会に対応するために、必要な「学び」を創出する
- (iii) 目標：日頃の探究学習を振り返りながら、以下の3つを議論する。
 - (a) シンギュラリティーに向けた学び
 - (b) 新しい職業が生まれること（もしくは職業がなくなること）が予想される中で、何を学ぶか
 - (c) COVID-19を経験した高校生が考える「シン・タンキユウ」とは
- (iv) 宣言：「Society 5.0における未来の学校では……」
- (v) 方法：各学校に1名のアドバイザーが参画

学校名	アドバイザー		
高知県立 高知国際高等学校	東海テレビ放送 株式会社	勅使河原 由佳子	社長室CSR推進部
京都市立 西京高等学校・附属中学校	株式会社 ignArt	林 将輝	取締役・日本特殊陶業株式会社 社内ベンチャー
名古屋国際中学校・高等 学高等学校	アサヒ飲料 株式会社	吉田 明廣	中部北陸支社MD部部长
名古屋市立 名東高等学校	特定非営利活動 法人ARUN Seed	池島 利裕	チーフアドミニストレーター
奈良県立 国際高等学校	株式会社デンソー	内藤 壽久	環境ニュートラルシステム開発部/ 中部プロボノセンター

①アドバイザー目線で高校生の探究活動を考察：ポスターセッションの内容に関して、アドバイザーからの質問を受ける。



メタバース内の様子



対面での様子

②アドバイザーが活躍する社会：アドバイザーから今の社会（会社の様子・働き方・スキル・社会の動きなど）について聞く

→現在及び未来に予想される社会やそこにむけて必要なスキル・能力を知る。

③各学校とアドバイザーで議論：自らの探究学習を振り返り、今後学校で学ぶべきこと・どのように学ぶかを話し合う。→「シン・タンキユウ」を考える

・円卓の外でアドバイザーと生徒が議論をする場所がある。議論する場所に、他のアバターが近づけばその議論の様子を聞くことができる。

④各学校で、議論の内容を発表

中央の円卓にアバターが集合し、そこで議論の内容を発表する。

⑤発表に関する質疑応答

⑥提言を考える

⑦講評：池島利裕氏



メタバースと対面の集合写真

WWL 高校生国際会議 VR カンファレンスから、提言発表へ

2022/12/27

各高校及び企業が考えた新しい時代の新しい学びは以下の通りでした。

- ①高知県立高知国際高等学校&東海テレビ放送株式会社
→場所、時間、様々な格差にとらわれなくなることで、学びの幅が広がる。
ICT 技術を習得し、活用することで可能性が広がる。
- ②名古屋市立名東高等学校&NPO法人 ARUN Seed
→様々な分野の人々と協力・協働することで、学びが広がる。
教科書の学びだけでなく、実際に経験することが大切。
政府は教育にお金をかけるべき。
- ③名古屋国際中学校・高等学校&アサヒ飲料株式会社
→学校という施設は必ずしも必要ではないかもしれない。ICT 技術を駆使することで、簡単にはいけないような場所を疑似体験することもできる。
国や国境を越えて、様々な人々と交流し、相互理解を深めることができる。
- ④奈良県立国際高等学校&株式会社デンソー
→ICT 技術が発達しても、対面でしかできない良さもある。
直接コミュニケーションをとることの大切さ、声のトーン、表情など、対面でしか感じられないことも大切にしたい。
- ⑤京都市立西京高等学校・附属中学校&株式会社 ignArt
→好きこそものの上手なれ。興味を持っていることを突き詰めていくことが専門知識の習得につながる。学校の教員だけでなく、様々な分野の専門家に教えてもらうことも大切。
学校外のコミュニティーの人々と交流することも大切。

以上のことから、様々なことにとらわれない新しい教育が大切であると結論づけました。

提言：『New Borderless Education』

(1) ハード面

ICT 技術を駆使することで、場所や時間、機会、様々な格差に関係なく、いつでも、どこでも、どんな状況でも、どんな境遇でも、学ぶことができます。

(2) ソフト面

学びの内容も、教科書や学校ということにとらわれすぎず、様々な人から様々なことを学ぶことで、生徒の可能性が広がります。好きなことを突き詰めることでその分野の専門家になることもできます。国や学校がこういう学びをしてほしい、こういう生徒になってほしいと決めるのではなく、生徒一人一人がこういう学びをしたい、こういう人になりたいと願い、それが実現できる教育です。

○WWL高校生国際会議提言ポスターの制作

令和5年度は、以下のポスターをALネットワーク内に普及し、高校生が考えた提言の啓発を行う予定である。



2022年度 WWL高校生国際会議 提言

New Borderless Education

Tangible initiatives

ICT allows students to learn anytime, anywhere, in any situation, and under any circumstance, regardless of location, time, opportunity, and various disparities.

Intangible initiatives

Learning should not be too confined to textbooks or schools.

Learning a variety of things from a variety of people expands a student's potential.

By figuring out what we like to do, we can become an expert in that field.

Instead of the state or school deciding how students learn and what kind of students they will be, the new education is one in which each student decides what kind of learning they want to do and who they want to be, and they can make that happen for themselves.

(事業拠点校)名古屋国際中学校・高等学校 / (事業連携校)名古屋市立名東高等学校 / 奈良県立国際高等学校 / 高知県立高知国際高等学校 / 京都市立西京高等学校・附属中学校

[4] アンケート結果

【参加者の回答】

本提言を実現させるために、今後あなたの行動をどう変容させようと意識しますか

- ・ 自立した意見と思いやりを両立させることが大切だと感じた。自分を持つことで他者に囚われない人になり、その意識が集まることで「とらわれない」ということが当たり前になると思う。
- ・ 先進的な取り組みにしり込みをしないような姿勢をもてるように努力する。
- ・ 学校などによるテクノロジーの入道への賛成のみならず、自らがオープンマインドになることで、ハード面と共にソフト面においてもボーダーレスな教育現場づくりに協力していきたい。

他のオンラインコミュニケーションツール（ビデオ会議システム（Zoom）やGoogle Meetsなど）と比較して、メタバースでの会議運営で気がついたこと

- ・ 接続があまり良くなく、Zoomでやる方が自分の取り組みを相手にうまく伝えられる気がした。しかし、メタバース空間だと、自分がアバターで別の空間にいるので不思議だが、楽しい要素もあった。
- ・ キャラクターのカスタマイズが可能で、バリエーションも豊富なのが特徴で、若い世代も楽しく参加できると思った。
- ・ こちらのほうが面白みはあるが、接続が遅かったり、音が交わったりしてしまうので、改善点がある。

学校教育の場で、メタバースを活用すると良いと思われる活動アイデア

- ・ 入学希望者などがメタバースを通していつでも学校見学を出来るといい。
- ・ コロナのようなパンデミックが起こった時や天候の影響で学校に登校できない時にメタバースを活用して授業ができるとZoomとはまた違い、アバターを操作して教室を移動したりして、ゲームのような感覚で楽しめると思う。
- ・ 匿名で話し合わせて「声の大きい子」以外の意見を平等に集約するための機会。
- ・ Zoomでは恥ずかしくて意見が出しにくい時に利用する。
- ・ クラスや学年を越えたディスカッション

その他、意見・感想

- ・ メタバース空間で発表会、交流会ができたことは、大変良い経験になった。また、アバターを動かして行う発表会がとっても新鮮で新しかった。しかし、PCスペックやWifi環境の整備が不十分であったかと思うので、この状況を何とか改善していく必要がある。
- ・ メリットとしては、相手の顔が見えず声だけであるため、実際に会うより話しやすいこともあると思う。デメリットとしては人の表情が見えないため、感情が伝わりづらいところである。
- ・ 自分のプライバシーが比較的守られていると感じた。

○WWL高校生国際会議参加証明書の発行

WWL高校生国際会議に参加した生徒には、以下の参加証明書を発表し、今後の実践活動への励みとしてもらう。



CERTIFICATE OF PARTICIPATION

KOKUSAI Taro

This is to certify that you have participated in the International Conference of WWL (Worldwide Learning) High School Students in the Support Project for Building the WWL Consortium conducted by our school.



Proposal : New Borderless Education

December 27, 2022

WWL Curriculum Development Hub School
NUCB International Junior & Senior High School

小林 格

KOBAYASHI Itaru, Headmaster

名古屋商科大学系列校
名古屋国際 中学校
高等学校
NUCB INTERNATIONAL JUNIOR & SENIOR HIGH SCHOOL

【10】ConnectEd 2023

例年、対話セッションという名称で実施してきた実践報告会を令和4年度より「ConnectEd」という名称に変更した。本校が実施したWWL高校生国際会議における提言から検討され、より社会と繋がる教員を目指すという大きな目標を掲げたことによる。Connect 2023では、生徒及び教員に日々の実践活動に加え、STATION Ai株式会社代表取締役社長 兼 CEO 佐橋宏隆氏の特別講演を企画した。以下、その詳細を記す。

[1] 開催要項/配布ポスター

ConnectEd 2023 開催要項	
～WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業成果報告会～	
1 趣旨	WWLカリキュラム開発拠点校（2022年度文部科学省により指定）として進めている研究開発・実践成果の報告会を行うことで、「Society5.0における未来の中等教育機関のあり方」を探究し、「ニューノーマル（新たな日常）における高校生の実践」へと繋げていく。
2 主催	学校法人栗本学園 名古屋国際中学校・高等学校
3 期日	令和5年2月4日（土）10:00開会 14:00閉会
4 形式	対面（名古屋国際中学校・高等学校） オンライン（Zoom）ミーティングID：838 1506 2735 パスワード：NIHS
5 当日の流れ	9:30-10:00 受付（Zoom接続開始） 10:00-10:15 開会 10:15-10:25 WWL事業説明 10:30-12:15 活動報告 1 2022年度全国高校生フォーラム＜高校生の事例発表＞ 2 2022年度WWL高校生国際会議＜高校生が考えた提言＞ 3 国際理解研修の再開＜カンボジア・ベトナムコース＞ 4 企業協働学習＜学校設定科目「WWL特論I」×シャープ株式会社＞ 5 仮想空間（メタバース）の活用＜Business Design Club＞ 6 企業・NPO法人・自治体とのパートナーシップ ＜SDGs未来倶楽部 Sus-Teen!＞ 12:15-13:00 昼食休憩 ※昼食は各自でご用意ください。 13:00-13:50 特別講演 講演者：佐橋 宏隆 氏（STATION Ai 株式会社 代表取締役社長 兼 CEO） テーマ：「スタートアップエコシステムがとくする愛知の未来」 13:50-14:00 講評 名古屋商科大学商学部教授 亀倉 正彦 氏 14:00 閉会



ConnectEd 2023

WWL(ワールド・ワイド・ラーニング) コンソーシアム 構築支援事業成果報告会

文部科学省は、Society5.0に向けたリーディング・プロジェクトの一つとして、世界で活躍できるイノベティブなグローバル人材を育成するため、高校生へ高度な学びを提供する仕組みを形成した拠点校を全国に配置することで、WWLコンソーシアム構築を目指しています。名古屋国際中学校・高等学校は、WWLカリキュラム開発拠点校(2022年採択)として、国際教育を推進する機関とながり、「Society5.0における未来の中等教育機関のあり方」を探究し、その実現に向けて研究開発・実践を進めています。

※ConnectEdは、国際教育推進校によるイノベティブなグローバル人材育成プロジェクトです。



NUCB International Junior & Senior High School

2023. 2.4 SAT

時間 10:00 ~ 14:00
(9:30 開場・接続開始)

定員 100名(申込先着)

形式 対面・オンライン開催 (Zoom)

テーマ 新たな日常
ニューノーマルにおける高校生の実践

右記QRコードから
お申込みください



SCHEDULE

- 10:00 開会
- 10:15 名古屋国際中学校・高等学校におけるWWL
コンソーシアム構築支援事業の概要説明
- 10:30 活動報告
 - 高校生の実践**
 - 1. 2022年度全国高校生フォーラム
＜高校生の事例発表＞
 - 2. 2022年度WWL高校生国際会議
＜高校生が考えた提言＞
 - 3. 国際理解研修の再開
＜カンボジア・ベトナムコース＞
 - 4. 企業協働学習
＜学校設定科目「WWL特論」×シャープ株式会社＞
 - 5. 仮想空間(メタバース)の活用
＜Business Design Club＞
 - 6. 企業・NPO法人・自治体とのパートナーシップ
＜SDGs 未来倶楽部 Sus-Teen!＞
- 13:00 特別講演
 - テーマ**
 - スタートアップエコシステムがつける愛知の未来
STATION Ai株式会社
代表取締役社長 兼 CEO 佐橋 宏隆氏
- 13:50 講評
- 14:00 閉会

名古屋商科大学
名古屋国際 中学校
高等学校

【お問い合わせ】
名古屋国際中学校・高等学校 (WWLカリキュラム開発拠点校)
E-mail: connected@nihs.ed.jp

[2] 詳細

(1) 事業説明



[発表者]

黒宮祥男教諭（国際教育推進主任）

[内容]

ConnectEd 2 0 2 3 開催に至る経緯やWWL事業に関する本校が目指すべき方向性について説明をした。特に、生徒たちが生きる未来について、過去と現在と未来の歴史的な相違点を考えながら今学すべき力とは何かという点について説明した。

(2) 活動報告

活動報告は、2つのエリアに分け、6つのテーマに関する発表を行った。発表は、①生徒のみ②教員のみ（+生徒）③生徒と外部関係者の3つの形式を取り、多様な立場での報告や質疑応答ができるようにした。発表の様子は、オンライン配信をし、全国の方々に視聴及びチャット機能を用いた質疑応答できる体制を整えた。

【令和4年度全国高校生フォーラム〈高校生の事例発表〉】



[発表者]

全国高校生フォーラム参加生徒3名
（高校2年生）

[内容]

全国高校生フォーラムにおいてオンラインで実践報告（企業協働に関する事例発表）に関する内容や当日の感想などを発表した。

【令和4年度WWL高校生国際会議〈高校生が考えた提言〉】



[発表者]

WWL 高校生国際会議参加生徒1名
（高校3年生）

[内容]

VRカンファレンスで決定した高校生が考えた提言がどのように議論が進み、決定していったかの過程を説明した。

【国際理解研修の再開 〈カンボジア・ベトナムコース〉】



[発表者]
後藤彩可教諭
(質疑応答) 生徒2名 (高校2年生)

[内容]
海外研修再開に向けた教員側の生徒へのアプローチや準備方法、研修を通じて生徒がどのように変容していったかをテーマに発表をした。

【企業協働活動 〈「WWL特論」×シャープ株式会社〉】



[発表者]
内藤圭祐教諭

[内容]
学校設定科目WWL特論で実践されたシャープ株式会社との協働学習に関する一年間の授業の様子や生徒の変容を発表した。

【仮想空間 (メタバース) の活用 〈Business Design Club〉】



[発表者]
神山清光教諭

[内容]
Business Design Clubの生徒とともに仮想空間(メタバース)を構築した歩みについて発表した。当日は、実際にiPadを使用しメタバースを体験してもらう。

【企業・NPO法人・自治体とのパートナーシップ 〈SDGs未来倶楽部 Sus-Teen!〉】



[発表者]
生徒2名 (高校1年生、中学3年生)
東海テレビ放送株式会社
勅使河原 由佳子氏

[内容]
生徒と東海テレビ放送株式会社との一年間を通じた協働活動について発表した。当日は、勅使河原氏から生徒の変容についてお話があった。

(3) 当日の様子



会場外では、参加された方々と交流を深めることができるような若手の先生や生徒が創意工夫をしてオープンスペースを設置した。企業と協働で計画をされた「サステナブルえびせんべい」や発表会・報告会で使用したポスターの展示、各種実践活動のフォト動画やメタバースの展示を行った。活動報告や特別講演などと違い、緩やかな環境での交流の場を作ることで、より深い交流や今後の実践活動の改善につながるアドバイスをいただくことができた。生徒にとっては、外部の方からの質問に対する応答を繰り返すことによりコミュニケーションの大切さを痛感した様子だ。過去の実践報告会でもこうした交流の場を設置してきたが、このような場の方がより本音が出やすい可能性があるのではないかと感じる。発表に際して、心の中で溜まった疑問がこうした場で溢れ出てくるのだろう。本会議においてこの場面は、休憩時間である。今後の活動報告会においては、休憩という名称でなく、違う名称でスケジュールを立てても良いと思う程、有意義な時間が流れていた。そして、こうした空間を作ることができるのは、新しい時代を生きている生徒や若手の先生の新しい発想力が成し得ると感じる。

(4) 特別講演

特別講演と題してSTATION Ai株式会社から代表取締役社長兼CEO 佐橋宏隆氏をお招きした。STATION Aiとは、令和6年10月に名古屋市鶴舞公園南側に開業予定の国内最大のインキュベーション施設である。スタートアップの創出・育成やオープンイノベーションを促進するために、国内外のスタートアップ支援機関・大学との連携等を通じて、様々な支援サービスを提供する予定になっている。この地域の優秀なスタートアップを創出育成し、海外展開を促すとともに、世界から有力なスタートアップを呼び込むことで優秀な人材を集める。そして、スタートアップと地域のモノづくり企業等の交流を図ることにより、新たな総合的な拠点となることを目指している。この事業は、愛知県が策定している「Aichi-Startup戦略」の一環として、STATION Aiの整備・運営事業をSTATION Ai株式会社が受諾している。現在は、WeWorkグローバルゲート

名古屋内の「PRE-STATION Ai」において、スタートアップ支援プログラムの提供や各種勉強会・ミートアップイベント等を開催している。

(参考：STATION Ai HP <https://stationai.co.jp>)



〔発表者〕

STATION Ai株式会社

代表取締役社長 兼 CEO 佐橋宏隆 氏

〔テーマ〕

スタートアップエコシステムがつくる愛知の未来

〔内容〕

「起業家とは」という問いから始まった講演は、世界の国々のデータと比較・分析した知見や日本におけるスタートアップの高まった機運から現在の日本でのスタートアップの必要性や可能性へと話が飛躍した。そして、日本政府や愛知県が掲げるスタートアップ環境の変革を促す計画から日本最大のスタートアップ支援拠点のSTATION Aiの概要の説明を行った。STATION Aiの数々のプログラムを紹介する中で、「起業のリスク」について言及し、現在の起業環境の容易さや人材の評価基準が学歴や職歴でなく、新規事業やイノベーションを起こすことができる人材へ移っていることを示した。最後に、「起業できる力を身に付けていないことがリスクとなる時代」と明言し、失敗を恐れず行動し、自分の道を切り拓き、愛知から世界をステージに挑戦をする若者になって欲しいという熱いメッセージで締めくくった。



(5) 講評

管理機関である名古屋商科大学商学部 教授 亀倉正彦 氏よりConnectEd 2023の講評をいただいた。ALネットワーク内における名古屋国際中学校と他の連携校、産学官民の多様な連携によって生み出された実践報告は、今後の新しい未来への一歩となる。名古屋商科大学としても地域の発展、国の発展、未来ある若者の大きな成長に協力をしていきたいと語った。



(6) 来校者及びオンライン視聴者のアンケート内容

●令和4年度全国高校生フォーラム〈高校生の事例発表〉

▷オンラインで英語でのディスカッションというだけでも大したものだと思います。今後の展開について考えている事があればお聞きできると良かったです。

▷発表の内容はもちろん、フロアとの質疑応答に堂々と（時に英語で）答えていらっしゃって、敬服しました。

●令和4年度WWL高校生国際会議〈高校生が考えた提言〉

▷学んだ事を吸収し、未来志向で考えているところが素晴らしいと思います。

▷ボーダレスという言葉が入っている提言、もっと飛び出て広がってほしいくらい素晴らしいと思いました。質疑応答で、自然と日英語が混じり飛び交う様子が、グローバル人材の可能性を感じ、もっとこういう場が広がってほしいと思いました。

●国際理解研修の再開〈カンボジア・ベトナムコース〉

▷アフターコロナでの貴重な経験と感じます。やはり現地でしか感じるできない

こともたくさんあると思います。

▷医療等、常に進化するものに対しては先進国から先進技術を学ぶという発想でしたが、あえて後進国の状況に触れるという点は新たな観点で新鮮でした。

●企業協働活動〈「WWL特論」×シャープ株式会社〉

▷企業と一緒に取り組む学習は実社会を知る貴重な機会になると思いますし、逆に企業側もZ世代と言われる高校生の皆さんの考え方を知る機会になる素晴らしい取り組みだと思いました。

▷高校生の考えを企業にぶつけるからには、学生の皆さんの真剣みも増すでしょうし、先生方もチームを組み採用案を選択するなど生徒先生が一体となったお取り組みと感服いたしました。

●仮想空間（メタバース）の活用〈Business Design Club〉

▷実際に計測までして空間を自分たちで作り出している事に驚きました。メタバースを使ってどんな事が出来るのか、今後の活用に期待をしています。

▷後の可能性も含めてとてもワクワクする内容だった。「まずやってみる」という姿勢を持って新しいことに先導を切って進んでいる様子に勇気づけられた。

●企業・NPO法人・自治体とのパートナーシップ〈SDGs未来倶楽部 Sus-Teen!〉

▷実際に様々な活動をされていて、関心をさせられることばかりでした。発表者の生徒さんに熱意があり、活動からたくさんの学びがあることを感じました。マルシェなど、活動場所にお邪魔したいと感じました。

▷幅広い組織とのコラボレーションを生み出していて、いつも本当に素晴らしいと思います。

●特別講演

▷今後、就職をしていく若者たちにとって、起業家が大きな選択肢になるように社会が動いていることを実感しました。

▷愛知という地域が将来どのような地域となっていくのか思いを巡らせるきっかけとなりました。また、STATION Aiという人々が挑戦しやすい土壤が整えられていることを知り、その土壤を生かす「人」がますます重要になると感じました。私自身、「誰とやるのか」ということを大切にしながら新たに挑戦していきたいと思います。

●「ConnectEd 2023」全体の内容

▷生徒の英語力にまずは驚きました。また、内容も先進的なものばかりで、勉強不足を痛感した、非常に有意義な時間となりました。

▷現在のメタバースやスタートアップの活動は、日本が「失われた30年」の状況から脱することを考えた上では、根本の原因を踏まえていて、的を得た取り組みになっていると感じました。しかし、日本を欧米と比較して経済成長の伸び悩みだけを問題視し、その点で優れている欧米を模倣するやり方では、もったいないように感じます。ぜひ今の活動の中に、日本という国や各地域の特性をもっと生かし、欧米社会が

「普遍」と捉えられがちな状況を捉え直すような取り組みを行ってほしいなと思います。また、“Borderless”と聞き、京都国際写真祭というものを思い出しました。毎年行われる写真祭なのですが、今年のテーマが“Border”です。そこで、今のキーワードは“Border”なのではないかと気づきました。それは、分断の時代という意味でも言えますし、パンデミックやメタバースによる空間的・地理学的な意味でも言えると思います。

▷貴重な機会をありがとうございました。今回最も印象に残っているのは、生徒も先生も関係なく、共に悩み、共に楽しみながら取り組まれている姿です。この姿が教育において最も大切な根幹なのではないかと、改めて思わされました。先生が、何よりも楽しんで面白がっている姿は、生徒が一番やる気になる要因だと思います。今回参加し、生徒と先生のこの循環性が名古屋国際の、他にはない魅力や持続可能性を形成し、またこれからさらに発展させていく種になるのではないかと強く感じました。私自身、今と過去と未来を結びつけながら、より良い教育の形を追求されている姿に大いに励まされました！

▷一連の発表を聞き、「地域の課題」や「地球規模の課題」に取り組む際、いかに地域の生の現状を目の当たりにしていくかが重要になるのではないかと感じました。ローカルとグローバルのどちらに向き合う際にも、その場所その場所の小さきところに目を向けていくことが大事だと思われ、私にとって大切な気づきとなりました。今後さらに、名古屋・愛知・さまざまな地域において名国生の、その小さきところへの眼差しが見られることが楽しみです。また、学校内外問わず様々な人の小さな眼差しが、名古屋国際を拠点に織りなされていく未来を想像し、さらに面白いことが起きていくような予感を感じました。

(7) ConnectEd 生徒のリフレクション

2/4に開催されたConnectedは非常に興味深い会であった。学校の教育方針、今年度の活動及びスタートアップの重要性について知ることができた。

今年度から始まったWWLは近年飛躍的に技術が発達したビデオ会議システム(Zoom)や仮想空間(メタバース)、それに加え学校のコネクションの広さ故に実現できたと思う。まず、学校設定科目WWL特論で大学の教授を招き教養がたくさん詰まった講義を受講した。他にもフランスの姉妹校と交流が行われた。この交流のおかげで私はフランス人の友達ができた。今でも連絡を取り合っている。

活動報告で私はメタバースで開催された高校生国際会議の発表を頼まれた。元々資料を作り人の前に立ちプレゼンするのは苦手な方だったが、高大一貫クラスに所属していたこともあって、この一年でそれを克服することができた。質問がきても自分なりに臨機応変に対応することができたと思う。

最後の特別講演では起業家精神に並びスタートアップの重要性を学んだ。これから先

5年、10年でみたとき、日本はユニコーン（10億ドル以上の企業価値があるベンチャー企業）を増やす必要があることを知った。また日本の既存の価値観を変えていく必要がある。日本では、高校を卒業後、大学へ進学しとりあえず就職することが当たり前となっている。しかし欧米では大学在学中及び卒業後は起業をして成功するという考え方が主流らしい。ConnectEdで学んだことは極めてためになることばかりだ。私は名古屋国際を卒業してNUCBへ進学する。高校で培ったフロンティア精神を大学でも大いに発揮したいと考えている。そしてこのフロンティア精神を活かして、後々スタートアップにも挑戦してみたい。

名古屋国際中学校・高等学校 高校3年生
森 藏人

今回このイベントに参加し、プレゼンを行ってみて参加者の方から様々な質問や意見をいただいた。例えば、私たちがアップサイクル事業を提案した際に、「アップサイクルをした後に使い終わった製品はどうするのかをさらに考えてみると良い。」という意見である。このような考えは以前の私たちにはなかったもので、新たな視点で自分たちの考えを見つめ直す良い機会になり、さらに自分たちで考えを深めていこうと思いました。参加して本当に良かったと思います。

名古屋国際中学校・高等学校 高校2年生
齊藤 晴太郎

全国高校生フォーラムの内容や成果を、しっかりとリハーサル通りに聴衆の皆さんに伝えることが出来たので良かったです。チーム内でそれぞれ説明する内容を分担し、スライドを示しながら分かりやすく発表することができました。発表についての質疑応答では、ネイティブの先生から質問を受けましたが、即座に考えて回答することができました。今回の全国高校生フォーラムに参加していない人にも、今回の大会の内容や僕たちの発表の成果を知ってもらうことができたと思います。

名古屋国際中学校・高等学校 高校2年生
松本 哩空

【11】運営指導委員会・検証委員会

第1回ALネットワーク運営委員会議事録

日時：令和4年6月6日（月）11時20分～12時20分

方法：オンライン・対面同時会議

場所：オンライン（ビデオ会議システム（Zoom））

対面 名古屋国際中学校・高等学校 3階 理事室

出席者：

〈管理機関〉

亀倉正彦 教授（名古屋商科大学商学部）

〈運営委員〉

北村友人 教授（東京大学大学院教育学研究科）

伊藤 博 教授（名古屋商科大学大学院マネジメント研究科）

〈名古屋国際中学校・高等学校〉

小林 格（校長）、栗本貴行（中高担当部長）、大西直子（普通科 教頭）、
片山寿弘（経営企画部長）、木本 健太郎様（カリキュラムアドバイザー）、
黒宮祥男（国際教育推進部主任）、伊藤 恵（国際教育推進部）、
奥村仁崇（国際教育推進部）、Christopher M Yap（国際教育推進部）、
内藤圭祐（入試広報部長）、渡邊えみ（DP Coordinator）、

Laura L Abri Abril（MYP Coordinator Designate）、鈴木真以・宮尾国之（事務局）

〈オブザーバー〉

柏原健人・郷地 順・村野廣太（ISA グローバル探究チーム）、
伊藤春香（ISA東海支社 国際教育アドバイザー）

議事の経過及び結果

11時20分、小林校長が議長となり開会する旨を宣言した。議事内容は次のとおりである。
議事内容：

（1）報告事項

・黒宮 国際教育推進部主任より令和4年度事業計画について、これまで積み上げてきたグローバル型事業の研究課題を発展させるものとして、以下の項目の説明を含めたWWL事業実施計画の報告があった。（配布資料：事業実施計画書、令和4年5月17日文部科学省に提出）

- 1 ALネットワークの構築
- 2 先進的なカリキュラム研究開発・実施
- 3 Meta-Schoolにおける高校生国際会議およびWWL対話セッションの実施
- 4 国際バカロレアにATLに基づく生徒自己評価とアンケート実施による評価

手法の検証

- 5 カリキュラムを研究開発する人材の指定及び配置
- 6 高大連携によるカリキュラム開発
- 7 カリキュラム開発における財政支援

報告を踏まえ、特に①文理融合②海外研修③国際会議④高大連携について指導を求めた。

・上記2に関して、内藤より学校設定科目として開講しているWWL特論についての説明があり、良い評価の方法の開発の指導を求めた。

・上記4に関して、国際バカロレアにALTに基づく自己評価について、渡邊、Abrilより現在の実施状況の報告があった。

(2) 審議

事業実施計画について、質疑応答の形で伊藤博教授、木本様からの質問を受け、各担当者が回答した。

〈質疑応答〉

伊藤博教授：文理融合のイメージはどのようなものか。文系の大学でメタバースの構築を進めているケースもあり、文理融合と捉えられるが。

黒宮教諭：一つの教科の中で文系と理系の内容を取り入れるものと、文理複数の教科で連携した活動をするものの2パターンがあると思われる。

奥村教諭：メタバースに関しては、これからプラットフォームの構築を始めるところである。

木本カリキュラムアドバイザー：ALネットワークについて、今後も連携していきたい外部連携先は具体的にはどこか。

黒宮教諭：これまでの連携先とは、ピンポイント的な関わりであった。通年で連携していける形も求めたい。

(3) 指導内容

亀倉正彦教授：

- ・カリキュラムの開発に当たっては、他校との連携を通して進めるべきである。
- ・一度だけの連携は、「ポイント」というよりは「スポット」であり、連携にはならない。関係機関とのネットワークの構築には、継続的な「対話」でお互いのニーズを摺り寄せ、仕組みの中にその機会を組み込む必要がある。
- ・メタバースの目的・内容が不明瞭なので、メタバースの活用のわかりやすいストーリー展開の構築が必要である。

伊藤博教授：まだまだわからないことが多いと思うが、共同で学びながら進めていきたい。

木本カリキュラムアドバイザー：

- ・国際バカロレアは、議論を進めている日本型カリキュラムの課題との相性が良いと考える。その特性を生かしつつ日本型との融合をどう図るかが重要である。
- ・外部連携については、目的を明確にして体系立ったカリキュラムを開発し、その中で目的によって外部を入れるべきである。そこにもメタバースの活用の可能性があると考えている。

北村友人教授：

・カリキュラム開発にあたっては、目的の明確化と生徒の主体性が重要だと考える。目的の実現のためのカリキュラムであり、文理融合やメタバースはその手段となりうる。メタバース作成にも生徒には主体的に関わってほしい。

・高大連携は「高校での学び」と「大学での学び」の連続性を、一緒に話し合いながら作っていくことが必要で、それ自体が連携となりうる。

・自己評価について、生徒の主体性の意味からも「振り返り」は良い方法である。やはり国際バカロレアと日本型との融合を目指すべきである。

以上をもって本日の議事を終了した旨を議長が述べ、12時20分、閉会を宣言した。

第2回ALネットワーク運営委員会／検証委員会議事録

日時：令和5年3月24日（金）12時00分～13時00分

方法：オンライン・対面同時会議

場所：オンライン（ビデオ会議システム（Zoom））

対面 名古屋国際中学校・高等学校 3階 理事室

出席者：

〈管理機関〉

亀倉正彦 教授（名古屋商科大学商学部）

〈運営委員〉

北村友人 教授（東京大学大学院教育学研究科）

伊藤 博 教授（名古屋商科大学大学院マネジメント研究科）

〈検証委員〉

鵜飼宏成 教授（名古屋市立大学学長補佐・大学院経済学研究科）

光永悠彦 准教授（名古屋大学大学院教育発達科学研究科・教育学部）

小野裕二 教授（名古屋商科大学商学部長）

〈名古屋国際中学校・高等学校〉

小林 格（校長）、栗本貴行（中高担当部長）、片山寿弘（経営企画部長）、

大西直子（普通科教頭）、鈴木 悟（国際教養科教頭）、

木本 健太郎様（カリキュラムアドバイザー）、黒宮祥男（国際教育推進部主任）、

伊藤 恵（国際教育推進部）、奥村仁崇（国際教育推進部）、内藤圭祐（入試広報部長）、渡邊えみ（DP Coordinator）、宮尾国之（事務局）

議事の経過及び結果

鈴木 悟教頭が議長となり、12時に開会する旨を宣言した。

管理機関である亀倉正彦教授の挨拶及び小林格校長の挨拶に続いて議事に入った。議事内容は次のとおりである。

議事内容：

(1) 2022年度事業実践の報告

黒宮教諭国際教育推進部主任より2022年度事業について、次の項目を中心に報告があった。

・事業連携校との実践：WWL高校生国際会議、ConnectEd2023、国際理解研修等を通じて、奈良県立奈良国際高等学校、名古屋市立名東高等学校、高知県立高知国際高等学校、京都市立西京高等学校との連携活動を行った。

・メタバース空間の構築：メタバース空間を構築し、国際理解研修、WWL高校生国際会議、ConnectEd2023において活用を進めた。

・スタートアップと関係した実践活動：WWL高校生国際会議、ConnectEd2023、生徒セミナー等を通じて、スタートアップとの交流を深めた。

・海外研修の実施：オンラインでの海外研修の手法を利用し、現地でのフィールドワークの様子を事業連携校を含め日本へ配信した。

・令和4年度WWL高校生国際会議の開催：メタバース空間を利用して、連携校と連携事業者の参加の下、基調講演、英語によるポスターセッション、7W1Hの手法によるVRカンファレンスが行われた。

・ConnectEd2023（WWLコンソーシアム構築支援事業成果報告会）の開催：前年までの「対話セッション」の名称を変更し、より社会とつながりを意識した「ConnectEd」として、メタバース空間を利用して、本事業の報告会を行った。

・カリキュラムの研究開発：カリキュラム委員会を設置し、カリキュラムアドバイザーの指導の下、年間を通して議論を進めた。

カリキュラムの開発については、木本様が、カリキュラムの体系化と可視化を重要視していることを補足した。

・先進的な技術やスキルを学ぶための外部講師による研修の実施：「データサイエンスと教育」をテーマに3回にわたり教員の研修を行っている。

・生徒セミナーの実施：生徒を対象に、スタートアップ企業によるセミナーを行った。

・ALネットワークや外部との協働による実践活動事例：アップサイクル推進のイベントにおいて、日進市と名古屋商科大学、本校生徒とがともに実践発表を行った。

(2) 検証委員による評価・助言

鶴飼宏成教授：

・事業の計画と今回の報告との対応関係がわかりにくい。計画の達成度や未達成の原因などがあるとよい。

・カリキュラムマップなどの学校側からの視点だけでなく、生徒側の学びの自覚を促す視点が必要となってくると考える。

光永悠彦准教授：

・計画と報告の対照をわかりやすくすべきである。

- ・ 5つの能力の育成の成果を外部に対して明確にできる方法が必要である。
- ・ たとえば英語の能力など、定量的に検証可能なものを適宜取り入れていくとよい。

小野裕二教授：

- ・ 文理融合やDX、スタートアップなどに先進的に取り組んでいて素晴らしいと思う。
- ・ まずは計画通りに実施されているかが重要であるが、さらに計画を超えた成果があれば、それを盛り込んだ報告ができるとよい。

(3) 運営委員による評価・助言

北村友人教授：

- ・ 多くの組織を巻き込んで実践できたことは、率直に素晴らしいと思う。
- ・ 計画と実施してきたことの対比や達成度の明確化は必要である。
- ・ 取り組みの自走化を見据えておくべきである。
- ・ 構想に「ナゴヤ」とあるので、名古屋地区の特性を明示化できるものにできるとよい。

伊藤 博教授：

- ・ メタバースの業界自体が過渡期であるが、メタバースの持つポジティブな面は活用すべきである。
- ・ 「ConnectEd」の概念を取り入れたことは先見性もありよいと思う。
- ・ 教育の可視化につながるカリキュラムマップの作成に協力できることがあると思う。

最後に、亀倉教授から「皆様の意見が次への発展につながるために活用されることを期待する」旨の発言があり、13時00分に議長が閉会を宣言した。

【12】カリキュラム委員会

第1回WWLカリキュラム開発会議議事録

日時：6月24日（金）11時25分～12時10分

場所・方法：オンライン（ビデオ会議システム（Zoom））

出席者：木本 健太郎様（カリキュラムアドバイザー）

〈ISA グローバル探究チーム〉

柏原健人様、郷地 順様、村野廣太様

〈ISA東海支社 国際教育アドバイザー〉

吉澤由華様、伊藤春香様

〈名古屋国際中学校・高等学校〉

小林 格（校長）、鈴木 悟（教頭）、片山寿弘（経営企画部長）、

黒宮祥男（国際教育推進部主任）

議事の経過及び結果

鈴木教頭が議長となり、11時25分、開会する旨を宣言した。議事内容は次のとおりである。

議事内容：

1 カリキュラムの作成について

はじめに黒宮国際教育推進部主任がカリキュラムマップと教育課程表の説明をし、その後、木本様からカリキュラム作成にあたっての取りかかりについて、「他校との共有を図るためには、使用する言葉の明確化を高めるべきであり、そのためには上位の概念の言語化や抽象的な言葉の具体化を進めるのがよい」と、また柏原様から「作成することがゴールではなく、浸透させることがゴールである。授業ごとに具体的に作っていくとよい」とのアドバイスがあった。

2 新しいグローバルカリキュラムのモデルについて

黒宮教諭が「連携校がプログラムを共有できるようにすることが使命であると考えているが、汎用性を持たせつつ、名古屋国際らしいIBのカリキュラムを混ぜ込んだ『日本モデル』を作りたい」との意見を述べた。

それに対して木本様が次のように解説した。

・日本型の知識重点教育が必ずしも悪いわけではなく、IB型だけでは知識のない生徒に対して成果が期待できない。

・教科によって日本型とIB型の比率を変えるとよい。

・アジアに向いているカリキュラムは必ずあるはずである。

・SDGsのように数字を決めると進めやすい。

・新しいモデルのネーミングも重要である。

・抽象的なビジョンから進めることと、具体的なことを決めることを同時に進めるとよい。

3 学校間の連携について

黒宮教諭が「本当の意味での学校間の連携とはどのようなものか」と質問し、木本様から「実際はほとんどがディスカッション等で終わっている。企業連携の好事例をヒントにしたいので調べてみる」との回答があった。

4 会議資料の共有について

会議資料の共有に関して次のような発言があった。

- ・会議の事前に資料を共有する。(黒宮教諭)
- ・現在のファイルを共有して、各々書き込んでいただいてはどうか。(片山経営企画部長)
- ・本校が提出した構想調書を共有する。(小林校長)

次回開催：およそ1ヶ月後の金曜日同時刻で調整する。

以上をもって本日の議事を終了した旨を議長が述べ、12時10分、閉会を宣言した。

第2回WWLカリキュラム開発会議議事録

日時：7月22日(金) 11時25分～12時10分

場所・方法：オンライン(ビデオ会議システム(Zoom))

出席者：木本 健太郎様(カリキュラムアドバイザー)

〈ISA グローバル探究チーム〉

柏原健人様、郷地 順様

〈ISA東海支社 国際教育アドバイザー〉

吉澤由華様、伊藤春香様

〈名古屋国際中学校・高等学校〉

小林 格(校長)、栗本貴行(中高担当部長)、片山寿弘(経営企画部長)、

鈴木 悟(教頭)、黒宮祥男(国際教育推進部主任)、宮尾国之(事務局)

議事の経過及び結果

11時25分、鈴木教頭が議長となり開会する旨を宣言した。議事内容は次のとおりである。

議事内容：

1 海外研修オンラインへの他校の参加について

黒宮国際教育推進部主任が、海外研修オンラインへの他校の参加と連携に関して、他校との連携、ALネットワークの活用方法、ALネットワークに所属するメリットなどについて意見を求めた。

[木本 健太郎カリキュラムアドバイザー]

- ・従来のディスカッション等に参加するだけでは「連携」にはならないので、他校と「一緒に」プロジェクトを進められると連携度が増してくる。
- ・Slackなどはオフラインで意見のやり取りができ、場所・時間を超えるツールとして有用である。
- ・プロジェクトを進められない理由として、「ツールの使い方がわからない」「システムが

違う」ということがある。システムの環境を整えて「共通の」デザインができれば、ネットワークを築き易くなり、そのことがメリットとなり得る。

・多校になると、いろいろな意見が出てくるということもメリットである。また、各校で分担が進み、先生がファシリテーター役のみで済むようになれば、それぞれの負担が軽減されることになる。

・どの学校も余裕がないのは事実である。まずは、何かを「一緒に」始めることが重要であり、お互いに協力しながら、補い合いながら広げていくべきである。

[柏原健人]

「連携」といっても携わり方はいろいろあってよい。「共有」から「交流」、最終的には「協働」へといったレベル分けをすることで、「連携」がより容易にイメージできると思う。

2 高校生国際会議について

黒宮教諭が、高校生国際会議の現状として、「英語」の縛りがあることで参加が敬遠されていたり、内容に厚みを持たせられない、といった問題があることについて意見を求めた。

[木本 健太郎カリキュラムアドバイザー]

・プレゼン以外のところでは英語力にこだわらない、ということになれば、全体の参加者が増えて理系の生徒もより多く取り込めるかもしれない。

・オンラインでの会議参加や、役割分担で質を高める作業は、社会に出てからも役立つスキルである。

[栗本貴行 中高担当部長]

・国レベルの国際会議でも役割分担しているので、グループ内では日本語で問題ない。

・「英語力」以外に、「チーム力」で中身のレベルを上げることも求めるべきである。

3 日本型モデルのカリキュラムや用語の選定及びモデルの作成について

黒宮教諭が日本型モデルのカリキュラム作成に関して、次のような意見を述べた。

・カリキュラムマップを作成する上で、使用する言葉の具体化、明確化が必要となってくるが、オンライン会議では深みを増すことができない。まずは夏休み中にカリキュラムの構想図を作成したい。

・現状は、主任がモデルの叩き台を作って議論しているが、全員がゼロベースでの構想を各自で考え、擦り合わせや議論をした方が各自の主体性や責任感が増すと思われる。

・SGHからグローバル型、WWLに至る過程や、なぜWWLに至ることができたかを全職員が理解していないので、その研修のやり方を議論するべきである。

以上をもって本日の議事を終了した旨を議長が述べ、12時10分、閉会を宣言した。

第3回WWLカリキュラム開発会議議事録

日時：9月2日（金）11時25分～12時10分

場所・方法：オンライン（ビデオ会議システム（Zoom））

出席者：木本 健太郎様（カリキュラムアドバイザー）

〈ISA グローバル探究チーム〉

柏原健人様、郷地 順様、村野廣太様

〈ISA東海支社 国際教育アドバイザー〉

吉澤由華様、伊藤春香様

〈名古屋国際中学校・高等学校〉

小林 格（校長）、栗本貴行（中高担当部長）、鈴木 悟（教頭）、

黒宮祥男（国際教育推進部主任）、宮尾国之（事務局）

議事の経過及び結果

鈴木教頭が議長となり、11時25分、開会する旨を宣言した。議事内容は次のとおりである。

議事内容：

1 日本型グローバルカリキュラム（仮称）の方向性について

はじめに黒宮国際教育推進部主任から、日本型グローバルカリキュラム（仮称）について説明があり、意見を求めた。

（1）〈学習の5つの形〉について

学習の5つの形ABCDEについて、木本様が次のように解説を加え意見を述べた。

- ・必ずしもAやBが低学年、CやDが高学年向けというわけではない。
- ・日本の学校ではA、Bが中心で底上げ型となっている。例えばアメリカでは、授業を対面で行うメリットをC、Dに活かしており、A、Bは個人でやるものと割り切って、できない子供には家庭教師などで対処している。
- ・どのような生徒を作りたいかで、AからEのバランスが変わってくる。
- ・C、Dの割合を増やすためには、教科の内容の細分化とAからEの振り分けの作業と並んで、学校の役割、教員や生徒の意識の変革が求められる。そのためのC、D、Eに向かうための教員の研修が必要となる。
- ・評価については、特にC、Dの評価方法を明確にする必要があるので、実際に教員研修を行っている柏原様、村野様が事例紹介等協力できる。
- ・Eは別格になるので、高い能力や強い動機がある生徒に求めるべきだと考える。

（2）名称について

カリキュラムの名称について栗本貴行 中高担当部長から、「グローバル」を入れると「世界に広まっている」「標準となる」のニュアンスで捉えられるのではないかと、との意見が出され、引き続き検討することとなった。

2 用語の定義の確定について

議長が、WWLにおいて習得を目指す能力に関わる用語について、定義の確定方法の確認を求めたのに対し、木本様が「用語の具体化や明確化を進めることで、各学校、教科ごとに結びつくものが見えてくるので、それらを結びつける作業を教科レベルまで進めてい

く」旨述べた。さらに科学的思考能力とは何かとの質問には、「論理的思考力、仮設定力、データ分析力などがある」と回答した。

以上をもって本日の議事を終了した旨を議長が述べ、12時10分、閉会を宣言した。

第4回WWLカリキュラム開発会議議事録

日時：10月28日（金）11時25分～12時10分

場所・方法：オンライン（ビデオ会議システム（Zoom））

出席者：木本 健太郎様（カリキュラムアドバイザー）

〈ISA グローバル探究チーム〉

柏原健人様、郷地 順様、村野廣太様

〈ISA東海支社 国際教育アドバイザー〉

吉澤由華様、伊藤春香様

〈名古屋国際中学校・高等学校〉

栗本貴行（中高担当部長）、片山寿弘（経営企画部長）、鈴木 悟（教頭）、

黒宮祥男（国際教育推進部主任）、宮尾国之（事務局）

議事の経過及び結果

鈴木教頭が議長となり、11時25分、開会する旨を宣言した。

議事内容：

1 新しい形のカリキュラム創出について

黒宮国際教育推進部主任が、「基礎学力の定着（日本式）ができる探究学習（欧米式）」について質問をし、それに対する回答がなされた。内容は次のとおりである。

（黒宮教諭） ・基礎学力がないと探究学習はできないのか？

・完全な日本式で学んでいてもイノベーターやグローバルリーダーは存在する。その違いは何か？

（木本 健太郎） ・探究学習を進めながら基礎学力を上げていくのが理想的である。

・基礎学力のレベルが低いと探究学習の成果が高まりにくい。

・基礎学力に応じた指導が必要である。

・「主体的な」学びをしてきた人は「深く考える」ことが身につけており、それが創造性に影響する。

（柏原健人） ・通常のテストでは知識のみの評価しかできず、学力は計れないと考える。「身につけさせたい力」の評価が重要である。

・学校の役割は、「きっかけ」と「環境」を与えることと、スイッチを入れた後のサポートをすることと考える。

（村野廣太） ・基礎学力がある子供は、効率のよい頭の使い方ができる子供が多く、基礎ができている上で探究学習の意欲が高い子供は、その成果が高まる印象がある

- ・モチベーションが上がるきっかけとの出会いや、社会とのつながりがなかったことなどが、独創的な思考につながっている可能性もある。
- (郷地 順)
- ・通常のテストでは記憶力に頼ってしまい、定着につながらない。
 - ・探究学習によって本質を見る目が養われ、ゆっくり学力がついてくる。
 - ・探究力のレベルは基礎学力に相応したものになる。

2 SHARPとの協働学習

木本様からWWL特論におけるSHARPとの共同学習（経済産業省のSTEAMライブラリーを活用）について経緯の説明があった。

3 カリキュラムマネジメント研修について

鈴木教頭が、自身が参加したカリキュラムマネジメント研修のうちの単元配置表に関して、教科と教科の結びつけ方についての意見を求めたのに対し、柏原様から「学校全体でテーマを設定して、それに関連することを各教科で学習する」、木本様から「総合の探究学習を軸に各教科を結びつけてはどうか」との意見があった。

以上をもって本日の議事を終了した旨を議長が述べ、12時10分、閉会を宣言した。

第5回WWLカリキュラム開発会議議事録

日時：11月25日（金）11時25分～12時10分

場所・方法：オンライン（ビデオ会議システム（Zoom））

出席者：木本 健太郎様（カリキュラムアドバイザー）

〈ISA東海支社 国際教育アドバイザー〉

吉澤由華様、伊藤春香様

〈名古屋国際中学校・高等学校〉

栗本貴行（中高担当部長）、小林 格（校長）、片山寿弘（経営企画部長）、

鈴木 悟（教頭）、黒宮祥男（国際教育推進部主任）、宮尾国之（事務局）

議事の経過及び結果

鈴木教頭が議長となり、11時25分、開会する旨を宣言した。

議事内容：

1 新しい形のカリキュラム創出について

黒宮国際教育推進部主任が、新しい形のカリキュラムのヒントとして、中学生が普通科に求めているものや独自性のある普通科について、木本様に意見を求めたのに対し次のような発言があった。

- ・普通科は上級学校への進学が目的である。
- ・普通科校に専門科やコース（科学、美術、スポーツ、看護など）などの専門性があると、学力が低くても探究学習を設定しやすい。
- ・やりたいことが決まっていない中学生が普通科を受けることが多く、やりたいことを見つけていく手助けをする。

- ・専門学科は変更が難しく、中学校において進路指導で勧めにくい一方、普通科内でのコース分けでは変更しやすい。
- ・「総合」以外の教科での「日本式か探究か」について生徒や保護者のニーズは分かれている。
- ・学力のレベルにあった指導が必要であり、学力が高い生徒には別のコースなど（例：西大和高校、奈良）を設け、低い生徒のボトムアップには塾と提携など（放課後教室など）で対応している例がある。

2 WWL特論Ⅰの特別授業について

黒宮教諭が本本様に、「WWL特論Ⅰ」の特別授業において外部講師による授業を実践した感想や助言を求め、次のような発言があった。

- ・全体的にアイデアがまだ浅い。
- ・アイデアが、SHARPの歴史など学んだことと結びついていない。
- ・普段から意識しておくことが必要であるが、今回はアンテナを張っておく期間が短かったので仕方がない部分もある。
- ・問題意識や当事者意識を持つことが能動の姿勢へとつながる。

以上をもって本日の議事を終了した旨を議長が述べ、12時10分、閉会を宣言した。

第6回WWLカリキュラム開発会議議事録

日時：12月16日（金）11時25分～12時10分

場所・方法：オンライン（ビデオ会議システム（Zoom））

出席者：木本 健太郎様（カリキュラムアドバイザー）

〈ISA グローバル探究チーム〉

柏原健人様、郷地 順様

〈ISA東海支社 国際教育アドバイザー〉

吉澤由華様、伊藤春香様

〈名古屋国際中学校・高等学校〉

栗本貴行（中高担当部長）、小林 格（校長）、鈴木 悟（教頭）、

黒宮祥男（国際教育推進部主任）、宮尾国之（事務局）

議事の経過及び結果

鈴木教頭が議長となり、11時25分、開会する旨を宣言した。

議事内容：

1 「やりたいことを見つけてくれる普通科」について

黒宮国際教育推進部主任が、「やりたいことを見つける」につながる学校での経験談を求めたのに対し、柏原様からは「本物との出会いに生徒が刺激を受けていると感じるので、その機会を増やすとよい」「先輩である卒業生とのつながりは自分ごとになりやすいこともあり、上下の繋がりや流れが大切である」と、また郷地様からは「体験学習を修学旅行に組み込んだり、大学の研究室の体験会を催したりした」との発言があった。

次に、黒宮教諭が木本様に意見を求め、木本様は「やりたいことにつながるようなテーマを明確にするのが難しく、テーマ設定に1年間かける学校もある。テーマや課題の設定や、探究を深めるためのキーワード探しを手伝えるようにしたい」と述べた。さらに黒宮教諭の「学校設定科目だけで学校全体としての特色を打ち出すのは難しい」という意見に対して、木本様が「他の教科とのつながりを明確にした、システム思考を持たせるようなカリキュラムが作成できるとよい」との意見を出した。

2 高校生国際会議について

黒宮教諭が、12月27日に開催予定である高校生国際会議におけるVRカンファレンスのテーマが「高校生が「Society 5.0における未来の学校」に向けてできること」であることについて、木本様へ意見を求めると、木本様から次のような助言があった。

- ・ Society 5.0 の定義を説明しておく必要がある。
- ・ 提言につなげるためにゴールを示しておくことよい。
- ・ 小項目のテーマに分けると取り掛かりやすい。
- ・ ファシリテーター役をおいてゴールへと導けるようにするとよい。

以上をもって本日の議事を終了した旨を議長が述べ、12時10分、閉会を宣言した。

第7回WWLカリキュラム開発会議議事録

日時：2023年1月27日（金）11時25分～12時10分

場所・方法：オンライン（ビデオ会議システム（Zoom））

出席者：木本 健太郎様（カリキュラムアドバイザー）

〈ISA グローバル探究チーム〉

郷地 順様

〈ISA東海支社 国際教育アドバイザー〉

吉澤由華様、伊藤春香様

〈名古屋国際中学校・高等学校〉

小林 格（校長）、片山寿弘（経営企画部長）、鈴木 悟（教頭）、

黒宮祥男（国際教育推進部主任）、宮尾国之（事務局）

議事の経過及び結果

鈴木教頭が議長となり、11時25分、開会する旨を宣言した。

議事内容：

黒宮国際教育推進部主任が、新しいカリキュラム「ConnectEdカリキュラム（仮）」について説明し、次の項目についてそれぞれ意見を求めた。

1 ConnectEdをテーマにした授業の展開

木本様が「教員全員が1つのチームになれるかが重要である」と述べたのに対して、黒宮教諭が「地道に教員間の対話を増やしていく」と答えた。さらに木本様から、「教員のガバナンスが鍵となるので、教員の研修が必要である。また、教員向けの研修プログラム

が必要になってくる」との意見が出された。

コマ数の割合について、黒宮教諭から「週に3コマあればそのうち1回をConnectEdにしたい」と発言に対し、郷地様が「割合は問題ないが、コマ数で分けなくてもよいのではないか」との意見を出した。

小林校長からの来年度から定期試験が学期ごと各1回に削減されるとの報告を受けて、木本様が「試験範囲が広がるなど不安になると思われるので、定期試験を減らす理由や意図について、生徒・保護者へ説明が必要となる」と述べ、さらに黒宮教諭の「ペーパーテストで学力を測ることから抜け出し、ConnectEdでの評価を増やしたい」との発言に対しては、「テストや授業にConnectEdを広げていくのが理想であるが、教員によって効果の差が広がってしまう恐れがある」との意見を加えた。

2 外国語学習

木本様から「英語に重点を置き過ぎると内容が薄くなりがちである」「日本語で内容を深め、英語でプレゼンをするなどバランスも考える必要がある」「英語のみの授業、講演などイメージを取り入れてもよい」との発言があった。

3 総合

木本様から「生徒の熱意をつくれれば理想的だが大変難しい」「中学では「好きなことを探す」に「社会の問題意識を持つ」を加えれば、高校での「好きなことで社会を変える」につながる」との発言があった。

4 学校設定科目

学校設定科目である「WWL特論」で企業連携を実践していることを受け、木本様が「プロセスが大事なので、プランニングで終わらずに、アクションまで進めないといけない。社会へのアクション、企業とのコンタクトにより生徒のモチベーションが上がるのを期待したい」と述べ、引き続き企業連携を進めていくことを推奨した。

以上をもって本日の議事を終了した旨を議長が述べ、12時10分、閉会を宣言した。

第8回WWLカリキュラム開発会議議事録

日時：2023年2月24日（金）11：25～12：10

場所・方法：オンライン（ビデオ会議システム（Zoom））

出席者：木本 健太郎様（カリキュラムアドバイザー）

〈ISA グローバル探究チーム〉

村野廣太様

〈ISA東海支社 国際教育アドバイザー〉

吉澤由華様、伊藤春香様

〈名古屋国際中学校・高等学校〉

栗本貴行（中高担当部長）、小林 格（校長）、片山寿弘（経営企画部長）、

鈴木 悟（教頭）、黒宮祥男（国際教育推進部主任）、宮尾国之（事務局）

議事の経過及び結果

鈴木教頭が議長となり、11時25分、開会する旨を宣言した。

議事内容：

1 カリキュラムマップの進捗について

黒宮国際教育推進部主任から、「各先生にカリキュラムマップへの2月中の記入を依頼している」との報告があった。

2 事業報告書の作成依頼について

黒宮教諭から、「計画表と分担表を作成し各担当者に報告書の作成を依頼する」との報告があった。

3 次年度に向けたカリキュラム開発会議の方向性について

黒宮教諭が、次年度のカリキュラム開発会議の方向性として、(1)「令和4年度の実施検証」(2)「ALネットワークの活用」(3)「メタバース空間の活用」を目標として挙げ、それぞれについて意見を求めた。

(1)「令和4年度の実施検証」

はじめに木本様が、「新しいカリキュラム開発は抽象的な議論になりがちであるが、抽象で終わらず具体的に実践している点は主張してもよい」「実践することとリフレクション、改善が大事であり、次年度には今年度のリフレクションの議論ができるとよい」「実社会とのコネクトについては、連携により参加してきたWWL特論の授業で展開ができていた」との意見を述べた。

検証に関して黒宮教諭が、「感情の可視化に取り組んでいるOlive株式会社の技術活用による検証を、一部の授業で実施することを検討している」と述べ、「リフレクション」を次年度のテーマの一つにすることを提案した。

これに対し木本様が、「DXを教育に導入することは、「まず実践してみるべき」との点からも推進していくとよい」との意見を加えた。

(2)「ALネットワークの活用」

木本様が、「答えがないテーマについて他校と協働しアイデアを共有できると、各校の特色も出てくることもあり有効である。」と意見を述べた。

(3)「メタバースの活用」

木本様が「メタバースはリアルタイムでこそメリットがある」との意見を出したことにに対し、小林校長から「次年度は海外校ともつなげていく」との発言があった。

また、木本様が「高校生国際会議においてメタバースを使ってみたが、まだまだ問題が多い。問題がわかったこと自体にも意義があるが、さらなる使いやすさが求められる」「技術的な面やメタバース特有のルール等、他校と共有を図れるように細かく運用を詰めていく必要がある」と述べたのに対し、鈴木教頭が「まずは校内で慣れていきつつ改善を進め、外部とのネットワークでの活用に広げていけるようにしたい」と答えた。さらに木本様が「他業種でのメタバースの活用例から学べるものがあると思う」との意見を加えた。

また、外部とのつながりに関して鈴木教頭が「仮想空間での出会いが現実空間での出会いにつながれると、その後の関係も続きやすくなると思う。」との意見を述べた。

続いて村野様が、「活用への意欲を損なわないためにも、ルール設定に関してはあまり制約をつけないほうがよい」「活用を継続することで心構えが成熟していき、メタバース活用のリーダーシップが生まれ、教育活動のリテラシーがついてくる」との意見を述べた。

以上をもって本日の議事を終了した旨を議長が述べ、12時10分、閉会を宣言した。

【13】講評

「ニューノーマル時代の地域創生を加速する高校生グレーター・ナゴヤ・プロジェクト構想」の開始から一年が経過した。その間、名古屋国際中学校・高等学校は限られた字数の中では表現できないほど多くの事業に取り組んできた。すでにSGHや地域協働推進グローバル型事業などで多くの実績がある海外研修や他の高校との交流はもとより、特に仮想空間であるMeta Schoolや社会とのつながりを通じた学びのコンセプト「ConnectEd 2023」を導入したことに注目したい。昨年度、WWL（World Wide Learning）コンソーシアム構築支援事業への応募を聞いた時、メタスクールの実施を考えていると小林校長に言われ、「また大変なことに挑戦しようとしている」と驚愕した。コロナ禍でさらに顕著になったように、オンラインでのコミュニケーションには長所と短所がある。それはメタバースにも当てはまる。例えば、仮想空間でよく使われるアバターは個人の顔が見えにくいといった短所があると同時に、個人情報の保護にもなり、また対面だと（特に外国語の）コミュニケーションに不安がある人も、比較的安心して話せることもある。昨年行われたNTTのXR Space WEB（DOOR）の研修に参加し、高校国際会議の様子も拝見したが、まだ対面によるコミュニケーションの長所の数の方がはるかにメタバースのそれを上回っている印象を受けた。だが、数年後には現在の世界GDPと同じGDPの経済が動くと言われるメタバースの業界自体が、その普及に苦戦している現状である。事実GAFAMの中でも、株価や従業員の削減という点ではメタバースに一番力を入れているメタプラットフォーム（旧・フェイスブック）が一番苦勞している。だが今は世界中の人々が使用しているインターネットでさえ、開発（1969年）から普及までには30年近くかかった。常に新しいものの導入には多大の時間と労力を要する。メタバースを使用した名古屋国際中学校・高等学校のチャレンジはWWLの理念にも沿ったものであり、チャレンジしていること自体が賞賛されるべきであろう。

名古屋商科大学大学院マネジメント研究科
伊藤 博 教授

「高校生グレーター・ナゴヤ・プロジェクト」構築への期待

名古屋国際中学校・高等学校の主導によるWWLコンソーシアム構築支援事業は、を「高校生グレーター・ナゴヤ・プロジェクト」の構築を目指して、着実に成果を上げていると評価したい。この事業では、メタバース空間を活用したWWL高校生国際会議を開催したり、高大連携に加えて民間企業等との連携も通して「文理融合・スタートアップを踏まえた学際的なカリキュラム」を開発したりと、これからの時代に必要とされるグローバルな学びのあり方を確立するための意欲的な取り組みを行っている。その意味で、基本的に事業計画を実現することが見込まれると考えている。

それと同時に、今後のさらなる発展のために、一点だけ期待を込めて検討課題を提示しておきたい。それは、「グレーター・ナゴヤ」として打ち出しているコンセプトの明確化である。いままでのところ、基本的に卓越した取り組みを行ってきたが、「グレーター・ナゴヤ」だからこその取り組みという特色を十分に出し切れているとは言えない面がある。そこで、なぜこうしたコンソーシアムを、名古屋を中心とした東海地方で主導し、それを全国的なネットワーク、さらには国際的な連携へと発展させることが重要であるのか、いまいちど検討することが欠かせないと思う。ただし、それは何か新しいことをするべきというのではなく、これまで積み重ねてきた取り組みのなかに、「グレーター・ナゴヤ」ならではのものがすでに盛り込まれているはずであるから、その特色をより明確な形で提示することが必要であると思う。

ここで提示した検討課題は、本事業の取り組みが不十分であるということを指摘したいのではない。むしろ、これまでに期待以上の成果を上げているからこそ、さらに事業を発展させるうえで必要な作業として、あえて言及したものである。本事業の今後の益々の充実を、心から楽しみにしている。

東京大学大学院教育学研究科
北村友人 教授

【14】次年度に向けて

名古屋国際中学校・高等学校は、令和4年4月から令和4年度WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業（以下、WWL）の指定を受け、2019年度から3年間実践した地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）（以下、地域協働事業（グローバル型））から新しいステージへ進んだ。地域協働事業（グローバル型）は、グローバルリーダーの育成を目指した本校の目標に、地域との協働を加えた新しい実践活動をすることで、新しい学びを創出する取り組みである。しかし、指定2年目よりCOVID-19感染拡大により当初計画した活動の多くを変更せざるを得ない状況になった。そして、人びとの生活様式や働き方、先端技術の進化の動きも大きく変容していった。特にオンラインシステムの広がりによる新しいコミュニケーションや発信の方法の発展、AI・メタバース・チャットボットの先端技術の登場、その結果としてのシンギュラリティへの加速など日々その話題に欠かない。地域協働事業（グローバル型）の3年間はそうした社会の変容期の中で、多様な迷いに満ちた苦難の道を歩んだ。何が正しくて、何が間違っているのか、何をやればいいのか、何をやらなくていいのか、そうした葛藤があらゆる分野に発生し、それぞれがそれぞれの意見や行動をし、一つのゴールに向かうことにさえためらいも生まれる。しかし、そうした社会の変容の中で、地域協働事業（グローバル型）を推進しようと手探りで挑戦し続けた多くの実践活動が、令和4年度から始まったWWLの活動の礎になった。その礎としてWWLにおいて本校が掲げる人材像をこう記した。「自らが出会う新しい時代の価値や課題を読み、新たな技術・スキルを身に付け、協働と革新を持続しながら新しい道を切り拓く人材」。COVID-19感染拡大は誰も予想ができなかった。つまり、将来どのような社会になるかの正確な予想はできない。だからこそ、どのような社会になってもその社会に必要な価値観や課題を見つけなければならない。そして、その課題に対して自ら向き合い、学び、解決をする行動を取れる人材になってほしい。新しい科学技術やスキルを積極的に学び、修得することでより効果的に課題を解決してほしい。人と人との壁を無くし、新しいコミュニケーション、新しいコミュニティを構築し、協力して解決してほしい。このような行動をすることによって課題解決に向けた大きな変革がおき、未知なる社会に新しい道ができる。

令和4年度WWL実践活動は、変革を起こす人材を育成するための基盤づくりと言える。新しいコミュニケーションの方法として仮想空間（メタバース）を構築した。遠隔地との交流において、地域協働事業（グローバル型）ではビデオ通話システム（Zoom）を使用した。WWLでは新たな技術であるメタバースへの挑戦を考えた。そして、生徒と教員が一からその仮想空間を構築し、他校の生徒や外部組織の方々と交流をする計画が始まった。メタバースでどのようなことがわかるかは、やってみないとわからない。誰もやっていない実践をやることに意義があり、その結果を検証することが全国の教育活動の一助になるのではないかと。いろいろな思いが錯綜する中でこうした先の見えない挑戦が始まった。また、長く実施ができていなかった海外研修の開始も挑戦である。過去2年間は、オンラ

インによる海外研修を実施した。このオンライン実施もある意味挑戦であった。オンライン上で現地の調査員を生徒の指示のもと行動してもらうという「リアルなアバター」という要素を計画し実施された。そして、このオンラインでの経験が、本年度の海外研修での挑戦の一助となった。現地からの中継により日本にいる教員や保護者の方にその様子を配信する「海外からの生中継」もその一例だ。また、現地でのPBL (Project Based Learning) も本校生徒だけでなくALネットワークの他校の生徒にも参画をしてもらうなどの工夫をおこなった。こうしたオンラインでの実践活動の継続が、今年度の海外研修の計画実施への後押しになっている。また、企業参画も活発になった。学校設定科目WWL特論においては、年間を通じ企業が参画した授業が展開された。生徒に学びを与えるのは、「学校の先生」という壁を無くし、多方面の方に学校教育に参加してもらい、「学校の先生」となってもらった。

そうした活動は、企業と高校生が協働して未来を語るWWL高校生国際会議と本校の実践活動発表の場としてConnectEd 2023において発表された。WWL高校生国際会議では、実践発表の他に「New Borderless Education」という提言をまとめ上げることができた。その提言は、社会と学校がつながる新しい学びとして「ConnectEd」という用語を作り、来年度推進していくことになった。また、当初計画の実践発表会の「対話セッション2023」から「ConnectEd 2023」に名称を変更し、WWL指定初年度から使用されることとなった。カリキュラム委員会においても、社会とつながるカリキュラムを作成すること、グラデュエーション・ポリシーを新たに改編し、イノベティブなグローバル人材像を制定したカリキュラムマップの作成をスタートした。

令和5年度の活動は、こうした新しい挑戦や仕組み作りを基盤にした実践活動への検証が主となり、3つのやるべきことがある。1つ目は、海外の提携校との交流や留学生との交流の推進である。国内での交流は、一定の評価を得たと感じるものの海外交流に関しては、新しい挑戦ができてない。オンラインでの対話や対面での交流の域を脱していない。その点を踏まえて、協働のレベルを「交流」でなく、「共に活動する、共に学ぶ」レベルまで上げていきたい。2つ目が、仮想空間の活用を改善することである。一時的な交流の場ではなく、いつでも学べる空間を構築する必要がある。令和4年度の仮想空間 (Zoom) での実践活動を行うことによって、その良し悪しを検証することができた。その点も踏まえて、さまざまなツールを的確に使い分け、ALネットワークで活用できる新しい学びの空間を再構築していく。最後に、「New Borderless Education」を実践すること。高校生が考えたこの提言を学校として最大限のサポートをしていきたい。そのために外部組織との連携や交流の機会の増加、学校内の情報に止まらないフィールドワークや探究学習を中心とした新しい学びの創出や高校生が新しい技術やスキルを体験できる機会の創出などを行う。Borderlessとは、その裏側には挑戦という意味があり、その結果として失敗も多く存在する。Borderがあれば、安全ではあるがその壁の向こうには行けず、新しい景色を見ることも新しい人との出会いもない。その点も踏まえて、Borderlessな実践に関して、

学校全体として挑戦や失敗を許すことができる寛容な姿勢も必要である。また、教員も新しい世界への挑戦をし続ける態度も必要がある。そして、新しい科学技術やスキルの獲得も必要な反面、最終的に「人」の変革が必要であることを忘れてはならない。「人は城、人は石垣、人は堀、情けは味方、仇は敵なり」。戦国武将武田信玄が話したと言われる。城や石垣や堀を良くしても意味がない。人こそが国を支える重要な要素である。そして、その人の心には情けの心が必要である。AIなどの先端技術が急速な進化を遂げ、シンギュラリティも間近であると言われる現代社会においても、戦国時代の言葉の大切さは変わらないと感じる。先端技術を使うのも人である。その人の志や知識、経験の違いによって、その先端技術を良くも悪くもする。本校が掲げる人材像にも「寛容な態度をもって」という文言がある。寛容な態度をもって人や自然に接し、新しい時代を生き抜く術を身に付け、変革を促す人材。これが本校の目標である。WWL活動において、令和5年度もこれを忘れてはならない。そのために必要なことはまだあるという探究心を忘れず、常に失敗を繰り返し、チャレンジをしていきたい。

名古屋国際中学校・高等学校
国際教育推進主任
黒宮 祥男

文部科学省 WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業

名古屋国際中学校・高等学校

2022年度 研究開発実施報告書

2023年3月発行

発行 学校法人栗本学園 名古屋国際中学校・高等学校

〒466-0841 愛知県名古屋市昭和区広路本町1-16
TEL：052-853-5151

印刷 株式会社 NPCコーポレーション

〒530-0043 大阪府大阪市北区天満1丁目9番19号
TEL：06-6351-7271
FAX：06-6352-7479



名古屋商科大学系列校

名古屋国際 中学校
高等学校

NUCB INTERNATIONAL JUNIOR & SENIOR HIGH SCHOOL